博士論文

カ節を持つ構文の記述的研究

―間接疑問の周辺―

名古屋大学大学院人文学研究科
人文学専攻

全　弘起

2022 年 11 月

目次

第１章　序論 **5**
1　研究の背景 5
2　研究データ 10
3　研究の目的・構成 13
第２章　先行研究の概観と本研究の意義 **18**
1　はじめに 18
2　「か」について 18
3　引用構文 23
3.1　引用構文とは 24
3.2　「～と思う」について 26
3.3　「～かと思う」構文について 31
4　間接疑問構文 32
4.1　間接疑問構文とは 33
4.2　カノ構文について 41
5　韓国語の間接疑問構文 43
6　日韓の間接疑問構文 48
7　先行研究を踏まえての本研究の意義 49
第３章　「～かと思う」構文の下位タイプ **51**
1　はじめに 51
2　問題提起 51
3　「～かと思う」構文の下位タイプ 52
3.1　独白の疑問を直接引用しているタイプ 55
3.2　平叙節を「かと思う」が受けるタイプ 62
4　「～かと思う」の下位タイプの相互関係 66
4.1　新たな気づき（3.1.2）と非現実性認識（3.2.1） 66
4.2　推量（3.1.3）と非現実性認識（3.2.1） 67
4.3　推量（3.1.3）と断定和らげ（3.2.2） 68
5　まとめと今後の課題 69
第４章　カノ構文と被修飾名詞の種類 **73**

1　はじめに 73
2　先行研究と問題提起 75
3　カノ構文の下位タイプと被修飾名詞の種類 78
3.1　間接疑問構文に言い換えられるカノ構文 79
3.2　通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文 87
3.3　選言文に関わるカノ構文 93
4　カノ構文の被修飾名詞となることが難しい名詞 102
5　まとめと今後の課題 103
第５章　カト構文と間接疑問構文の相関関係 106
1　はじめに 106
2　カト構文と間接疑問構文の形式的な相違点 106
2.1　文の基本的な構造 107
2.2　従属節の疑問のタイプ 108
2.3　主節述語動詞 112
2.4　モダリティ 117
3　両構文の本質的意味の差 119
4　両構文が隣接する場合 121
4.1　「～カト＋対処タイプの主節述語」 121
4.2　「～スルカ-ノ/トノ/トイウ AbsN（抽象名詞）」 123
5　まとめ 125
第６章　間接疑問構文の日韓対照研究 127
1　はじめに 127
2　先行研究と問題提起 127
3　韓国語の間接疑問構文 136
4　日本語の間接疑問構文と韓国語の間接疑問構文 139
4.1　間接疑問構文のタイプ 140
4.2　間接疑問節の疑問文のタイプ 145
4.3　日韓の間接感嘆構文 148
4.4　間接疑問構文の主節述語 150
5　まとめと今後の課題 155

第７章　　結論と課題..... 158
1　　本論文のまとめと結論..... 158
1.1　第３章　「～かと思う」構文の下位タイプのまとめ..... 158
1.2　第４章　カノ構文と被修飾名詞の種類のまとめ..... 161
1.3　第５章　カト構文と間接疑問構文の相関関係のまとめ..... 163
1.4　第６章　間接疑問構文の日韓対照研究のまとめ..... 165
2　　本論文の結論..... 166
3　　今後の課題..... 168
参考文献..... 170
初出一覧..... 176
謝辞..... 177

第１章　序論

1　研究の背景

本研究の研究対象である、カ節を持つ構文[1]とは、次のような文のことである。まず、カ節とは(1)の「彼もこの部屋にいたのか」のように、従属節として使われており、それ自体が主語と述語を備え、かつ助詞「か」で終わる節のことを指す。このようなカ節を文中に従属節として持つ構文のことを、カ節を持つ構文と呼ぶ。カ節を持つ構文には、以下の(1)～(3)のような多様なタイプがある。

(1) 私はその時、彼もこの部屋にいたのかと思いました。[2]
(2) 彼が来るか来ないかがまだ分からない。
(3) 自動車が産業として成立するかしないかのうちからレースが行なわれ始めた。

(1)は話し手がどのように思っていたのかを、引用のマーカー「と」を用い、その具体的な内容を従属節の中に引用している引用文[3]である。この文は、カ節が従属節として文中に含まれており、形式的には、疑問文を「～と思う」で引用しているように見える文である。本研究では、(1)のように、カ節を持っている引用構文のことをカト構文と呼ぶ。カト構文は、従属節が疑問文の形式になっており、新たに気づいたこと、誤解していたこと、比喩比況、断定していることなどを表している構文である。カト構文のこのような性質については、カト構文の下位タイプである「～かと思う」構文について扱った第３章と、間接疑問構文との相関関係について扱った第５章で論じる。

(2)は、引用のマーカーがなく、話し手が持っている疑問を聞き手に直接尋ねるのではなく、

---

[1] 本研究で意味する構文とは、Goldberg (2006) の定義により、「形式と意味の対応物であり、その形式もしくは意味のある側面が、構文の構成要素もしくは既存の他の構文から厳密に予測できないもの、また予測できたとしても、その全体の出現頻度が高いもの」とする。
[2] 以下特に出典が明記されていない場合は、著者による作例である。
[3] 引用文については、引用構文として第２章で詳しく説明する。

その疑問を一つの節とし文の中に納めて、間接的に疑問を表している間接疑問文[4]である。この文は「彼が来るか来ないか」という疑問に対して、「まだ分からない」という疑問の答えに焦点を当てている文である。

一方、(3)も一見(2)と同じタイプの文に見えるが、(3)は「自動車が産業として成立するかしないか」という疑問に対して、その答えに焦点を当てているわけではない。この文は「自動車が産業として成立するかしないか」という名詞修飾節で、被修飾名詞の「うち」とともに「自動車が産業として成立してすぐ」という意味を表している文である。本研究では、(3)のように、「～カ＋ノ＋N（被修飾名詞）」節を含む文のことをカノ構文と呼ぶ。以上の３つの文は、すべて疑問の「か」を従属節に含む点で共通しているが、(1)ではカト節が副詞節として、(2)ではカ節が名詞節として、(3)ではカノ節が形容詞節として使われている[5]。

以上の(1)～(3)のカ節の「か」は疑問・不定の意味を表している。一方、同様に疑問・不定の「か」を持つカ節であっても、次の(4)と(5)は、その意味にやや違いがみられる。(4)の「か」は話し手の断定を和らげる意味を表していて、(5)の「か」は話し手が新たに気付いたことに対する驚きの意味を表している。このように、同じカ節であっても、異なる意味を帯びる場合があることが分かる。

(4) この問題は簡単に解けるかと思います。
(5) そういう意味だったのかと思った。

以上見たように、カ節自体の疑問・不定の意味には多様な拡がりがあり、カ節を持つ文にも様々な種類のものがあることが分かる。そのため、本研究では、カ節を持つ構文にどのようなタイプがあり、これらのタイプがどのような体系を成しているのか、全体像を明らかにする。また、この目標を達成するために、カ節を持つ構文の中でも、代表的なものとして考えられる間接疑問文と引用文を中心に考察を行う。

まず、間接疑問文に関する研究としては、江口（1990、1992b、1994、1996、1998a、1998b、2002、2013など）、衣畑・岩田（2010）、Kinuhata（2012）、衣畑（2014）、志波（2015、2016）、高宮（2003、2004、2005）、中田（1979、1984）、藤田（1983、1997）、本田（2003）などがある。一方、引用文に関する研究としては、加藤（2010）、砂川（1987、1988、1989など）、鄭（1999）、

[4] 間接疑問文については、間接疑問構文として第２章で詳しく説明する。
[5] いずれもカ節自体は名詞節である。

高橋（2009）、仁田（2000）、藤田（1985、1986、1991、1997、1999、2000）、森山（1992a、1992b、1995、2000）などがある。しかし、引用文と間接疑問文の関係について考察した研究は、江口（1998b）の他には見つからず、ほとんど研究されていない。両文の関係を考察した研究が少ないのは、両文が類似しているという認識がなく、両文をまったく別のものとして扱っているためだと思われる。

確かに、間接疑問文と引用文は、文を構成する形式が表面上似ていても、異なる意味を表している。例えば、(6)は「過去の栄光を呼びもどすにはどうしたらよいのか」と考えたという意味で、(7)は実際に呼び戻す方法を考えたという意味である。(7)は、(6)から「と」を省いた文に見えるが、「過去の栄光を呼びもどすにはどうしたらよいのかを考えた」という文から「を」を省いた文である。つまり、両文は文の形態において非常に類似しているものの、意味が異なる。(6)は一般に引用文と呼ばれる文で、(7)は一般に間接疑問文とされる文であり、異なる表現形式ではある。

(6) 過去の栄光を呼びもどすにはどうしたらよいのかと考えた。（引用文）
(7) 過去の栄光を呼びもどすにはどうしたらよいのか考えた。（間接疑問文）

一方で、上記の文の主節述語を「考えた」から「聞いた」に変えた次の(8)、(9)では、意味的にもかなり近くなる。(8)は「過去の栄光を呼びもどすにはどうしたらよいのか」という文を、聞き手に発したという意味の引用文である。これに対し、(9)は「過去の栄光を呼びもどすにはどうしたらよいのか」という文を、そのまま聞き手に発したという意味ではなく、実際に呼び戻す方法を尋ねたという意味の間接疑問文である。しかし、(9)で、実際に呼び戻す方法を尋ねる際には、「過去の栄光を呼びもどすにはどうしたらよいのか」という内容を持つ質問をすることになる。つまり、主節述語が「聞く」の場合は、間接疑問文と引用文が意味的にも非常に隣接することになる。

(8) 過去の栄光を呼びもどすにはどうしたらよいのかと聞いた。（引用文）
(9) 過去の栄光を呼びもどすにはどうしたらよいのか聞いた。（間接疑問文）

このように、引用文と間接疑問文は、基本的には異なる構文であるが、ある条件が満たされれば、意味的に隣接するという関係にある。よって、両構文はまったく関係のないものではな

く、引用文と間接疑問文の関係について、研究する必要が十分にあると考える。

また、上記の(8)のような、従属節としてカ節を持つ引用文についての研究も、鄭（1999）以外のものは見つからず、ほぼ研究されていない。それは、従属節としてカ節を持つ引用文のことを、単にカ節の疑問文を引用している文として扱うことが多いためだと考えられる。しかし、従属節としてカ節を持つ引用文には以下の(10)のような文がある。

(10)この文がいいかと思います。

(10)は、形式的には、疑問文を「～と思う」で引用しているように見えるが、実際には「この文がいい」ということを、断定しない言い方で表している文である。このように、カ節を持つ引用文には、文の構成要素のみでは文の最終的な意味を予測できない慣用的な言い回しがあり、カ節を持つ引用文についても研究する必要があると考えられる。

以上の理由から、カ節を持つ引用文についての研究を始めとし、カ節を持つという点で共通している間接疑問文との関係にまで考察の範囲を広げる必要がある。さらに、日本語の引用文や間接疑問文だけではなく、異なる言語ではあるが、文法的に類似している点が多い韓国語の引用文や間接疑問文との比較を行うことで、日本語の引用文と間接疑問の本質を、より正確に把握することが可能であると思われる。例えば、(11)と(12)は、韓国語の引用文と間接疑問文であり、文の構成が日本語とかなり類似している。

(11)지현　씨가　몇　시에　집에　돌아오냐고　했어요.（引用文）

jihyeon　ssi-ga　myeot　si-e　jibe　doraonyago　haess-eo-yo.

ジヒョンさんが　何　時に　家に　帰ってくるのかと　言いました。

(12)누가　약속을　어겼는지　모른다.（間接疑問文）

Nu-ga　yaksogeul　eogyeossneunji　moreun-da.

だれが 約束を　破ったのか　分からない。

なお、本研究では「引用文」と「引用構文」および「間接疑問文」と「間接疑問構文」という用語を区別せず、前者は「引用構文」、後者は「間接疑問構文」という用語を用いて記述する。本研究で「構文」という用語を採用したのは、「引用文」や「間接疑問文」が、意味と形式が統合したパターンとなった「構文」であると考えるからである。

この節の冒頭で挙げた(13)～(15)のような例はカ節が埋め込み文、もしくは、カ節が格助詞を必要とし、述語との格関係が読み取れるタイプである。このタイプは上で確認したように、それぞれ引用構文、間接疑問構文、カノ構文であり、構文として考えられるタイプに該当する。

(13)私はその時、彼もこの部屋にいたのかと思いました。((1)再掲)（引用構文）
(14)彼が来るか来ないかがまだ分からない。((2)再掲)（間接疑問構文）
(15)自動車が産業として成立するかしないかのうちからレースが行なわれ始めた。((3)再掲)（カノ構文）

しかし、本田（2003）によると、カ節と述語の間の格関係を考えるには無理があって、題目（topic, theme）とそれに対する評言（comment,rheme）で文が構成される「題述関係」として捉えられる次の(16)～(18)のようなタイプもある。

(16)大統領が本当に指導力を回復できるかどうかは、弾劾裁判の行方を見守るしかあるまい。（本田（2003：68）の用例 14a）
(17)既に消滅した政党の名簿に載っている候補者が繰り上げ当選する場合、どのような対応をするかという点で、論議を呼びそうなケースでもある。（本田（2003：68）の用例 14b）
(18)現行のまま制度を存続させるか、修正を加えるかについて、今後、さらに検討する。（本田（2003：68）の用例 14c）

これらは文の全体の意味が構成要素から十分予測できる上、反復され使われることにより構造的にパターン化された表現でもないため、本研究では構文として呼ばないタイプである。したがって、本研究の研究対象から除外する。一方、文中で格関係的な位置づけを持たないカ節を、「その、それ、そこ、これ」のような指示詞で指示する例があり、本田（2003：70）はこのようなタイプを題目のカ節を格関係に結びつける「橋渡し構文」と定義している。

(19)「富士の美」展は、平安から戦前までの書画や工芸品に、人々がこの山をどう眺め、描いてきたのか、その変遷がうかがえて面白い。（本田（2003：70）の用例 20a）
(20)かけがえのない財産を失ってまで実施する必要性があるかとなると、これが疑問だ。（本田（2003：70）の用例 21a）

(21)この言葉は著者が本書をなぜかいたのか、執筆動機を明らかにしている。(本田(2003: 71)の用例 23)

上記の(19)～(21)は、題目のカ節を格関係に結びつける「橋渡し構文」である。例えば、(19)と(20)の場合、カ節を示す指示詞の「その」、「これ」を含んだ名詞句が、格助詞の「が」をとって述語の項として機能している。(21)は「執筆動機」の前に「その」が省略されていると考えられる。これらのタイプは反復され使われることにより構造的にパターン化された表現であり、本研究の研究対象とする。

2　研究データ

本研究では、現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT))、名大会話コーパス、韓国語コーパスの国立国語院の말뭉치（マルムンチ）という３つのコーパスを使用した。収集した用例は、「～かと思う」構文の 500 例、カノ構文の 700 例、カト構文の 800 例、間接疑問構文の 500 例、韓国語の「-는지（-neunji)」の間接疑問構文の 500 例の総計 3,000 例である。この 3,000 例を分析し、カ節を持つ構文の記述的研究を行った。構文別の分析データは以下のように集めた。

(ア)「～かと思う」構文

現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版(BCCWJ-NT)と名大会話コーパスを用い、文字列検索のタブを選択した後、以下のような条件で検索を行った。

検索文字列：かと思

検索対象：出版年：2000 年代

現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT）の検索結果は、全 9,620 件の用例が見つかった。全体の用例を Excel でランダムに順番を並べ替え、上から順番に 300 件[6]を用いて分

[6] 用例を集計し出現頻度や傾向の割合を出すためには、300 例から 1000 例程度が妥当かと思われる。無論、用例数が多ければ多いほど、出現頻度や傾向がより正確に把握できると考えられるが、ランダムで 300 例を

析を行った。名大会話コーパスの検索結果は、全 231 件が見つかった。全体の用例を Excel でランダムに順番を並べ替え、上から順番に 200 件を用いて分析を行った。

(イ)カノ構文

現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT）を用い、短単位検索のタブを選択した後、以下のような条件で検索を行った。

キー：書字形出現形が「か」　＆　品詞の大分類が「助詞」
後方共起１（キーから１語）：書字形出現形が「の」　＆　品詞の大分類が「助詞」

検索の結果、全 22,372 件の用例が見つかった。全体の用例を Excel でランダムに並べ替え、上から順番に 4,960 件を用いて分析を行った。4,960 件の用例の中で、修飾節の部分が不定の意味の一語と思われる「どこかの」、「いくつかの」、「何人かの」、「いずれかの」、「何らかの」などになっている 4,260 例は派生語であるため、除外した。その結果、700 例がカノ構文であり、それらを最終的な分析対象[7]とした。

(ウ)カト構文

現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT）と名大会話コーパスを用い、短単位検索のタブを選択した後、以下のような条件で検索を行った。

キー：書字形出現形が「か」　＆　品詞の大分類が「助詞」
後方共起１（キーから１語）：書字形出現形が「と」　＆　品詞の大分類が「助詞」

現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT）を検索した結果、全 53,921 件の用例が見つかった。全体の用例を Excel でランダムに並べ替え、上から順番に出典が小説である 458 例のカト構文を用いて分析を行った。名大会話コーパスの検索結果は、全体 602 件がヒットし、その中の 342 件を用いて分析を行った。

抽出しているため、用例の出現頻度や傾向は十分把握できると考える。
[7] カノ構文についても、名大会話コーパスを使用し調べたが、修飾節の部分が、不定の意味の一語と思われる「どこかの」、「いくつかの」、「何人かの」、「いずれかの」、「何らかの」などの例がほとんどであり、分析対処から除外した。

(エ)韓国語と日本語の間接疑問構文

韓国語については、韓国語コーパスの国立国語院の말뭉치（マルムンチ）を使用した。ランダムに選んだ文語マルムンチの 10 の小説から、上から順番に「-는지（-neunji)」の間接疑問構文を 500 例抽出し、分析を行った。日本語については、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT)』を使用した。短単位検索のタブで以下のような条件で検索を行った。

書字形出現形＝か　＋　品詞の大分類＝助詞

検索対象：出版年 2000 年代

検索の結果、全 557,767 件の用例が見つかった。全体の用例を Excel でランダムに順番を並べ替え、上から順番に 500 件を用いて分析を行った。

3　研究の目的・構成

本研究では、引用構文と間接疑問構文の意味と構造的特徴を把握した上で、両構文がどのように相互の体系を成しているのかを明らかにすることを目指す。そのための本研究の構成や具体的な研究課題は、以下の通りである。

第２章では、先行研究の概観と本研究の意義について言及する。まず、本研究の５つのキーワードである①「か」、②引用構文、③「～かと思う」構文、④間接疑問構文、⑤カノ構文について、それぞれの定義や特徴などを、先行研究を通して確認する。次に、「～かと思う」構文とカノ構文についての先行研究がほとんどないこと、間接疑問構文と引用構文の関係を考察している先行研究もほとんどないことなど、先行研究を踏まえての本論文の意義について論じる。

第３章では、課題１として「～かと思う」構文の下位タイプについて考察を行う。「～かと思う」という表現形式を持つ文に、これまでの研究では具体的に指摘されてこなかった「誤解した内容や比喩比況」という特殊な意味があることを指摘する。また、本研究では、「～かと思う」構文の下位タイプには【図 1】のような文があることが分かったが、各タイプの構造、意味、特徴について明らかにする。

【図1】カト思う構文の下位分類

カト思う構文

① 独白の疑問を直接引用しているもの（「カ節-と思う」）

単純疑問引用「「何かが落ちたのか」と思った」

新たな気づき「「今日で新学期が始まったのか」と思った」

モダリティ　推量「「明日は雨が降るんじゃないか」と思った」

願望「「この会議を２時までに終えてくれないか」と思った」

意志「「本を買いに行こうか」と思ったが、明日にすることにした」

② 平叙節を「かと思う」が受けるタイプ（「節-かと思う」）

非現実性認識　誤解内容「今日が締め切りかと思ったんだけど、昨日だった」

比喩比況「地球が滅びるかと思った」

断定和らげ　「こっちを選んだほうがいいかと思います」

さらに、「～かと思う」構文の下位タイプは、互いの構造と意味に違いがあるが、特定の構造的な条件の下では互いの意味や機能が似通うことがある。そのため、どのような条件が満たされれば、似通うことになるのかについても考察を行う。最後に、このような各下位タイプの相関関係を明らかにし、「～かと思う」構文全体がどのような体系を成しているのかを明らかにする。

第４章では、課題２として、カノ構文と被修飾名詞の種類について考察を行う。カノ構文について調べる理由は、カノ構文は間接疑問構文の典型ではないが、間接疑問構文に近いタイプでありながら、同時に引用構文とも関係があるためである[8]。カノ構文は、次の【図 2】のように、異なる下位タイプが存在するにも関わらず、これまでの研究では、カノ構文の下位タイプについて記述されることはなかった。

【図2】カノ構文の下位タイプ

カノ構文

① 間接疑問構文に言い換えられるカノ構文：

車の内部の電気部品が壊れているかどうかの検査は必須である。

→車の内部の電気部品が壊れているかどうか検査する必須がある。

② 通常の連体修飾に言い換えられるカノ構文：

どうして毎年夏の平均気温が上昇するのかの原因については、誰も興味がない。

→毎年夏の平均気温が上昇する原因については、誰も興味がない。

③ 選言文に関わるカノ構文：

彼は生きるか死ぬかの瀬戸際に追い込まれていた。

また、カノ構文の修飾節と被修飾名詞との関係に、何らかの関わりがあると予想される「被修飾名詞の種類」に関しても、ほとんど言及されていない。したがって、本研究では、「～カ＋ノ（修飾節）＋ N(主節主語としての被修飾名詞) ＋ 述語」という構造を持つカノ構文について、「～カ＋ノ」という修飾節と被修飾名詞との関係により、次の【表 1】のように下位分類を行う。また、どのような名詞が被修飾名詞になるのかによって、修飾節と被修飾名詞との関係がどのように異なるのかについても明らかにする。

[8] 第２章の 4.2 で詳細を説明する。

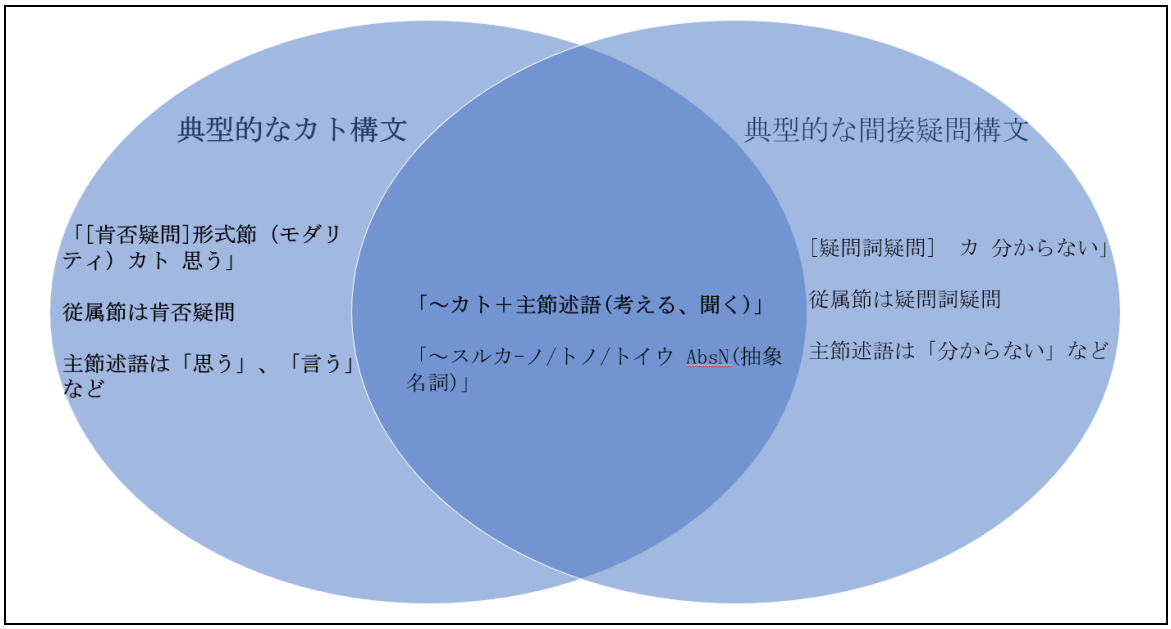
【表1】カノ構文の下位タイプと被修飾名詞の種類

カノ構文の種類	下位タイプ	被修飾名詞となる名詞
間接疑問構文に言い換えられるカノ構文	判断タイプ	**思考や認識を表す動作性名詞**： 判断、判定、見極め、見通し、予想、区別、選別、選択、確認、比較、把握など
	問題・疑問タイプ	**問題・疑問に関する名詞**： 問題、問い、ほう、一点、点、ポイント、内容、課題など
	検証タイプ	**検証を表す動作性名詞**： 実験、研究、調査、分析、吟味、議論、論議、検証、証明、試験、検討など
	言語表現タイプ	**言語表現を表す動作性名詞**： 説明、話、記録、記述、質問など
	心情タイプ	**心情を表す名詞**： 不安、苛立ちなど
通常の連体修飾に言い換えられるカノ構文	証拠タイプ	**証拠を表す名詞**： 証左、証、証拠、確証、証し、根拠など
	原因タイプ	**原因に関する名詞**： 理由、原因など
	印象タイプ	**心情を表す名詞**： 感、観、意、印象など
	手段タイプ	**手段に関する名詞**： 手段、方法、戦略、手練手管、検査法など
	過程タイプ	**過程を表す名詞**： 過程、径路、プロセス、経緯など
選言文に関わるカノ構文	分かれ目タイプ	**分かれ目に関する名詞**： 瀬戸際、岐路、分岐点、分かれ目、分かれ道、限界、二者択一、天王山、基準、尺度、目安、二途など
	差異タイプ	**差異を表す名詞**： 違い、差、相違、差異、有無など
	時間タイプ	**時間に関わる名詞**： うち、ころ、時、瞬間、時期、タイミングなど
	結果タイプ	**結果を表す名詞**： 結果

第５章では、カト構文と間接疑問構文の相関関係は、【図 3】のようになることが本研究で明らかになったが、課題３として、なぜこのような関係になるのかについて考察を行う。引用構文であるカト構文と、間接疑問構文が、どのような点で異なっているのか、まずは、その構造と形式の面の相違点から考察を行う。また、両構文の間でこのような構造と形式の差が観察さ

れる理由は、両構文の持つ本質的意味がどのように異なっているためなのかについても考える。一方、この２つの構文は、隣接する場合がある。そのため、どのような条件で両構文が隣接するようになるのかについても分析を行う。このような研究の流れで、両構文はお互いにまったく関係のない構文形式ではないことが明確になり、両構文がどのような関係を結んでいるのか、その全体の体系を明らかにすることを目的とする。

【図3】典型的なカト構文と典型的な間接疑問構文の関係



第６章では、課題４として間接疑問構文の日韓対照を行う。日本語の間接疑問構文に該当する韓国語の表現形式にどのようなものがあるのかを明らかにし、日韓の表現形式における共通点と相違点を明確にすることを目的とする。間接疑問構文に関する研究は韓国語の場合はほとんど行われておらず、韓国語の文法において、間接疑問という概念さえ文法用語として定着していないように思われる。そのため、間接疑問構文の意味・構造的な特徴やその下位分類やタイプについての研究が進んでいる日本語に照らし合せ、韓国語の間接疑問構文の下位タイプにどのようなものがあるのかを明らかにする。また、韓国語との対照を行うことで、韓国語の間接疑問構文についての議論を可能とし、さらに、両言語の共通点と相違点を明らかにすることで、言語理解の発展に寄与することを目標とする。

第７章では、まず、第３章から第６章までの内容を簡単にまとめる。次に、本研究で明らかになったことや引用構文と間接疑問構文の体系の全体図を結論として提示する。最後に、引用

構文と間接疑問構文の関係をめぐって残された課題を示す。

本研究では、このような構成と流れで、「カ節を持つという共通点」がある引用構文と間接疑問構文について、この両構文に属する構文（カト構文、カノ構文）のタイプや相関関係を把握し、この両構文が全体的にどのような体系を成しているのかを明らかにする。

第２章　先行研究の概観と本研究の意義

1　はじめに

本章ではまず、本研究のキーワードである、「か」、「引用構文」、「間接疑問構文」についての先行研究を簡単に述べる。次に、韓国語の間接疑問構文についての議論や日韓の間接疑問構文を対照している先行研究を検討する。最後に、これらの先行研究を踏まえての本論文の意義について説明する。

2　「か」について

カ節を持つ構文について論じる前に、まず「か」についての先行研究を概観する。衣畑・岩田（2010）は、「か」の歴史について、「か」は中古まではほぼ「疑問の助詞」として用いられており、時代が下ると「か」の用法は時系列で、選言、間接疑問、不定の順に発生しているとしている。具体的には、「カは中古まではほぼ疑問の助詞として用いられており、その後少なくとも 14 世紀までに、文を並列するカで、選言と意識される用法が発生した」と述べている（衣畑・岩田 2010： 8)。「か」の選言の用法については、句が並列されているという特徴を持つ、次の(22)のような文を指すとしている。

(22)今日は弁当を買うか、食堂に行くか。（衣畑・岩田（2010： 1）の用例 1b）

また、「選言という意識が強くなると名詞を並列させることも可能になり、15 世紀以降の文献に名詞句を並列する選言の用法が見られるようになる。その後、近世に入り、名詞句の位置では最後のカがない「N か N」という形が普通になった」と述べている（衣畑・岩田 2010： 8)。選言の次に現れたとみている間接疑問については、間接疑問は選言の影響を受けずに独自に発生していると指摘しながら、(23)のように、「カが節をとり、動詞の項となってい

る場合、動詞は「知る」「聞く」などの、節を選択する動詞でなければならない。このような例は間接疑問文と考えられる」と述べている（2010：6）。

(23)あの男が何を手にしていたかは分からない。（衣畑・岩田（2010：1）の用例 2d）

「か」の不定用法については、「不定は、句が単独で用いられ、疑問詞を持つものをさす（衣畑・岩田 2010：10）」とし、次の(24)のような文を不定の例として提示している。さらに、「カの不定の成立は、選言からの変化ではなく、疑問のカが疑問詞を取れるようになったことによって、成立したものと考えられる（衣畑・岩田 2010：11）」としている。

(24)あの男は何か（透明の液体）を手にしていた。（衣畑・岩田（2010：11）の用例 2c）

また、不定の「か」は、まず、副詞的な例が 18 世紀ごろに現れ、その後、(24)のような名詞の例が現れているとし、この時期に、間接疑問文においても、「か」が疑問詞を取る例が現れていると指摘している。

衣畑・岩田（2010）の上記の記述を総合的に考えると、文末の「か」ではなく、文中の従属カ節に位置する間接疑問文の「か」は、基本的に「疑問」の意味から始まり、「か」の前に疑問詞が位置する場合は、不定の「か」として解釈されたことが分かる。つまり、本研究の間接疑問の「か」は、衣畑・岩田（2010）に従い、基本的に「疑問・不定」の「か」として定義する。しかし、このような分類は「か」の使い方の歴史的な変化を、「か」の意味よりは、文中の位置を含む形式的な面に着目して分類したものと考えられる。

「か」の意味的な側面に注目している研究は、益岡（2007）が挙げられる。益岡（2007）は「か」のことを「「不定性」を表す助詞（標識）」と考え、「か」が持つ不定真偽判断の用法には、【表 2】のように、認識系と感情系の２つがあるとしている。具体的には、認識系には、①質問・自問、②不確かさ、③納得・了解、④発見があり、事態の真偽に関する認識の在り方を表す。感情系には、⑤驚き・感嘆・詠嘆、⑥不満、⑦反語・擬似反語があり、話し手の感情の関与という共通点がある。この研究は、「か」が用いられる文には、認識面の不定性が前面に出るタイプと感情面の不定性が前面に出るタイプの２つの用法があるという理論を展開している。

【表2】益岡（2007）の「か」の用法の分類

認識系	① 質問・自問 (25)引っ越されたのはご結婚のためですか。（益岡（2007：172）の用例 25）
	② 不確かさ (26)ま、これならいいか。（益岡（2007：172）の用例 28） (27)こうして信夫が投じた洪積世人骨という一つの過は、考古学、人類学会に大きな波紋を広げていくかに見えた。（益岡（2007：172）の用例 29） (28)なにか郵便屋でも来たのかと思った。（益岡（2007：172）の用例 30）
	③ 納得・了解 (29)それが舞踏の訓練に加えて、スキューバダイビングによって保たれているのかと納得した。（益岡（2007：172）の用例 34） (30)「いやあ、奥さん、僕はとっても楽しいです。」ろれつの回らなくなった舌で邪魔者はわめいた。「ああ、そうですか。」なるべく感情を込めずに言った。
	④ 発見 (31)病院の住所は牛込であった、地図を調べてすぐ場所を突き止めた。入院していたのか。（益岡（2007：172）の用例 36）
感情系	⑤ 驚き・感嘆・詠嘆 (32)とうとうボケ始めたか。たまには違う話題にしてほしいね。（益岡（2007：172）の用例 38） (33)どんなに嬉しかったことか。（益岡（2007：173）の用例 39） (34)もう夏も終わりか。（益岡（2007：173）の用例 40）
	⑥ 不満 (35)あの人々を殺すのはおれだ、と絶えず意識しながら私は家族の生存を計らねばならぬのか。（益岡（2007：173）の用例 41） (36)親父たちがいたら、叔母の世話ぐらいできないのかと必ず文句を言ったに違いない。（益岡（2007：173）の用例 42）
	⑦ 反語・擬似反語 (37)おれがそんなこと知るか。（益岡（2007：174）の用例 43） (38)名簿や制服、黒板に名前を書くチョークの色まで、男女に差をつけることに意味があるのか。（益岡（2007：174）の用例 46）

一方で、林（2019）では、上記の益岡（2007）の「か」の用法の分類について、次の２点を問題としている。まず、文末で使われている「か」と文中で使われている「か」を区別せず、分類している点を挙げている。例えば、(27)、(28)、(29)、(36)は文中の「か」で、他の例は文末の「か」であることを指摘している。特に、文中の「か」は、「～か」のみで不定真偽判

断のタイプを判別することは難しいと述べながら、「か」に続く動詞の語彙的意味に左右されると強調している。不確かさの「か」と分類された(28)の「なにか郵便屋でも来たのかと思った。」と納得・了解の「か」と分類された(29)の「それが舞踏の訓練に加えて、スキューバダイビングによって保たれているのかと納得した。」は、「か」の部分だけをみて、それぞれ、②不確かさと③納得・了解の用法であると分類することは無理があるとみている。次に、「か」が不定真偽判断の用法として使われていない例があることを問題として言及している。例えば、次の(39)と(40)の「か」は、聞き手の意向を尋ねる用法であり、不定真偽判断の用法には含まれないと指摘している。

(39)明日一緒に映画を見に行こうか。
(40)(友達とレストランに来て、メニューを見ながら）何を食べようか。

林（2019）は上記のことを踏まえ、文中の「か」は、後続する動詞が持つ語彙的な意味を考慮せずに、意味や働きを論じることは難しいと述べている。こうした理由から、林(2019)は文中の「か」は除き、文末の「か」だけを対象にし、以下のように会話文の「か」を分類している。非疑問の「か」には反芻、受理、戸惑い、詠嘆の４つがあり、疑問の「か」には事実追及、判断求め、意向確認の３つがあると分類している。①反芻の「か」が使われている文は、(41)、(42)のように、話し手自身が気づいたことや決めたことに「か」を添え、動作として見れば、気づきや決意を反芻し、かみしめている文である。②受理の「か」が使われている文は、(43)のように、相手の発言や新聞記事など、外から与えられる情報を受け取った話し手が、その内容を改めて言葉にして「か」を添える文である。③戸惑いの「か」が使われている文は、(44)のように、一見疑問文のように見えるが、このような文は答えを求めているわけではなく、理解に苦しむ相手の言動に対する話し手なりの解釈に「か」が添えられており、戸惑いの感情を表すものである。④詠嘆の「か」が使われている文は、(45)のように、言葉にできないほどの感動を抱えていることを言葉にしており、ある意味では矛盾した発話そのものが詠嘆であるとする。⑤事実追及の「か」が使われている文は、(46)のように、話し手がそのような事実が存在すると想像する内容に「か」を添えた文であり、もっとも典型的な疑問の文末「か」である。⑥判断求めの「か」が使われている文は、(47)のように、相手の判断や意見を知りたい場面で、相手にこのように言ってほしいという内容や相手がこのように言うであろうと話し手が思っている内容が「か」の前に置

かれる。⑦意向確認の「か」が使われている文は、(48)のように、動詞シヨウ形で表される話し手の意志に「か」が添えられた文で、話し手の意志事態に迷いはなく、相手への配慮を示す「か」が添えられるものである。

【表3】林（2019）の文末の「か」の文

		「か」の前に置かれる内容	連動する行為
非疑問	①反芻 (41) あ、怪しい者じゃないよ。幽霊だから怪しいっちゃ怪しいか（話し手は幽霊)。 （林（2019：5）の用例 19） (42) じゃ、俺も行くか （林（2019：6）の用例 20）	話し手の気づき・決意	時間をかけて消化する
	②受理 (43) タマ「猫、お邪魔してません？」 ニシノ「猫ですか」 （林（2019：7）の用例 22）	外から与えられた情報	時間をかけて受け止める
	③戸惑い (44)そんなに面白いですか（林（2019：8）の用例 25）	相手の言葉に対する解釈	相手の言動に戸惑う
	④詠嘆 (45) あなたに同情され、親切にされて、私はどんなに幸せだったか。 （林（2019：9）の用例 27）	感覚や感想	程度の大きさに感動する
疑問	⑤事実追及 (46) 君、喪服をもってきたか。 （林（2019：11）の用例 28）	そのような事実があると想像する内容	情報提供を求める
	⑥判断求め (47) 課長、見送りに言ってもいいですか。 （林（2019：12）の用例 30）	相手に言ってほしい内容・相手が言うはずの内容	相手の判断や意見を求める
	⑦意向確認 (48) 今日は何かお取りしましょうか？ （林（2019：12）の用例 32）	相手の意思	相手の意向を気にかける

文中の従属カ節に位置する「か」ではなく、文末の「か」というのは、基本的に「不定性」の意味から始まるが、益岡（2007）と林（2019）の上記の記述を総合的に考えると、大きく疑問と非疑問の２つの用法があることが分かる。また、引用文の中で文中にカ節を持つ文（カト構文）は、基本的にこのような文末に「か」を持つ文を引用しているため、カ節を持つ引用文（カト構文）の「か」の意味は、益岡（2007）と林（2019）が指摘した多様な意味を持ってい

ると考えられる。

本田（1995）は「か」について、引用部分に疑問文が来る場合、以下の主文としての疑問文の特性がすべて下節においても観察されるため、下節に現れる「か」は主文に現れる「か」と同じものと見なすことができると述べている。

(49)a 疑問にかかわる言語要素として↑、↓の音調、カ、疑問語が現れる
b 質問型と自問型とがある
c カがなくとも↑で疑問文となる
d 質問型は↑、自問型は↓の音調をとるのが基本であるが、↓でも質問と解釈できる場合がある

本田（1995）の主張によると、(50)の従属節の疑問文は主文の時、自問型と考えられるので、音調は下落の↓であり、引用部分の中でも同じく下落の↓である。しかし、引用部分の中で使われ、引用構文の一部になった場合、「か」に本来の「自問」の意味が残っているとは考え難い。話し手が(51)のように断定していることを、「か」によって柔らかい言い方で表しているのが(50)であり、(50)の「か」は自問の意味を持っているのではなく、断定の度合いを下げる婉曲の「か」である。

(50)こっちのほうが正しいかと思います。
(51)こっちのほうが正しいと思います。

婉曲の「か」を持つ(50)のような文については、第３章の３節で扱うことにする。

3　引用構文

ここでは、引用構文の定義、種類、構造について概観する。また、引用構文の中でも日常生活の中で使われていると考えられる「～かと思う」構文について整理する。引用構文に対する概観は、第５章で行う間接疑問構文との比較のために必要なので、ここで述べておく。

3.1 引用構文とは

引用構文とは、引用の助詞「と」を使い、考えたことや話したことなどを伝える構文のことである。カ節を持つ構文の一つに、この引用構文がある。まず、引用構文について、その定義を確認する。藤田（2000）では、引用構文とは、引用節（従属節）が述語（述部）と相関する構造を持つ文のことであると定義している。藤田（2000）は、引用節と述語（述部）において、事実上等しい動作・状態を表す具体－抽象の二重表現的構造のものを引用構文の最も典型的なタイプとみなし、第Ⅰ類と分類した。一方、同一場面に共存する動作・状態を表す並示的構造のものは第Ⅱ類として分類した。例えば、(52)、(53)の例を見てみよう。

【表4】藤田（2000）の引用構文の分類

	引用節と述語の関係	用例
第Ⅰ類	**具体－抽象**の二重表現的構造の関係 ［**引用節**（動作・状態を表す具体的な内容）］**と**＋［**述語**（その具体的な内容をどうしたのかを抽象的に表す動詞）］	(52)今年は必ず海外旅行に行くと思った。
第Ⅱ類	同一場面に共存する動作・状態を表す並示的構造の関係 ［**引用節**（動作・状態を表す具体的な内容）］**と**＋［**述語**（同一場面に共存する動作・状態を表す動詞）］	(53)加藤さんが「またね」と出て行った。

(52)の主節述語の「思った」は「と」の前までの具体的な内容をどうしたのかを抽象的に表す思考動詞で、引用節の「今年は必ず海外旅行に行く」という部分は、何を思ったのかその具体的な内容を提示している。つまり、(52)の引用節と述語は具体（何を思ったのかその具体的な内容）－抽象（その具体的な内容をどうしたのかを抽象的に表す動詞）の二重表現的構造を持っているとみられるため、第Ⅰ類の引用構文に該当する。(53)は「またね」という発話と「出て行った」という行為が同じ場面で同時に起きているので、これは同一場面に共存する動作・状態を表す並示的構造を持っているとみられるため、第Ⅱ類の引用構文に該当する。

藤田（1999）では、第Ⅰ類の引用構文において、主節述語は「言う」などの発話動詞や「思う」などの思考動詞を持つと述べられている。これは引用構文に最も多い典型的なタイプであると思われる。一方、第Ⅱ類の引用構文においては、「と」が「言う」と「思う」などの発話・思考動詞とは結び付かず、引用句に導かれる発話（もしくは心内発話）と共存する別の行為を表す述語と直接結びついているとしている。この場合の主節述語は「出ていく」「振り向く」な

どの動作動詞であると思われる。藤田（2000）の第Ⅱ類の引用構文については、引用節の後ろに「言って」、「思って」などの主節述語が省略されているという意見もある。しかし、本研究は、辻本（2020）が指摘しているように、第Ⅱ類の引用構文において「言って」、「思って」などの主節述語が省略されているわけではないという主張に従う。辻本（2020：7）は、「もし第Ⅱ類において「言って」が省略されているのなら、省略された「言う」の支配するニ格成分なども共起して良いはずだが、以下の(54)から分かるようにそれは無理である」と指摘し、第Ⅱ類の場合、「言って」等の省略が起きているとは考えにくいと述べている。本研究もこの辻本（2020）の見解に同意するため、藤田（2000）の第Ⅱ類の引用構文についても同じ立場である。

(54)*花子が「晴れたかな」と僕に窓を開けた。（辻本（2020：7）の用例11a）
(55)花子が「晴れたかな」と僕に言って窓を開けた。（辻本（2020：7）の用例11b）

上記で述べたように、藤田（2000）は、引用節と述語がどのような関係を持っているのかによって引用構文を定義し、その下位タイプを分類している。このような引用節と述語の関係による定義や下位分類の仕方は、第５章で引用構文であるカト構文と、間接疑問構文の本質の違いを論じる際に必要なため、ここで紹介した。

藤田（2000）とは異なる引用構文の定義も存在する。砂川（1987）は、引用構文を典型的には引用句と引用動詞、および、引用動詞の主格補語による、以下のような語の連なりとして表現されるものとしている。

(56)［主格補語］が／は＋［引用句］と＋［引用動詞］

ここで引用動詞と言及しているのは、引用の助詞「と」を取ることのできる動詞のことを意味する。引用動詞は、発言もしくは思考に関わるものに分けられる。例えば、(57)の引用動詞は発言にかかわるもの、(58)の引用動詞は思考にかかわるものである。ほとんどの引用動詞が(56)のような型の文を作る。また、(56)のような語の連なりが引用句と引用動詞の結び付きの型として最も一般的であるため、引用構文の典型であるとされる。

(57)彼は 僕は無実だと 言った
(58)私は 彼は無実だと 信じている

このように、引用構文は、構造的に「[主格補語] が／は＋［引用句］と＋［引用動詞]」が基本で、引用動詞には発言や思考に関わるものが来るのが典型であると考えられる。また、引用節とこれらの引用動詞は藤田（2000）の「具体－抽象」の関係を持っているタイプが典型であると考えられる。3.1 では、本研究の議論の中心になるカ節を持つ構文の中でも、従属節の中に「か」が入ることができる引用構文について、まず、引用構文の本質を把握するために、藤田（2000）と砂川（1987）の研究を用い、意味と構造の両面において、引用構文の定義を確認した。

最後に、第６章で韓国語の間接疑問構文について説明する際、間接引用と直接引用について言及するため、ここで引用の２つの種類である間接引用と直接引用について述べておきたい。二通（2009）は、論文を作成する際の引用の処理、つまり、文章における引用について述べている。二通（2009: 65）は、「文章の引用には、原文の一部または全体をそのまま括弧に入れて引用しているいわゆる「直接引用」と、引用者が原文を言い換えたり要約したりして、自分の文章に取り込む「間接引用」とがある」と指摘している。また、清水（2010: 54）は、「直接引用とは元論者の文言をそのまま当該の論で紹介する行為であり、間接引用とは元論者の文言の一部やエッセンスを汲み取り、当該の論の中にあった形にして紹介する行為を指す」と言及している。このように、直接引用とは(59)のように、第三者の原文や発言の一部、もしくは、全体をそのまま括弧の中に入れて伝えることである。また、間接引用とは(60)のように、第三者の原文や発言の一部、もしくは、全体をそのまま伝えるのではなく、言い換えて伝えたり、要約して伝えたりすることである。

(59) 田中さんは、「明日の午後、また伺いますので、よろしくお願いいたします。」と仰いました。

(60) 田中さんは明日の午後また来ると仰いました。

3.2 「～と思う」について

「～かと思う」について調べる前に、2 節で「～かと思う」構文の構成要素である「か」について調べたが、ここでは「か」を除く「～と思う」についての先行研究を概観しておく。「～かと思う」は「～と思う」の下位タイプであり、両構文は関係がある。そのため、まず、「～と思

う」に関する研究から「～かと思う」の部分的な側面について確認したい。

「～と思う」の性格について論じた参照すべき論考として森山(1992b)が挙げられる。森山(1992b： 113)によれば、「と思う」は「個人情報の表示」という意味を持ち、文脈の影響を受けて次の２つの用法が派生するとしている。

(61)「不確実表示用法」：土曜日は雨が降ると思う。
情報が共有される可能性がある（客観的な）場合に個人的な情報として提示することは、不確実であるということを表す。
(62)「主観明示用法」：早く就職したいと思います。
情報が共有される可能性がない（主観的な）場合に個人的・主観的なものであることを敢えて明らかにする。

また、(61)のような「不確実表示用法」は、「と思う」を取り除き(63)にした場合、事実としての文を述べることになり、元の文とは質的な意味の違いが生じるのに対して、(62)のような「主観明示用法」は、「と思う」を取り除き(64)にした場合、個人的な意見を述べることになり、元の文と質的な意味の違いは生じないとしている。

(63)土曜日は雨が降る。((61)とは異なる意味)
(64)早く就職したい。((62)とほぼ一緒の意味)

そして、「と思う」のこのような２つの用法は、引用節が客観的情報を表示しているか、主観的情報を表示しているかの差があり、「と思う」の基本的意味としては、「個人情報の表示」という点でまとめられるとしている。つまり、森山は「と思う」の引用節の情報的な性格が(63)は客観的であるが、(64)は主観的であると主張している。しかし、(61)の「土曜日は雨が降る」などの引用節が、常に客観的な情報であるのかについては疑問が残る。例えば、(65)の「日曜日の忘年会にはたくさんの人が来る」という情報は、根拠のない話し手の主観による判断の場合は、「主観明示用法」であり、出席予定の名簿などの根拠がある場合は「不確実表示用法」である。このような場合、(65)の文だけではどちらの用法であるのかを判断することが難しいと思われる。

(65)日曜日の忘年会にはたくさんの人が来ると思います。

横田（1998）も「～と思う」について上記の森山(1992b)と類似していることを述べている。横田（1998）は次の２つの文は「～と思う」の意味・用法を考えると、異なるタイプであると説明している。

(66)わたしは、きのう小林さんは学校を休んだと思います。（横田（1998）の用例 9a）
(67)（わたしは）きのうのテストはやさしかったと思います。（横田（1998）の用例 9b）

(66)、(67)は両方とも「思う」の主体は話し手であるが、(66)が客観的な事実を不確実な個人的な情報として言及しているのに比べ、(67)は個人の意見を述べているとみている。まず、(66)のような用法は、引用節内の伝達内容を客観的事実としてではなく、不確実な情報として述べるために「～と思う」を用いているとしている。そのため、この文は、伝達内容を「～と思う」を用いず、「彼はきのう学校を休んだ。」と表現する文とは明らかに異なり、話し手の思考であることを表すために「～と思う」が必要であると言及している。次に、(67)のような用法については、話し手の主観的な気持ち・意見を表現するために「～と思う」が必要であるとみている。そのため、この文は、「～と思う」を用いずに引用節内の内容をそのまま言い切りの形で表してもその意味はほとんど変わらない。また、この時の「～と思う」は、話し手の意見や意志や希望を和らげる目的で使われているため、(66)のような「～と思う」の用法と異なるとみている。

砂川（1987）は、(68)や(69)の引用動詞は、引用句に表された命題内容に対する話し手の確信の度合いを和らげるという役割を果たしており、このような働きを「婉曲」のムードと呼んでいる。つまり、(68)の「と思う」は(69)の「と思いますか」と同様に「婉曲」のムードとしての機能を果たしているとみている。

(68)恐らく間違いないと思う。（砂川（1987）の用例 40）
(69)雨が降ると思いますか。（砂川（1987）の用例 41）

また、砂川（1987）は、「～と思う」の主節主語のことを引用動詞の主格補語という表現を用い、その特徴について説明している。「～と思う」において、引用動詞の主格補語は、常に(70)のよ

うに話し手（質問文の場合は(71)のように聞き手）に限られているということが特徴であり、典型的な引用文は(72)のようにこのような制約はないとしている。これは「と思う」が典型的な引用文とは異なり、むしろ「と思いますか」にその性質が類似しているという説明である。

私
(70)＊あなたは今日中にこの仕事を終わらせたいと思います。（砂川（1987）の用例 42）
＊彼

＊私
(71)あなたは雨が降ると思いますか。（砂川（1987）の用例 43）
＊彼

私
(72)あなたは必ず行くと約束した。（砂川（1987）の用例 44）
彼

そして、これらの人称制限は、引用動詞が過去形やテイル形になると次の(73)と(74)のように失われると指摘している。つまり、「と思った」や「と思っている」の場合は、「と思う」とは別のものであり、典型的な引用文に近いという意味になる。

私
(73)あなたは今日中にこの仕事を終わらせたいと思った。（砂川（1987）の用例 45）
彼

私
(74)あなたは雨が降ると思っている。（砂川（1987）の用例 46）
彼

砂川（1987）は、以上のような現象を観察し、結論として「～と思う」の引用動詞がムードの助動詞的な用法に近付いているからではないかと主張している。砂川(1987)のこの研究では、

「と思う」は典型的な引用文とは異なり「婉曲」のムードとして使われている反面、「と思った」や「と思っている」は典型的な引用文に近いということがわかる。ここからは、「と思う」の性格は、引用動詞のアスペクトによっても変わるということが読み取れる。

また、「～と思う」をモダリティ（ムード）の観点からみた研究として宮崎（1999）が挙げられる。宮崎（1999： 3）は、「発言の場に思考の場を再現させたものであるという「～と思う」の引用文の性質から、引用節は(75)のように聞き手目当てのモダリティ要素を含まないが、単なる命題でもなく、有標的な形式の有無に関わらず、必ず、(76)のように事柄目当てのモダリティ要素を含んでいると考える。また、これは思考という行為が聞き手に対してではなく、事柄に対して行われるものであるということから導かれる、当然の帰結でもある。」と述べている。つまり、「～と思う」の引用節は、その中に、必ず事柄目当てのモダリティ要素を含まないといけないという主張である。

(75)*ねえ、座りなさいよ、と思う。（宮崎（1999: 2）の用例 5）
(76)明日は晴れるだろうと思う。（宮崎（1999: 2）の用例 5）

さらに、宮崎（1999： 3）は、「このようなことを踏まえて、(77)と(78)について解釈してみると、(77)の「ダロウ」の補文としての「明日は晴れる」は、推量判断の素材・対象として、一切の判断が加わる以前の事柄であるのに対して、(78)の「と思う」の引用節としての「明日は晴れる」は、話し手の心内に浮かんだ思考内容であり、したがって、これ自体が既に一種の判断である、と把握されることになる」と説明している。

(77)[明日は晴れる]だろう。（宮崎（1999: 2）の用例 4a）
(78)[明日は晴れる]と思う。（宮崎（1999: 2）の用例 4b）

しかし、(76)から「だろう」を省いた場合、(78)の「明日は晴れると思う」になり、上記の宮崎（1999）の説明によれば、この文の引用節の「明日は晴れる」はこれ自体が既に一種の判断であり、森山（1992b）の不確実表示用法で、引用節の情報は客観的なものという主張と相反する。

藤田（1999）や仁田（2000）では、「思う」などの思考の意味を持つ動詞が、(79)の「～と思う」のように基本形で文末に用いられると、発話のその時点での話し手の見解・思いなどの表

明の表現となるという。さらに、「思う」の主体を示す主語も１人称のみであることから、「～と思う」が「だろう」のようにムード形式化していると指摘している。

(79)それが正しいと思う。

高橋（2009）も「～と思う」は、話し手の主張を和らげる機能があると述べている。また、この種の「～と思う」は文法化が進行しつつある形式と言えると主張している。

以上のようにこれまでの研究は「～と思う」という形で記述し、「～と思う」に「か」を含んだ「～かと思う」に特別な意味・機能があることには着目していない。

3.3 「～かと思う」構文について

3.1 で確認したように引用構文は述語の動詞の種類により、いくつかのタイプが存在するが、ここでは、その中でも引用構文の典型的な例の１つ（(52)、(57)、(58)）として考えられる「～かと思う」構文を中心に、その定義と用法について述べる。まず、「～かと思う」構文とは、下記の(80)のように語尾が「～か」で終わる節を「～と思う」で引用している文のことを指す。

(80)今回の議論でどのような点が解決できたのかと思った。

これまでの研究において「～と思う」に着目した研究はあるが、「～かと思う」に着目した研究は少ない。この数少ない「～かと思う」に関する研究の中で鄭(1999)が挙げられる。鄭(1999)は、(81)のような文を従属節に「か」を含む「～と思う」の引用文として捉えており、「か」をつけることによって疑いの意味を持つと述べている。

(81)私の英語力でも分かるかと思ったんです。

庵ほか（2001: 260-262）では(82)のように、疑問・不定の「か」には、ある状況を発見し納得したことを表す用法もあるとしている。ここで注意したいのは、庵ほか（2001）の説明は、主文の「か」についての説明であり、従属節内の「か」についてではないということである。

しかし、引用構文である「～かと思う」構文の従属節の中で、「か」がどのような機能を果たしているのかについての手がかりになると考えられる。

(82)今日はもう４月なのかと思った。新学期が始まるな。

また、文末で使われている「か」と文中で使われている「か」において、「か」自体がどのような意味を持つのかという点も重要であるが、このような「か」により、「～かと思う」文の全体がどのような意味を持つのかについても注目すべき点である。次の(83)の「～かと思う」構文は、単純に「目玉が飛び出るか」という疑問文を「と思った」で引用している文ではない。「びっくりして驚くこと」と「目玉が飛び出ること」との間の類似性を基にし、現実的なことを非現実的なことで例えて表している文である。つまり、この文は比喩比況を表すタイプとして考えられる。このような「～かと思う」構文の意味については、従来の先行研究では説明できない。

(83)目玉が飛び出るかと思った。

3.1 では、引用構文を従属節の引用節と述語との意味・構造的な関係から定義していること、また、その関係は述語の動詞の種類により異なるということが分かった。また、引用構文の典型的な一つのタイプである「～かと思う」についての研究は非常に少ないが、3.3 では、「～と思う」と「か」についての研究から、「～かと思う」構文の部分的な側面について確認できた。それは、「～かと思う」構文が、どのように思ったのかをただ述べている以外に、話し手の見解・思いなどの表明、もしくは、話し手の主張を、「か」の意味・機能により、特定のムードを表している可能性があるということである。

4　間接疑問構文

ここでは、間接疑問構文の定義や構造についての先行研究を概観する。また、間接疑問構文の中で、引用構文と接点を持っていると思われるカノ構文についても確認したい。

4.1 間接疑問構文とは

まず、間接疑問構文について論じる前に、直接疑問文について簡単に調べてみる。中田(1984)によると、日本語の直接疑問文は、疑問の意味を表す文が主節に埋め込まれていない疑問文のことを直接疑問文という。また、直接疑問文の意味については、一般的に言って、その文の話者が必要な情報を欠いている時に相手にそれを求める目的を持って用いられる疑問文であると述べている。本研究では、疑問の意味を持つ文が、独立して主節として表現されている(84)のような文のことを直接疑問文と定義する。主節と従属節とで構成されており、従属節が疑問の意味を持っている(85)のような文は、直接疑問文ではない。

(84)明日何時に来るの？
(85)木村さんが明日何時に来るのか分からない。

高宮（2003）によると、直接疑問文は、自問系の直接疑問文と質問系の直接疑問文があるとしている。自問系の直接疑問文は、(86)の「何人がパーティーに出席したのだろうか」のように、聞き手ではなく自分（この文では幹事）の心の中の疑問を表現しているタイプの直接疑問文を指す。一方で、質問系の直接疑問文は、(87)のように、他者に質問を投げかける質問系の直接疑問文であると指摘している。

(86)何人がパーティーに出席したのだろうか。幹事は人を集めるのに必死だった。(高宮(2003)の用例①)
(87)何人がパーティーに出席したのですか。（高宮（2003）の脚注 14）

直接疑問文の種類には、選択疑問文、疑問詞疑問文、肯否疑問文、正反疑問文の４つがある。選択疑問文は、疑問文の中に疑問の答えが選択肢として述べられている疑問文で、(88)のような文が挙げられる。疑問詞疑問文は、疑問文の中に疑問詞が含まれている疑問文で、(89)のような文が挙げられる。肯否疑問文は、疑問の答えが YES か NO になる疑問文で YES－NO 疑問文、もしくは、真偽疑問とも呼ばれる。例えば、(90)のような文が挙げられる。最後に、正反疑問文は、選択疑問文としても分類されるが、述部が肯定・否定という、相反する形式で構成されている疑問文で、(91)のような文が挙げられる。

(88)あの動物は犬ですか、猫ですか。

(89)今日は何時に会えますか。

(90)今日も会社で徹夜するんですか。

(91)七瀬さんは今日仕事が忙しいですか、忙しくないですか。

次に、間接疑問構文について述べる。藤田（1983）は、従属句と述部が意味的呼応関係を成している構文を間接疑問構文と定義している。例えば、(92)のように「雨が降るかどうか」という未定事項に対し、述部が「ソノ答エ如何」という点に関わって意味的に関係を結んでいるような文を間接疑問構文と判断する。また、従属節の「～カ（ドウカ)」が、述語の表す思考・発言行為の内容面を示すという点で、引用構文と類似している部分もあるが、その性格において異なる文であると述べている。これは、間接疑問構文の場合、述語の表す思考・発言行為の内容面と関わっているのは、従属節の内容自体ではなく、従属節の疑問に対する答えであり、こうした点で引用構文と異なっているという主張である。例えば、(92)の述語の「わからない」は、従属節の「雨が降るかどうか」という疑問に対する答えとして考えられる。つまり、(92)の文は、従属節の答えがわからないという点に注目しており、従属節の「雨が降るかどうか」という内容自体に注目しているわけではない。

(92) 雨が降るかどうかわからない。

また、高宮（2003）は、間接疑問構文を文中に埋め込まれた疑問文が述語の補充節となった構文であるとしている。例えば、(93)の述語の「知らない」に対し、何を知らないのか、その補充的な内容が「何人がパーティーに出席したのか」と従属節で提示されていると考える。

(93) 私は、何人がパーティーに出席したのか知らない。（高宮（2003：2）の用例１）

本研究では、これらの研究を踏まえ、従属節の疑問と主節述語が意味的に「疑問」と「答え」の関係を成している構文のことを間接疑問構文として扱う。例えば、(94)は間接疑問構文であり、(94)の従属節の「今年の世界経済成長率がどのくらいなのか」という疑問に対し、主節述語の「分からない」は、その答えと考えられる。

(94)今のところ、今年の世界経済成長率がどのくらいなのか分からない。

このような間接疑問構文の性質について論じている先行研究は、藤田（1983、1997）を挙げられる。藤田（1983、1997）では、間接疑問構文の従属句と主節述語の関係を「一種の応答的意味関係」と見なし、主節述語には未決、既決、対処の3つがあると述べられている。まず、未決とは、(95)のように、従属句の「彼が来るか来ないか」という疑問に対して、主節述語が、その答えが「分からない」という未決の意味（「知らなかった」）を持つタイプを指す。

(95)太郎は、彼が来るか来ないか知らなかった。（(藤田1997：160）の用例(1)）　➡　未決

次に、既決とは、(96)のように、従属句の「鯨が魚か動物か」という疑問に対して、主節述語が、その答えが「分かる」という既決の意味（「知っている」）を持つタイプを指す。

(96) 鯨が魚か動物か子供でも知っている。（(藤田1997：160）の用例(4)）　➡　既決

最後に、対処とは、(97)のように、従属句の「どうすればよいか」という疑問に対して、主節述語が、その答えを知るために「対処する」という意味（「考えている」）を持つタイプを指す。

(97) 卓郎は、どうすればよいか考えている。（(藤田1997：160）の用例(3)）　➡　対処

間接疑問構文の種類や全体の体系については、近代日本語を対象としているが、志波（2016）が挙げられる。志波（2016）によると、間接疑問構文中で、その特徴を最もよく表しているタイプ、つまり、典型的な間接疑問構文とは、カ節を受ける主節述語として心理動詞を持つ間接疑問構文のことである。例えば、次の(98)のような文がこれに当たる。

(98)最近流行っているものは何なのか、分からない。

また、複雑述語の間接疑問構文もある。複雑述語の間接疑問構文とは、主節述語として「疑問が残る、懸念を抱く、心配になる、判断が難しい」などを持つ構文である。例えば、次の(99)のような文がこれに当たる。

(99)隠し子が誰なのか、疑問が残る。

典型的な間接疑問構文の周辺に位置する構文には、典型的な間接疑問構文に近い順に、照応構文、潜伏疑問構文、依存構文、間接感嘆構文、内容構文、二文連置構文（背景注釈型、課題提示型、言い換え型）、引用構文、比況構文、仮想構文がある。照応構文とは、カ節の命題が話し手、もしくは、他の誰かの疑問を表わし（単純不定）、これを一旦「それ」などの照応形が受け、さらにそれを心理述語が受けるという形式を持つ。例えば、次の(100)のような文がこれに当たる。

(100)患者をどのように処置すべきか、それはまだ判断がつかない。

潜伏疑問構文とは、話し手（もしくは、他の誰か）の疑問を表わすカ節の命題に、これと同じ不定命題を含む潜伏疑問名詞句[9]が並列的に後続し、これを心理述語が受けるという形式を持つ構文である。例えば、次の(101)のような文がこれに当たる。

(101)何時に伺ったらいいのか、あなたの御都合を教えて欲しいんです。

依存構文とは、「A 節カハ B 節カニ／デ 依存動詞」のように、２つのカ節を持ちうる構文で、A 節の不定命題の値の決定が B 節で述べられる不定命題に依存することを表す構文のことである。例えば、次の(102)のような文がこれに当たる。

(102)弁護士の世話になるか否かは、それまでの妻への行いによって決まってくるだろう。

間接感嘆構文とは、カ節で表される命題が誰の疑念（疑問）でもなく、話し手が事実として認めつつ、これを感嘆の対象としている構文である。例えば、次の(103)のような文がこれに当たる。

---

[9] 江口（1998b：328）は、「去年いくら稼いだのか去年の年俸を尋ねた」という文の「去年の年俸」のように、「去年いくら稼いだのか」という間接疑問節と同様の解釈を持っている名詞句のことを潜伏疑問名詞句と述べている。例えば、「去年の年俸を尋ねた」という文は、「去年いくら稼いだのかを尋ねた」と述べても文の意味は大きく変わらず、このように述べることは可能である。つまり、「去年の年俸」という名詞句は、潜在的に「去年いくら稼いだのかを尋ねた」という意味を含意しているため、潜伏疑問名詞句と称するという意味である。

(103)その話は彼がいかに子どものことを大事に思っているかを描いている。

内容構文とは、カ節で表される命題が、疑問を代表とする心的態度を表わす抽象名詞によって受けられ、かつ、カ節の命題が抽象名詞句の内容を表わす構文である。例えば、次の(104)のような文がこれに当たる。

(104)成功できるかという不安がつのり、眠れなくなった。

二文連置構文とは、従属カ節を直接受ける述語や名詞句が後節に存在しない文で、背景注釈型、課題提示型、言い換え型の３つがある。背景注釈型とは、後節で表される様子や現われといった事実の背後にある事情（主に原因・理由）を推論し、それを前節に注釈句として添えた構文である。例えば、次の(105)のような文がこれに当たる。

(105)就活のストレスからか、胃の調子が悪い。

課題提示型とは、前節の従属カ節で課題としての疑問（単純不定）が提示され、それに対する一応の回答や処置が話し手の判断として後節に述べられる構文である。例えば、次の(106)のような文がこれに当たる。

(106)どのスイッチを押せばいいのかは、説明書に詳しく書いてある。

言い換え型とは、後節で述べられる事実（様子）について、話し手が自身の解釈から捉えなおして前節に不定命題として差し出す構造を持つ構文である。例えば、次の(107)のような文がこれに当たる。

(107)どれだけ苦労したか、部長が帰宅するまで、三日も寝ずに業務を続けた。

次に、引用構文とは、「節-か」が引用のトで受けられる文で、主節に思考・認識の心理動詞を持つ構文である。例えば、次の(108)のような文がこれに当たる。

(108)落ちる瞬間がどんな感じだったのかとパイロットに尋ねた。

比況構文とは、「節-かのごとく／かのように」という形で「あたかも」などの副詞と共起する構文である。例えば、次の(109)のような文がこれに当たる。

(109)死んでしまったかのように思われ、驚いてあたりを見回した。

仮想構文とは、比況構文と連続的であり、現代語の「節かに見える」のような構文である。例えば、次の(110)のような文がこれに当たる。

(110)彼女は社会人としてうまくやっているかのように見えた。

以上の志波（2016）による「間接疑問構文の種類や全体の体系」を次の【表 5】に示す。

【表5】志波（2016）の間接疑問構文の種類や全体の体系

間接疑問構文のタイプ	定義や用例
典型的な間接疑問構文	カ節を受ける主節述語として心理動詞を持つ間接疑問構文 ・最近流行っているものは何なのか、分からない。
複雑述語の間接疑問構文	主節述語として「疑問が残る、懸念を抱く、心配になる、判断が難しい」などを持つ構文 ・隠し子が誰なのか、疑問が残る。
照応構文	カ節の命題が話し手、もしくは、他の誰かの疑問を表わし（単純不定）、これをいったん「それ」などの照応形が受け、さらにそれを心理述語が受けるという形式を持つ構文 ・患者をどのように処置すべきか、それはまだ判断がつかない。
潜伏疑問構文	話し手（もしくは、他の誰か）の疑問を表わすカ節の命題に、これと同じ不定命題を含む潜伏疑問名詞句[10]が並列的に後続し、これを心理述語が受けるという形式を持つ構文 ・何時伺ったらいいのか、あなたの御都合を教えて

[10] 江口（1998b：328）は、「去年いくら稼いだのか去年の年俸を尋ねた」という文の「去年の年俸」のように、「去年いくら稼いだのか」という間接疑問節と同様の解釈を持っている名詞句のことを潜伏疑問名詞句と述べている。例えば、「去年の年俸を尋ねた」という文は、「去年いくら稼いだのかを尋ねた」と述べても文の意味は大きく変わらず、このように述べることは可能である。つまり、「去年の年俸」という名詞句は、潜在的に「去年いくら稼いだのかを尋ねた」という意味を含意しているため、潜伏疑問名詞句と称するという意味である。

		欲しいんです。
依存構文		「A 節カハ B 節カニ／デ 依存動詞」のように、２つのカ節を持ちうる構文で、A 節の不定命題の値の決定が B 節で述べられる不定命題に依存することを表す構文 ・弁護士の世話になるか否かは、それまでの妻への行いによって決まってくるだろう。
間接感嘆構文		カ節で表される命題が誰の疑念（疑問）でもなく、話し手が事実として認めつつ、これを感嘆の対象としている構文 ・その話は彼がいかに子どものことを大事に思っているかを描いている。
内容構文		カ節で表される命題が、疑問を代表とする心的態度を表わす抽象名詞によって受けられ、かつ、カ節の命題が抽象名詞句の内容を表わす構文 ・成功できるかという不安がつのり、眠れなくなった。
二文連置構文（従属カ節を直接に受ける述語や名詞句が後節に存在しない文）	課題提示型	課題提示型とは、前節の従属カ節で課題としての疑問（単純不定）が提示され、それに対する一応の回答や処置が話し手の判断として後節に述べられる構文 ・どのスイッチを押せばいいのかは、説明書に詳しく書いてある。
	背景注釈型	後節で表される様子や現われといった事実の背後にある事情（主に原因・理由）を推論し、それを前節に注釈句として添えた構文 ・就活のストレスからか、胃の調子が悪い。
	言い換え型	後節で述べられる事実（様子）について、話し手が自身の解釈から捉えなおして前節に不定命題として差し出す構造を持つ構文 ・どれだけ苦労したか、部長が帰宅するまで、三日も寝ずに業務を続けた。
引用構文		「節-か」が引用のトで受けられる文で、主節に思考・認識の心理動詞を持つ構文 ・落ちる瞬間がどんな感じだったのかとパイロットに尋ねた。
比況構文		「節-かのごとく／かのように」という形で「あたかも」などの副詞と共起する構文 ・死んでしまったかのように思われ、驚いてあたりを見回した。
仮想構文		比況構文と連続的であり、現代語の「節かに見える」のような構文 ・彼女は社会人としてうまくやっているかのように見えた。

間接疑問構文の述語については、中田（1984）が挙げられる。中田（1984）は文中に間接疑問節を許す述語と許さない述語があるとしている。例えば、次の(111)～(120)は間接疑問節の

埋め込みを許す例である。

(111)泥棒に何を盗られたか至急調べてください。(中田（1984: 14）の用例30)
(112)学生はきのうなぜ休んだか電話で知らせてきた。(中田（1984: 14）の用例31)
(113)誰を会長に選ぶか投票で決めましょう。(中田（1984: 14）の用例32)
(114)田中さんにどこへ行くか聞きました。(中田（1984: 14）の用例33)
(115)私はジョンがいつニューヨークから帰ったか知っている。(中田（1984: 14）の用例34)
(116)誰が次の総理に選ばれるかは、はっきりしている。(中田（1984: 14）の用例35)
(117)どこで万年筆を落としたか分からない。(中田（1984: 14）の用例36)
(118)この前の会はいつだったか忘れた。(中田（1984: 14）の用例37)
(119)誰が大統領になるかは、たいして重要ではない。(中田（1984: 14）の用例38)
(120)ジョンが来るかどうかは、その会がどこで開かれるかで決まる。(中田（1984: 14）の用例39)

一方、以下の(121)～(123)は、間接疑問節の埋め込みを許さない例である。

(121)*中山さんはいつ山に登ったか否定した。(中田（1984: 14）の用例42a)
(122)*私は息子がどこの大学へ入れるか希望する。(中田（1984: 14）の用例43a)
(123)*大統領はアメリカがソ連と何をすすめるかを主張している。(中田（1984: 14）の用例44a)

中田（1984: 14）は、間接疑問文を許している文の述部をみると、「調べてください」、「知らせてきた」、「決めましょう」、「聞きました (asked)」、「知っている」、「はっきりしている」、「分からない」、「忘れた」、「重要ではない」、「……で決まる」であり、すべて情報と密接な関係を有しているとしている。これに対して、非文法的な文の述語は「否定する」、「希望する」、「主張する」で、情報の存在や転移には何ら関与していないとみている。言い換えれば、間接疑問構文の述部になれる主節述語は決まっており、そのような主節述語と従属節は、互いに深く関係しているとみられる。

また、Nakada（1979）は、文中に間接疑問節の埋め込みを許容する述語のことをIEP(Interrogative Embedding Predicates)と呼び、IEP としての資格を得るためには、特定の

関連情報の獲得、存在、喪失、欠如と密接な意味関係を満たさなければならないと述べている。例えば、(124)で、時制が過去である主節述語動詞の「知らせてくれた」は、すでに変化が起き、話し手が今は関連情報を持っているということを表している。ここで、間接疑問節は+info[11]と両立できることが明確に分かる。(125)は主節述語動詞の「知らせてください」の時制が未来であり、非文である。この文が非文になる理由は、主節述語動詞が-info と関連しているためだと理解できる。しかし、(126)のように「林さん」を「私」に置き換え、「私」を「山田さん」に置き換えると非文ではなくなる。この時、「来る」から「行く」への変化は、非文でなくなることとは関係なく、発話の文脈によって指し示すものが変わることと関係がある。いずれにせよ、これらの例は-info の値が絶対値ではなく、状況に対する認識と相互作用し、話し手に対して相対的であることを示している。(126)において、話し手自身が同窓会に出席していないという情報を持っているため、「私が同窓会へ行かなかったこと」という補足説明が許される。また、間接目的語である「山田さん」に「私が同窓会へ行かなかったこと」という情報が欠けているため、「知らせてください（-info)」の使用も適切である。

(124)林さんはなぜ同窓会へ来なかったか手紙で知らせてくれた。
(125)＊林さんが同窓会へ来なかったことを私に知らせてください。
(126)私が同窓会へ行かなかったことを山田さんに知らせてください。

このように、Nakada（1979）は従属節（間接疑問節）と主節述語の間に、関連情報の獲得、存在、喪失、欠如といった意味関係を考慮し、文中に間接疑問節の埋め込みを許容する述語のこと（IEP）を説明している。この観点も間接疑問構文の性質を従属節と主節述語の関係に基づいて把握し、説明していると考えられる。

4.2 カノ構文について

本研究では、「私は戦争か平和かの岐路だという訴えに共感した」のような「～カ＋ノ＋N(被修飾名詞)」節を含む文のことをカノ構文と呼ぶ。カノ構文は「～カ」という疑問を表す節を持っているため、間接疑問文の一部として、もしくは、「～カ＋ノ」の部分が後ろのNを修飾しているため、単なる名詞修飾節とし

[11] 情報が手元にあることを+info で表す。

て扱われてきた。

志波（2016）では、「節-か 主節」を間接疑問構文として定義し、カノ構文を間接疑問構文の一つとして扱い、内容構文と呼んでいる。内容構文とは、カ節で表される命題が、被修飾名詞の内容を表す構文を指す（志波2016：211-212）。例えば、(127)の「順応するか死ぬか」という命題は、「問題」という抽象名詞を修飾しており、かつ、抽象名詞の「問題」の具体的な内容を表している。そのため、(127)は内容構文であるとされる。この文は(128)のように、「分からない」を述語とする典型的な間接疑問構文として表すこともできる。そのため、志波（2016）は内容構文を、心理述語を主節としないものの、疑問・不定の「か」を持つ節であるため、間接疑問構文[12]の周辺的な構文として位置づけている。

(127)気候変動により、順応するか死ぬかの問題に直面している。
(128)気候変動により、順応するか死ぬかは分からない。

本研究では、カノ構文が文中に疑問を表す節を持っていることに注目し、志波（2016）と同様に、カノ構文を間接疑問構文の１つのタイプとして扱う。

本研究で典型的な間接疑問構文でないカノ構文に触れる理由は、カノ構文は間接疑問構文に近いタイプでありながら、同時に引用構文とも関係があるためである。例えば、(129)は「憧れの会社でバイトができるかできないかという岐路に立っている」のように「の」を「という」に変えた文(130)にしても、文全体の意味は変わらない。(130)は「という」の「と」が引用のマーカーなので、引用構文とも考えられる。つまり、カノ構文は間接疑問構文でありながら、引用構文とも深い関係があるとみられる。一方で、カノ構文の一部は(131)のように「の」を「という」に変えると、(132)のように、文の意味が変化するため、変えられないタイプもある。(131)は「田中が見落としたか、無視したか」による「結果」と解釈できる文だが、(132)は「田中が見落としたか、無視したか」は「結果」の具体的な内容に当たると解釈でき、別の意味の文になる。このような(129)と(131)の違いは、お互い被修飾名詞の性格がことなり、その結果、修飾節と被修飾名詞の関係も異なるためだと思われる。

(129)憧れの会社でバイトができるかできないかの岐路に立っている。
(130)憧れの会社でバイトができるかできないかという岐路に立っている。

[12]志波（2016）は、心理述語を主節とするものを典型的な間接疑問構文とした。また、「節-か」は間接疑問節と呼んでいる。

(131)田中が見落としたか、無視したかの結果にすぎないだろう。

(132)田中が見落としたか、無視したかという結果にすぎないだろう。

4.1では、間接疑問構文の定義も3.1の引用構文の定義と同じように、従属節と述語との意味・構造的な関係に着目し定義されていることが分かった。また、間接疑問構文とは、従属節と述語が意味的呼応関係を成している構文であるということが分かった。さらに、間接疑問構文は引用構文と類似しているものの、異なる部分があるということも確認できた。4.2では、カノ構文の定義、カノ構文が間接疑問構文の周辺的なタイプであること、また、カノ構文が間接疑問構文だけではなく、引用構文とも関係があることについて確認した。

5　韓国語の間接疑問構文

韓国語における間接疑問構文に対する研究は、これまであまり進んでおらず、(133)のような間接話法[13]の文を間接疑問構文と認識している場合が多い。しかし、(133)は、日本語の間接引用に当たるため、日本語の観点からは間接疑問構文ではなく、引用構文に該当すると考えられる。

(133)미나　씨가　언제　일본에　올거냐고　했어요.

mina　ssi-ga　eonje　ilbon-e　ol-geo-nyago　haess-eo-yo.

ミナ　さんが　いつ　日本に　来るのかと　言いました。

本研究では、日本語と同様に従属句と述部が意味的呼応関係を成しているという観点から、以下のような文を韓国語の間接疑問構文として認める。(134)は、疑問の意味を表す「-는지（-neunji)」によって、「-는지（-neunji)」までの従属節と、その以降の述部がお互い意味的な呼応関係を成している文である。このようなタイプの文を日本語の間接疑問構文に対応する韓国語の表現形式と認める。また、韓国語の間接疑問構文の下位タイプについては、【表 5】の「志波（2016）の間接疑問構文の種類や全体の体系」に従い、分類を行う。志波（2016）の間接疑

[13] 韓国語の文法用語、日本語では間接引用のことである。

問構文に対する分類は、近代日本語を対象としているが、現代日本語や現代韓国語についても、志波（2016）の基準で分類できる。これについては、第６章で詳しく説明する。

(134) 회의에 몇　명이　참가했는지　　모른다.

hoeui-e　myeot　myeong-i　chamga-haess-neun-ji moreun-da.

会議に 何　人が　参加したのか　　分からない。

韓国語の「-는지（-neunji)」については、その文法的範疇をどのように定義するのかについて大きく３つの議論が行われた。1 つ目は「-는지（-neunji)」を「冠形詞[14]型の語尾＋依存名詞[15]」と見なす立場で、Seo（1994)、Nam・Go（1987)、Ha（2006）がある。２つ目は「-는지（-neunji)」を、名詞節を作る名詞化語尾と見なす立場で、Lee（1968)、Lee（1980)、Cha（1987)、O（1987)、Choi・Kim（2013）がある。３つ目は「-는지（-neunji)」を、疑問形の語尾と見なす立場で、Im（1974)、Lee（1995)、Jeong（1996)、Lee（2008）がある。1 つ目の「-는지（-neunji)」を「冠形詞[16]形の語尾＋依存名詞[17]」と見なす立場では、「-는（-neun)」の部分は連体修飾節として、「지（-ji)」の部分は形式名詞として把握している。例えば、Seo（1994）は「-는지（-neunji)」を、疑問形の語尾ではないと主張している。その根拠として、①「-는지（-neunji)」に先行する節に使われる疑問詞が、主節にまでその影響を与えられないため、不定詞として解釈できるという点、②引用の助詞「-고（-go)」を「-는지（-neunji)」に使えない点、③代名詞に対する指示関係が、疑問形語尾の「-는가（-neunga)」とは異なる点などを挙げながら、疑問形語尾ではなく「冠形詞形の語尾＋依存名詞」であると主張している。２つ目の「-는지（-neunji)」を、名詞節を作る名詞化語尾と見なす立場では、「-는지（-neunji)」の次に、格助詞である「이/가（i/ga)」「을/를（eul/reul)」が結合し、その文の叙述語の成分として使われる点を根拠としている。また、「-는지（-neunji)」が「冠形詞形の語尾＋依存名詞」ではな

---

[14] 体言の前について、その体言の内容を修飾する機能をする言葉であり、日本語の連体詞に当たる。「全ての」「あらゆる」を含め、「世界的」「改革的」など、「～的」を用いる語も韓国語の冠形詞には含まれるため、日本語の連体詞より意味範囲は広い。

[15] 単独では用いられず、必ず別の単語を前に従えてのみ用いることのできる名詞のことで、日本語文法で「形式名詞」と呼ばれるものに相当する。

[16] 体言の前について、その体言の内容を修飾する機能をする言葉であり、日本語の連体詞に当たる。「全ての」「あらゆる」を含め、「世界的」「改革的」など、「～的」を用いる語も韓国語の冠形詞には含まれるため、日本語の連体詞より意味範囲は広い。

[17] 単独では用いられず、必ず別の単語を前に従えてのみ用いることのできる名詞のことで、日本語文法で「形式名詞」と呼ばれるものに相当する。

い理由として、①動詞の過去形が「-었는지（-eossneunji)」という活用形をとる点、②「冠形詞形の語尾＋依存名詞」の間には、「착한 그 동생（chakhan geu dongsaeng)」のように、「그（geu)」などの指示詞が入れるが、「-는지（-neunji)」ではそのようなことは起きない点を挙げている。３つ目の「-는지(-neunji)」を疑問形の語尾と見なす立場では、①「-는지(-neunji)」は文末で使われないという点、②韓国語で疑問を表す語尾として使われる点、③文を終わらせる終結語尾としての「-요（yo)」が後ろに結合できる点をその根拠としている。Im（1974）では「-는지（-neunji)」を、独立した１つの疑問文を作る終結語尾として把握している。

本研究は、「-는지（-neunji)」を間接疑問構文を構成する間接疑問節として考えるため、日本語の疑問の終助詞「～か」を含む間接疑問節が基本的に名詞節であるように、「-는지(-neunji)」も名詞節を作る名詞化語尾と見なす立場である。しかし、「-는지（-neunji)」は以下の(135)のように疑問形の語尾として使われることも可能である。

(135)서울에서　부산까지는　비행기로　얼마나　걸리는지요?

Seour-eseo　busan-kkaji-neun bihaenggi-ro eolma-na　geolli-neun-ji-yo?

ソウルから釜山までは　飛行機でどのくらい（時間が）かかりますか。

(136)김선생님은　몇 시쯤　도착하시는지요?

Kim-seonsaengnim-eun myeot si-jjeum dochakha-si-neun-ji-yo?

金先生は　何時ごろ　到着するんですか。

「-는지（-neunji)」の通時的な使い方の変化についての研究は、Lee（2016）を挙げられる。Lee（2016）は、Jeong（1996）やLee（2008）と同様に、「-는지（-neunji)」は中世韓国語で、主に(137)や(138)のように埋め込み文の語尾として使われていたが、上位文の叙述語の省略でその文法的機能が(139)や(140)のように連結語尾[18]にまで拡大され、近代以降の韓国語では(141)や(142)のように終結語尾にまで拡大されたと説明している。

(137)난　철수가　한국에 오는지　몰랐다.　(Lee（2016: 43）の用例６ナ)

nan　Cheolsu-ga　hangug-e o-neun-ji　mol-lass-da.

僕は チョルスが韓国に 来るのか 分からなかった。

[18] 文を終止形で終えずに次の文と意味的に関連付ける語尾のこと

(138)난　철수가　한국에 왔는지　몰랐다.　(Lee（2016：43）の用例６나´)

nan　Cheolsu-ga　hangug-e wass-neun-ji　mol-lass-da.

僕は チョルスが韓国に 来たのか　分からなかった。

(139)철수가 한국에 오는지 아침부터 엄마는 부산하게 집안 청소를 했다.　(Lee（2016：43）の用例６다)

Cheolsu-ga hangug-e o-neun-ji achim-buteo eomma-neun busanha-ge jib-an cheongso-reul haess-da.

チョルスが韓国に来るのか朝からお母さんは騒がしく家の中を掃除した。

(140)철수가 한국에 왔는지 아침부터 엄마는 음식을 만들기 시작했다.　(Lee（2016：43）の用例６다´)

Cheolsu-ga hangug-e wass-neun-ji achim-buteo eomma-neun eumsig-eul mandeul-gi sijak-haess-da.

チョルスが韓国に来たのか朝からお母さんは騒がしく料理を作り始めた。

(141)철수가　한국에 오는지요?　(Lee（2016：43）の用例６라)

Cheolsu-ga　hangug-e o-neun-ji-yo?

チョルスが 韓国に 来るんでしょうか。

(142)철수가　한국에　왔는지요?　(Lee（2016：43）の用例６라´)

Cheolsu-ga　hangug-e　wass-neun-ji-yo?

チョルスが 韓国に　来たんでしょうか。

日本語は「か」で終わる主文から始まり、それが従属節として主節の中に組み込んでいくような歴史的変化が観察できるが、韓国語の場合は日本語とは逆に、中世韓国語で埋め込み文（従属節）の語尾として使われ始め、近代以降の韓国語に至っては疑問文の終結語尾にまでその機能が拡大されたということが分かる。

また、Lee（2016）は終結語尾としての「-는지（-neunji)」について、(143)～(145)は話し手の独白であり、これらの「-는지（-neunji)」は自問の意味を持っていると述べている。さらに、ある感情状態の程度の激しさを感嘆の意味として表しているとみている。この部分は日本語において、【表 2】の益岡（2007）の「か」の用法の中で、⑤驚き・感嘆・詠嘆の「か」が使われる間接感嘆構文[19]と類似していると考えられる。

[19] 「彼女は自分がいかに恵まれているかを思った」のようなカ節で表される命題が誰の疑念（疑問）でもなく、話し手が事実と認めつつこれを感嘆の対象としている構文のことを指す（稲田 2007)。「彼女は自分がいかに恵まれているか」という文は、彼女自身、もしくは、聞き手に対する疑問ではなく、自分が恵まれていることを認識し認めた上で、「私は本当に恵まれている」という感嘆を表している文である。

(143)수인: 정말 감사해. 나 몸도 안 좋고, 마음에 차는 구석이 하나도 없으셨을 텐데.

Suin: jeongmal gamsa-hae. na mom-do an joh-go, maeum-e cha-neun guseog-i hana-do eops-eu-syeoss-eul tende.

スイン：本当にありがとう。私、病弱で気に入るところが１つもなかったはずなのに。

현우: 그건 나도 마찬가지야. 너네 아버지 뭘 믿고 나한테 널 주셨는지.

너무너무 감사해. (Lee (2016: 58) の用例 18 가)

hyeonu: geu-geon na-do machangaji-ya. neo-ne abeoji mwo-l mit-go na-hante neo-l ju-syeoss-neun-ji.

neomu-neomu gamsa-hae

ヒョヌ:そこは俺も一緒だよ。君の家のお父さん何を信じて俺に君を下さったのか。

とてもありがたく思っているよ。

(144)난중에 들으니께 죽었다는 겨, 을매나 가슴이 미어지는지. 죽었다는 소식언 들었지만 내 못 가 봤어. (Lee (2016: 58) の用例 18 나)

nanjung-e deur-eu-nikke jug-eoss-da-neun gyeo, eulmae-na gaseum-i mieoji-neun-ji. Jug-eoss-da-neun sosig-eon deur-eoss-ji-man nae mot ga bwa-sseo.

後から聞いたけど死んでしまったって、どれだけ胸が痛むのか。死んだという噂は聞いたけど、俺まだ行ってないんだ。

(145)오기 전에 시아버지 묘소엘 갔지. 우리 애 앞세우고. 어찌나 눈물이나는지. 참 어렵게 지내면서도 울지를 않았는데, 한없이 울었어. (Lee (2016: 58) の用例 18 다)

o-gi jeon-e siabeoji myoso-e-l gass-ji. uri ae ap-seu-go. eojji-na nun-mur-i-na-neun-ji. cham eoryeop-ge jinae-myeonseo-do ul-ji-reul anh-ass-neun-de, han-eop-si ur-eoss-eo.

来る前に義父の墓場に行ったんだ。うちの子を連れて。どんなに涙が出るのか。

本当に苦労して暮らしながらも泣かなかったのに、限りなく泣いたの。

(146)の場合は、終結語尾として使われている「-는지 (-neunji)」であり、聞き手に向かい、婉曲的な言い方の質問として働いている。これは【表 2】の益岡 (2007) の「か」の用法の中で、①の質問の用法と類似している。

(146)귀하께서는 이 문제에 대해 어떻게 생각하시는지요? (Lee (2016: 58) の用例 18 라)

Gwiha-kkeseo-neun i munje-e daehae eotteoh-ge saenggak-ha-si-neun-ji-yo?

貴方はこの問題についてどう考えているんでしょうか。

このように、韓国語の「-는지（-neunji)」は、日本語の「か」のように主文の疑問文の語尾として使われることも可能であるが、間接疑問節の間接疑問節にも使われるため、本稿では韓国語の間接疑問構文を構成する要素として見なす。

6　日韓の間接疑問構文

日韓の間接疑問構文に関する研究もほとんど見当たらない。しかし、間接疑問構文の中で特殊なタイプについての研究がある。Tomioka・Kim(2016)によれば、質問（間接疑問節）を意味的に選択する多くの述語があり、そのような述語の目録は言語を超えて一貫している。一般的に、「尋ねる、問い合わせる、不思議に思う、伝える、通知する、推測する、依存する、調査する、確認する、知る（分かる)、覚えている、忘れる、気づく、聞く、見つける、発見する」などの動詞が含まれる。日本語や韓国語では、問題のない間接疑問文のように見えるが、意味的に質問（間接疑問節）を選択する述語がまったくない間接疑問文がある。(147)は間接疑問節を意味的に選択する述語の「分かる」がある典型的な間接疑問構文である。しかし、(148)と(149)は意味的に間接疑問節を選択する述語がまったくない。韓国語と日本語の間接疑問構文について、(148)と(149)のようなAgent-Oriented Embedded Interrogatives（AOEIs：エージェント指向の間接疑問）を対象にし、AOEIs（エージェント指向の間接疑問）は、主節述語と特定の意味関係を持っているが、その関係を従来の主題関係の観点から定式化し、説明できないと指摘している。

(147)雨が 降ったのかどうか分からない。

비가 왔는지　　어떤지 모르겠다.

Bi-ga wass-neun-ji eotteon-ji moreu-gess-da.

(148)雨が 降っていないか窓から外を覗いた。

？비가 안 오는지　　창밖을　　내다봤다.

Bi-ga an o-neun-ji　　changbakk-eul naeda-bwass-da.

(149)マリは ポールがいるのか　タンスのドアを開けてみた。

마리가 폴이 있는지　　옷장　　문을　열어보았다.

Mari-ga　por-i iss-neun-ji　　osjang　　mun-eul yeor-eo-bo-ass-da.

また、間接疑問節の後ろに「と」が入れられるかどうか、もしくは「と」が省略できるかどうかということ、また、間接疑問節と述部の間に間接疑問節を選択する述語が省略されているかどうかなどを考察し、AOEI の説明を試みている。しかし、AOEI の正しい例として挙げている(148)の「비가 안 오는지 창밖을 내다봤다」は、そもそも韓国語としてやや不自然な文である。(148)の日本語の「雨が降っていないか窓から外を覗いた」は、自然な文であるが、韓国語の場合はなぜ不自然な文になるのかについての考察は見当たらない。(148)と(149)については、「AOEI は誰かが何らかの行動中に疑問を抱いている場合、その人はその疑問に対する答えを見つけるためにその行動をとった可能性が非常に高い」と述べており、この説明は 3.1 の「間接疑問構文とは」のところで確認したように、間接疑問構文の対処タイプに対する説明と一致する。そのため、(148)と(149)は、間接疑問構文の対処タイプ[20]に当たると考えられる。しかし、Tomioka・Kim(2016)は、(150)と(151)のように、この間接疑問構文の従属節に「と」を後続させ、引用構文に作り直し、考察を行っているが、間接疑問構文と引用構文を同じものとして考えている点については疑問が残る。さらに、韓国語の場合は「냐고」を入れて(150)と(151)のように、問題のない文として使用しているが、韓国語ではこの 2 つの文は非文である。

(150)雨が 降っていないかと窓から外を覗いた。

＊비가 안 오냐고　　창밖을　　내다봤다.

Bi-ga　an o-nya-go　　changbakk-eul naeda-bwass-da.

(151)マリは ポールがいるのかと　タンスのドアを開けてみた。

＊마리가 폴이 있냐고　　옷장　　문을　열어보았다.

Mari-ga　por-i iss-nya-go　　osjang　　mun-eul yeor-eo-bo-ass-da.

7　先行研究を踏まえての本研究の意義

引用構文に関する研究は少なくない。そこでは、引用構文の定義、構造、意味、性質などが論じられることが多い。一方で、カ節を引用している文を議論の中心として扱っている研究はほとんどない。本研究は、カ節を引用している文の中でも、日常生活で使用頻度が高いと思わ

[20] 第５章の 4節「両構文が隣接する場合」で詳しく調べるが、引用構文の中で「と」が省略でき、間接疑問構文に隣接する場合、間接疑問構文の対処タイプに隣接することになる。

れる「～かと思う」構文を研究することで、この構文には、疑問を引用している文以外に、文全体が個々の要素の意味からは導き出せない別の意味を有するタイプがあることを明らかにする。これにより、引用構文に関する研究の視野を広げることが可能になると考える。

間接疑問構文に関する研究は引用構文に比べ少ないが、ある程度研究が進んでいる。しかし、間接疑問構文の一部であるカノ構文についての研究はほとんど見つからない。志波（2016）で内容構文という用語を用いて、定義されているが、内容構文の下位タイプにどのような種類があるのか、どのような名詞が被修飾名詞になることができるのかについては課題として残されている。本研究は、カノ構文に対する志波（2016）の課題を明らかにすることで、間接疑問構文の研究にも貢献すると考える。

間接疑問構文と引用構文の関係を考察している先行研究はほとんどない。また、カト構文についての研究も同様である。本研究は引用構文であるカト構文に関する研究を進め、この構文の一部が間接疑問構文と何らかの繋がりがあることを明らかにし、引用構文と間接疑問構文を比較することで、両構文の本質をより明確にしたい。これにより、両構文の関係と全体の体系も明らかになると考える。

韓国語の間接疑問構文に関する研究は非常に少ない。つまり、韓国語の間接疑問構文に関する研究は、ほとんど進んでおらず、韓国語の国語文法において、間接疑問文という概念さえ文法用語として定着していないように思われる。Yang(2021)は、「-는지（-neunji)」という表現形式について議論をしている。一方で、「-는지（-neunji)」のことを名詞節の疑問形語尾として扱っており、間接疑問構文という認識はない。このように、韓国語の研究では、「-는지（-neunji)」を独立した１つの構文形式と捉え、より広い観点での考察を行っていない。本研究は、まず、韓国語における間接疑問構文とは何かを明らかにする。これによって、日本語の間接疑問構文との対照を可能にする。さらに、間接疑問構文の研究が進んでいる日本語に照らし合せ、両言語の共通点と相違点を明らかにすることで、日本語と韓国語の言語理解の発展に寄与できると期待している。

第３章　「～かと思う」構文の下位タイプ

1　はじめに

本章ではカト構文の下位タイプである「～かと思う」構文について、その下位タイプの種類、構造、意味を明確にする。「～かと思う」構文はその意味的な側面から、大きく２つに分けられる。１つは、(152)のように、独白の疑問を「～と思う」で引用しているものであり、もう１つは、文の形態は独白の疑問を「～と思う」で引用しているように見えるが、文全体の意味としては別の意味を持つ(153)のような文である。

(152)「誰がノックをしたのか」と思った。(独白の疑問の引用)
(153)ごみは家で捨てたほうがいいかと思います。

本章の研究目的は「～かと思う」という表現形式を持つ文に、これまでの研究では具体的に指摘されてこなかった(153)のようなタイプの文、つまり、従属節が疑問文の形式になっていても、実は、従属節が疑問文ではない文があることを指摘することである。また、このような意味を持つ「～かと思う」構文と密接な関係にある、他の文との関係を探ることで、「～かと思う」構文の体系を明らかにする。

2　問題提起

第２章の 3.2 節で確認したが、「～と思う」についての先行研究は多いが、「～かと思う」に注目している先行研究は非常に少ない。それは、第２章で述べたように、「～かと思う」を「～と思う」の一部としてしか扱ってこなかったためである。しかし、「～かと思う」と「～と思う」は、以下のような意味や機能に差がある。次の(155)は、(154)に比べ話し手が聞き手により柔らかい口調で自分の意見を伝えていることが読み取れる。つまり、(155)は「彼の判断は彼女の

意見と一致しているか」という疑問文を単純に引用している文ではなく、平叙文としての主張を、婉曲的な言い回しで伝えている文だと考えられる。

(154)彼の判断は彼女の意見と一致していると思います。
(155)彼の判断は彼女の意見と一致しているかと思います。

「～かと思う」には、上記の婉曲的な言い回しの意味以外に、話し手が誤解していた内容を表す(156)のような意味もある。(156)は、従属節の「こんなに早く宿題を終えたか」という部分に、話し手がどのように誤解していたのか、その具体的な内容が現れている。

(156)こんなに早く宿題を終えたかと思ったけど、始めてもないのか。

上記で確認したように、「～かと思う」構文は、大きく２つのタイプがある。１つは(152)のように「か」を含む疑問文を直接引用しているタイプである。もう１つは(155)、(156)のように文全体が疑問の引用としては考えられない、別の意味を持つタイプである。これらを踏まえ、以下では、実例を通して、「～かと思う」構文がどのような構造的特徴を持っているのか、また、各構造がどのような意味を持ち、どのような機能を果たしているのかについて考察する。

3　「～かと思う」構文の下位タイプ

「～かと思う」構文の下位タイプにどのようなものがあるのかを論じる前に、「～かと思う」構文の主節主語の人称と疑問文について考える。

まず、「～かと思う」文の主節主語は(157)のように基本的に 1 人称である。無論、話を進める者が登場人物と完全に一体化する(158)のような小説の地の文では、3 人称主語が、心理述語である「思う」の主語になることもできる。しかし、これは特殊な環境での話であり、通常の対話文や独白文での「～かと思う」文の主節主語は、基本的に 1 人称になる。

(157)あれだと思う、失敗作なんじゃないかと思う。(名大会話コーパス)
(158)気にせず、もう一度鳴らしてくださいと加納は言おうかと思ったが、後ろで寝ているビジ

ネススーツに身を包んだ白人が、寝苦しそうに体の向きを変えたので言い出せなかった。(Love history)

次に、疑問文の２つの種類やその基本的な概念を先行研究から確認しておきたい。山口(1990)と林（2017）によると、疑問文は、話し手が聞き手を想定しているものと、聞き手を想定していないものの２種類がある。前者は話し手が聞き手に答えを求めているため、「質問(もしくは、問い)」と称される。後者は単に話し手の疑義を表現しているため「疑い」と称される。以下の(159)と(160)で確認してみる。

(159)夏休みは明日で終わりなのか。
(160)「夏休みは明日で終わりなのか」と思った。もっと勉強しておけばよかったな。

(159)は、話し手が聞き手に向かい、問いかけている場合は、聞き手に答えを求めている「質問」と考えられる。しかし、話し手が独白としてつぶやいている場合は、「疑い」、もしくは、「発見・納得」の意味と考えられるため、イントネーションも変わる。一方、(160)は、先述した２つの中で、独白を引用している文で、「発見・納得」の意味を持っているタイプである。

以上のように、「～と思う」で引用されている疑問の節は、そのすべてが聞き手に答えを求めている「質問」ではなく、独白の疑問（疑い、もしくは、発見・納得）を表している。したがって、本章では「～かと思う」構文を、①独白の疑問を直接引用しているタイプ（「カ節-と思う」）と、疑問ではない平叙の節に「～かと思う」が後続し、②平叙節を「かと思う」が受けるタイプ（「節-かと思う」）の２つに分けた。さらに、各タイプを以下のように下位分類した。なお、これらの分類は、実例の観察に基づき、帰納した結果である。引用節の部分だけでは、イントネーションにより、話し手が独白としてつぶやいている場合や聞き手に働きかける場合の２つの意味がある。しかし、文全体のレベルになると、聞き手に働きかける意味はなくなり、１つの意味になるので、文全体の意味を分類の基準として下位タイプを分けた。例えば、(161)の引用節の「旅行の準備をしようか」は、独白の場合もあれば、聞き手がいると「勧誘・誘い」の場合もある。しかし、文全体では聞き手に働きかける「勧誘・誘い」の意味はなくなり、話し手の「意志の表明」という意味に制限される。そのため、実例を文全体の意味で分けて見出した「単純疑問引用」、「新たな気づき」、「推量」、「願望」、「意志」、「誤解内容」、「比喩比況」、「断定和らげ」の８個の下位タイプを設けた。

(161)「旅行の準備をしようか」と思ったけど、今日は忙しくてやめた。

【図4】カト思う構文の下位分類

カト思う構文
- ① 独白の疑問を直接引用しているタイプ（「カ節-と思う」）
  - 単純疑問引用「「何かが落ちたのか」と思った」
  - 新たな気づき「「今日で新学期が始まったのか」と思った」
  - モダリティ　推量「「明日は雨が降るんじゃないか」と思った」
    - 願望「「この会議を２時までに終えてくれないか」と思った」
    - 意志「「本を買いに行こうか」と思ったが、明日にすることにした」
- ② 平叙節を「かと思う」が受けるタイプ（「節-かと思う」）
  - 非現実性認識　誤解内容「今日が締め切りかと思ったんだけど、昨日だった」
    - 比喩比況「地球が滅びるかと思った」
  - 断定和らげ　「こっちを選んだほうがいいかと思います」

上記の①は独白の疑問を直接引用しており、文全体の意味が文の構成要素から十分予測できるものである。しかし、本研究では、これも構文と認める。文全体の意味が文の構成要素、もしくは、既存の他の構文から予測できたとしても、反復され使われることにより、構造的にパターン化された表現[21]であれば、構文と見なす。①は文全体の意味が文の構成要素から十分予測できるが、反復され使われることにより、構造的にパターン化された表現であるため、本研究では構文とする。一方、②の平叙節を「かと思う」が受けるタイプは、形態的には独白の疑問文を「～と思う」で引用しているように見えるが、文全体の意味は、個々の要素の意味からは導き出せない別の意味を持っており、構文と考えられる。

以下では、まず、各タイプについて、その意味と形式の特徴を述べたい。

[21] 工藤（1989）は、「現象的に無限に多様な文は、陳述的なタイプとして、構造的なシェーマとして抽象され、類型化されて、有限の「型」として組織されている。」と述べており、反復され使われることにより、構造的にパターン化された表現も文と見なしている。

3.1 独白の疑問を直接引用しているタイプ

この節では、独白の疑問を直接引用している構文タイプについて考察する。独白の疑問を直接引用している文において、「～と思う」によって引用される節は、文全体が聞き手を想定しているか否かに関係なく、必ず、「～と思う」の主語による思考内容を表す。独白の疑問を直接引用しているタイプの下位の種類は【図 4】の①のように、３つあり、単純疑問引用、新たな気づき（庵ほか（2001）の「発見・納得」）、モダリティ（推量、願望、意志）である。これらの下位タイプは、文から「～と思う」という部分を省き、従属節のみの文にしても、同様の意味を表すことができる。例えば、(162)から「と思った」を省略し、「今日で新学期が始まったのか」にしても、この文は新たに気づいたことを表している文である。言い換えれば、「今日で新学期が始まったのか」という文に「～かと思う」が後続することで、(162)の文全体に、単純疑問や新たな気づき、モダリティといった意味が新しく生じるわけではない。つまり、従属節自体にそのような意味が含まれていると判断できる。

(162)「今日で新学期が始まったのか」と思った。

したがって、独白の疑問を直接引用しているタイプは、文全体の意味が文の構成要素から十分予測できるものである。

主節述語のテンスは、過去形の「思った」が使われるのが典型だと思われる[22]。もし、主節述語が(163)のように現在形になると、必ず相手を想定する発話文になり、話し手は１人称で、話し手の断定を表すことになる。この文は疑問文を引用している形に見えるものの、話し手が聞き手に今どのように彼のことを思っているのかを伝えている文である。つまり、疑問文の引用の「疑問のカ節＋ト思ウ」という形をしているが、意味的には平叙節を「かと思う」が受けるタイプの断定和らげに近い。(163)は単純疑問引用と断定和らげの中間的なタイプであると考えられる。しかし、主節述語が(164)のように過去形になると、この文は、話し手が聞き手に今どのように彼のことを思っているのかを伝えている文ではなく、過去のある時点で話し手がどのように彼のことを思っていたのかという事実を単純に伝えている文になる。

[22] 日記のような特殊なジャンルでは、「「二人は本当に仲がいいのか」と思う」のように、「思う」の過去形ではなく現在形が使われることも可能であるが、典型ではない。

(163)彼は一体どうしたのかと思います。
(164)彼は一体どうしたのかと思いました。

(163)のような文は、従属節の内容が単純な疑問ではない。例えば、従属節の内容が単純な疑問であり、主節述語が現在形である(165)は不自然な文である。しかし、(166)のように、主節述語を過去形にすると、この文は従属節の内容が単純な疑問であり、自然な文になる。

(165)？今日の授業は何時に終わるのかと思います。
(166)今日の授業は何時に終わるのかと思いました。

小説の地の文であれば、主節述語のテンスは過去形の「思った」だけではなく、「～と思いながら」の形で、現在形になることも可能である。例えば、(167)は小説の地の文で主節述語の「見ている」の時制は現在であるため、従属節述語の「思いながら」の時制も現在と考えられる。

(167)加藤はこの人がどこのパテシエかと思いながら、料理を作るのを見ている。

最後に、本節で扱うタイプは、独白の疑問を直接引用しているため、従属節の独立性が高いと思われる。(168)のように、カの後に韻律的な区切り（ポーズ）を置けることからも、従属節の独立性が高いことが分かる。

(168)「明日から連休が始まるのか」と思った。

3.1.1 単純疑問引用

[疑問のカ節] ＋ ト思ッタ

疑問のカ節を「～と思った」で引用しており、単純な疑問の意味を表しているものを単純疑問引用と定義する。例えば、(169)の「どこのパテシエか」は単純な疑問で、過去のある時点で話し手がどのような疑問を持っていたのかを表している文である。

(169)あっ、どこのパテシエかと思った。天才パテシエみたい。(名大会話コーパス)

(170)ＦＵＪＩＹＡＭＡ乗ったときにゃ。ＦＵＪＩＹＡＭＡすごいよね。見ただけで怖いもの。どこまで落ちるのかと思ったの。(名大会話コーパス)

(171)いつ帰国するんだろうかと思った。

疑問のカ節（従属節）の述語は、(171)のように、その中にモダリティを含んでいても文法的に問題はないが、実際そのような用例はあまり見つからず、その理由については今後検討する必要がある。

また、(172)と(173)のように、従属節は疑問詞疑問でも肯否疑問（真偽疑問）でもあり得る。(173)のように、従属節が肯否疑問である場合は、従属節の内容から「疑い」の意味が出るが、主節述語が過去形になっているため、今そのように疑っているという意味ではなく、過去のある時点でそのように思っていたという内容を単純に伝えていることになる。従属節が疑問詞疑問である場合は、(174)のように、従属節の「か」の前に「の」を入れると、より自然な文になる。もしくは、(172)のように、従属節の「か」の前に「の」がなくても、後節が続く複文にすれば、自然な文になる。しかし、なぜこのようになるのかという理由については不明である。

(172)姉がなぜそのように言ったかと思って、とても心配になりました。

(173)「二人は本当に仲がいいのか」と思いました。

(174)姉がなぜそのように言ったのかと思った。

最後に、単純疑問引用は、主節述語の「思う」を、「疑う、心配する、不思議に思う」などに置き換えることができる。例えば、(170)の「どこまで落ちるのかと思ったの」という部分は、次の(175)のように、「思った」を「疑ったの」に置き換えることができる。

(175)どこまで落ちるのかと疑ったの。

3.1.2 新たな気づき

[発見・納得のカ節] ＋ ト思ッタ

庵ほか（2001）で言及されている「発見・納得」の内容が、この新たな気づきの従属節になる。「発見・納得」の内容のカ節を「～と思った」で引用しており、新たな気づきの意味を表している文を、新たな気づきの典型的なタイプと定義する。例えば、(176)の従属節である「天才とはこういうものか」は「発見・納得」の意味を持つ文で、全体の文は新たに気づいたことを表している。

(176)天才とはこういうものかと思った。（名大会話コーパス）

新たな気づきは、話し手が、文の主節が表している時点で気づいた内容が従属節内に示される。また、新たな気づきの従属節は、次の(177)の「四月か」のように、名詞性の述語を持つ例もあった。

(177)今日から四月かと思いながら、ぼんやり句を案ずる。（おい癌め酌みかはさうぜ秋の酒）
(178)昔は御身分のある方ではなかったかと思いました。（鎮守の森に鬼が棲む）

従属節の「か」には、「思う」の主語の「驚き」の意味が含意されている。「思う」の主語が外部からの情報を認識し、それを受け入れる一連の過程の中で、主語の主観と外部からの情報との違いに気づき、そのような違いに対する「驚き」の意味が、従属節の「か」に含まれているのである。この「か」のことを、森山（1992a）は「詠嘆」の一部と捉え、「か」は話し手にすでに当該事実に対する推測的認識があり、それと事実認識が対立することを表すと述べている。

新たな気づきは、(177)と(178)のように、主節述語として「思いました」、「思いながら」という形にはなるものの、「思う」という現在形にはならない。例えば、次の(179)は、(176)の主節述語の部分を、過去形の「思った」から現在形の「思う」に置き換えた文である。しかし、(179)は必ず相手を想定する発話文で、話し手は１人称である。この文は、話し手が聞き手に、断定した内容を婉曲的な言い方で伝えている文である。つまり、新たな気づきではなくなる。

(179)天才とはこういうものかと思う。

小説の地の文であれば、主節述語のテンスは過去形の「思った」だけではなく、「～と思いながら」の形で、現在形になることも可能である。例えば、(180)は小説の地の文で主節述語の「案ずる」の時制は現在であるため、従属節述語の「思いながら」の時制も現在と考えられる。

(180)今日から四月かと思いながら、ぼんやり句を案ずる。(おい癌め酌みかはさうぜ秋の酒)
((177) 再掲)

最後に、新たな気づきは、主節述語の「思う」を、「気づいた、感じた」などに置き換えることができる。例えば、(176)の「天才とはこういうものかと思った」という文は、次の(181)のように、「思った」を「気づいた」に置き換えることができる。

(181)天才とはこういうものかと気づいた。

3.1.3 モダリティ

「～かと思う」文の従属節述語には、推量、願望、意志の３つのモダリティが使われる。このような種類のモダリティが従属節述語に使われている「～かと思う」文は、共通点として、主節述語の「思う」のテンスが過去であることが挙げられる。例えば、従属節述語に推量のモダリティが使われている(182)、願望のモダリティが使われている(183)、意志のモダリティが使われている(184)と(185)は、主節述語のテンスが過去である。

(182)この人の子どもじゃないかと思って、心配してた。(名大会話コーパス)
(183)もう来てくれないかと思ってた。(恋文)
(184)いや買い物でもしようかと思った。(名大会話コーパス)
(185)そのまま引き返してしまおうかと思った。(逃げ歌)

(182)～(185)の主節述語のテンスを現在形に変えると、次の(186)～(189)になる。主節述語

のテンスが過去の(182)～(185)は、「思った」の主語が、文の主節が表している過去のある時点で、どのように思っていたのかを単純に述べているだけの文である。しかし、主節述語のテンスが現在の(186)～(189)は、「思う」の主語が発話される時点で、断定している内容を「モダリティ」と「か」によって、婉曲的な言い方で伝えている別の性格の文である。

(186)この人の子どもじゃないかと思う。
(187)もう来てくれないかと思う。
(188)いや買い物でもしようかと思う。
(189)そのまま引き返してしまおうかと思う。

例えば、(182)の「この人の子どもじゃないかと思って」という文は、過去のある時点で「この人の子どもじゃないか」と推量した内容を述べており、現在はどのように考えているのかは分からない文である。この文は、当時そのように推量していたという「推量」の意味が文の前面に出ている。そこには「断定」の意味はないと思われる。一方、(186)の「この人の子どもじゃないかと思う」という文は、今もそのように推量しているが、「思う」により、推量の意味よりは柔らかい「断定」の意味が文の前面に出ている[23]と考えられる。

以下では、モダリティ毎に異なる文の特徴について述べる。

① 推量

[　（推量のモダリティを含む）疑問のカ節（＝従属節）　]　＋　ト思ッタ

従属節述語にモダリティが使われている「～かと思う」文は、モダリティの中でも推量のモダリティである「～（の）ではないか」、「～だろうか」などが使われている文が非常に多かった。モダリティが使われている全体 284 例の中で 223 例が推量に該当する。そのような場合、文全体も同様に推量の意味を表すことになる。

(190)つまり、私が忠雄さんをそんな目に遇わせたのではないかと思ったのだろう。(逃げ歌)
(191)ここまで来てしまった以上、もっとも望ましい解決策は何なのだろうかと思った。(未練)

[23] 森山(1992b)の主観明示用法に該当する。

推量タイプは、主節述語の「思う」を、「疑う、心配する、不思議に思う」などに置き換えることができる。例えば、(190)は、次の(192)のように、「思ったのだろう」を「疑ったのだろう」に置き換えることができる。

(192)つまり、私が忠雄さんをそんな目に遇わせたのではないかと疑ったのだろう。

② 願望

[V-テクレナイカ]　＋　ト思ッタ

この「～かと思う」文は、「V-テクレナイカ」という願望の意味を表す独白文を、「～と思った」で引用している。一般的に「V-テクレナイカ」は、聞き手に対して発話する場合、依頼の意味を表すモダリティと判断される。しかし、独白文として「V-テクレナイカ」を使う時は願望の意味になり、「～と思った」が後続することで、独白としての願望の意味を明確に表している。例えば、(193)の「誰か言ってくれないか」を、聞き手に対して発話すると、依頼の意味を表すことになるが、「～と思う」の従属節として使うと、独白になり、願望の意味を表すことになる。

(193)誰か言ってくれないかと思ってた！（Yahoo!知恵袋）

願望タイプは、主節述語の「思う」を、「願う、祈る」などに置き換えることができる。例えば、(193)は、次の(194)のように、「思った」を「願った」に置き換えることができる。

(194)誰か言ってくれないかと願ってた！

③ 意志

[V-（ヨ）ウカ]　＋　ト思ッタ

一般的に「V-（ヨ）ウカ」は、聞き手に対して発話する場合、勧誘の意味を表すモダリティと判断される。しかし、「～と思った」を後続させ、独白文として述べられると、実践していない意志の意味になる。例えば、(195)の「もう家に帰ろうか」を、聞き手に対して発話すると、勧誘の意味を表すことになるが、「～と思う」の従属節として使うと、独白になり、実践していない意志の意味を表すことになる。(195)が発話される時点で、主節主語はまだ家に向かって出

発していない状態で、まだ実践していない意志の意味になる。

(195)もう家に帰ろうかと思った。(Yahoo!ブログ)

意志タイプは、主節述語の「思う」を、「迷う、考える」などに置き換えることができる。例えば、(195)は、次の(196)のように、「思った」を「迷った」に置き換えることができる。

(196)もう家に帰ろうかと迷った。

3.2 平叙節を「かと思う」が受けるタイプ

3.1 は、独白の疑問を直接引用しているもので、文全体の意味は従属節自体に含意されている意味から生じるものであった。一方、**エラー！参照元が見つかりません。**は、文全体の意味が従属節自体に含意されている意味から生じるわけではない。つまり、文全体が個々の要素の意味から導き出せない別の意味を持つものである。下位タイプとしては、非現実性認識と断定和らげの２つがある。まず、非現実性認識の場合は、話し手がどのように誤解していたのかというその具体的な内容、もしくは、比喩比況を表すタイプである。次に断定和らげの場合は、話し手が断定した内容を聞き手に婉曲的な言い方で伝えるタイプである。

3.1 のタイプは、独白の疑問を直接引用しているため、従属節の独立性が高く、カの後にポーズを置けることを見た。しかし、**エラー！参照元が見つかりません。**のタイプは、(197)のようにカの後にポーズを置くことができない。この特徴からは、従属節の独立性が低いことが読み取れる。

(197)台風が近づいているから明日の遠足はやめたほうがいいかと思います。

3.2.1 非現実性認識構文

[非現実的内容（誤解・比喻比況）を表す句や節] ＋ カト思ッタ

非現実性認識構文には、従属節が①話し手が誤解していた内容を表すタイプと②比喩比況を表すタイプの２つがある。以下の(198)～(202)で確認する。

(198)新しく買った服だと思った。
(199)新しく買った服かと思った。

まず、「～と思った」で引用している(198)は、話し手が「新しく買った服」だと誤解していたと解釈できる反面、引用節の内容が現実と一致するか否かは気にせず、単純にそのように思っていたとも解釈できる。一方、「～かと思った」で引用している(199)では、話し手がそのように誤解していたという意味が前面に出る。また、(199)の話し手が誤解していた内容を表すタイプは、「～かと思った」で従属節の内容を引用しており、そのことは「新しく買った服」のように、現実的に十分あり得ることである。しかし、実際、そのようなことは起きず、現実とは異なるため、それは誤解していたこととして認識される。話し手が誤解していた内容を表すタイプの従属節は、名詞句、もしくは、名詞述語の場合もみられる。また、「締め切りは昨日かと思った。まだ間に合うのか」のように、典型的に、逆接の意味的関係を持つ文が前後に位置する。

比喩比況を表すタイプは、(200)のように「びっくりして驚くこと」と「心臓が止まること」との間の類似性を基にし、現実のことを非現実なことで例えて表しているものである。

(200)今心臓が止まるかと思った。(名大会話コーパス)

また、「～と思った」で引用している(202)の話し手は、「地球が真っ二つになる」ことが現実化するという認識があるものの、「～かと思った」で引用している(201)は、そのような認識は弱く、比喩比況の意味が強くなっている。

(201)地球が真っ二つになるかと思った。
(202)地球が真っ二つになると思った。

(198)と(199)、(201)と(202)の間に生じるこのような意味の差は、「か」による「不定性」の

意味の有無によるものである。つまり、「か」の「不定性」の意味により、従属節で述べている内容に対する疑いの意味が出て、確信の度合いが下がる。その結果、従属節の内容が非現実的になり、誤解していた内容、ないし比喩比況の意味が構文全体に出るのだと思われる。

3.2.2 断定和らげ構文

(主節主語は必ず１人称)［ 話し手が断定した内容を表す節（平叙の従属節）］ ＋ カト思ウ

断定和らげ構文とは、話し手が断定した内容を聞き手に配慮し、婉曲的な言い方で述べる文のことを指す。従属節の文には、評価性の内容が含まれる場合が多い。断定和らげ構文が婉曲的な言い方になるのは、主に「～かと思う」の「か」の機能によるものだと考えられる。以下の(203)～(206)で考察してみる。

(203)至らない点も多々あると思いますが（Yahoo!ブログ）
(204)至らない点も多々あるかと思いますが
(205)その伝説についてはいろいろと違う解釈があるかと思います。(Yahoo!ブログ)
(206)このため一夫一妻で、しかも少子でなければならないのではないかと思います。(もう一つの大河)。

例えば、「～と思う」の前に「か」が入っている(204)は、「～と思う」だけで述べている(203)より、より柔らかい言い方になる。「か」が入るとしても文全体の命題内容には影響を与えず、断定の度合いが下がるだけである。(205)と(206)の場合は、それぞれ「か」と「のではないか」により、一段と柔らかい言い方になっていることが確認できる。無論、「～と思う」自体にも類似した機能はある。森山（1992b：110-111）では、「～と思う」に関して「個人的な意見・主張であることを断ることで、主張を和らげる機能を有している（主観明示用法)」としている。

断定和らげ構文は、話し手が発話する時に断定している内容を伝えているため、「思う」のテンスは常に非過去（スル形）である。また、従属節の内容は話し手の断定していることなので、疑問文・感動文・命令文などではなく、平叙文である。従属節述語は出来事や動作を表す場合もあるが、話し手の評価的な判断を表すものが多い。そのため、断定和らげ構文の前には、話し手を指示する「個人的には」という句が共起しやすい。

断定和らげ構文の中には「か」を省くことができない、イディオムとみられる下位タイプがある。(207)は疑問詞の「どう」があるが、「か」が後続し単なる疑問ではなく、「いかがなものか」のような話し手の評価的な判断の意味を持っている。

(207)それもなんか最近どうかと思うんですよねー。(名大会話コーパス)

断定和らげ構文は、主節述語の「思う」を、他の動詞に置き換えることができない。「存じます」に換えることはできるが、「存じます」は「思います」の謙譲語に当たる。

主節述語がなく「～かと。」で文が終わっているタイプも見つかった。例えば、下の(208)のようなタイプの文は、主節述語の「思う」の部分が省略されていると考える場合、断定和らげ構文の下位タイプとみなすことができる。

(208)みんなで食事会に行ったほうがもっと楽しいかと。

「～かと。」のみで終止しているこの文は、SNS やブログなどで使用されていることが確認できた。こうした表現は、柔らかい口調で意見を述べたい話し手により、主にカジュアルな対話場面において、しばしば使用されている。このタイプは感情評価性の形容詞が、従属節の述語として頻繁に使われている。これは断定和らげ構文には、基本的に物事に関する話し手の個人的な判断、もしくは、評価が述べられる場合が多いためだと考えられる。最後に、断定和らげ構文は聞き手を前提としていない、「独白」として用いることは不可能である。つまり、対話の場面でのみ使用される。

以上、3 節の論じた内容を通して、「～かと思う」という表現形式を持つ文は、「明日はどこで展覧会が開かれるんですかと聞いた/尋ねた」のような「聞き手に向かい、直接、質問の答えを要求する疑問」を引用した文と比較すると、その性質が異なる文であることが分かる。さらに、「～かと思う」という表現形式を持つ文は、大きく２つの種類がある。１つ目は、聞き手を前提としない独白としての疑問を引用しているもので、文全体の意味は、個々の要素の足し合わせで成るものである。２つ目は、形態的には１つ目のものと同じように見えるものの、平叙節を「かと思う」が受けるタイプである。下位分類としては、独白の疑問を「～と思う」で引用するものは、単純疑問引用、新たな気づき、モダリティ（推量、願望、意志）の３つに分類

でき、平叙節を「かと思う」が受けるタイプは、非現実性認識（誤解内容、比喩比況）と断定和らげの２つに分類できる。また、これらの下位タイプに関する様々な特徴も明確にした。

4　「～かと思う」の下位タイプの相互関係

3 節で分類した「～かと思う」の下位タイプは、典型的な構造を持つ時は、互いに独立し、文の意味的な差が明確である。しかし、特定の構造的条件下においては下位タイプの間で意味が似通う場合がある。以下、これらの各タイプの相互関係について考察を行う。

4.1 新たな気づき（3.1.2）と非現実性認識（3.2.1）

(209)は「もう学校に行ったのか」という聞き手を前提としない独白の文を引用しており、これは新たな気づきに当たる。一方、(210)の前件は、(209)と同じように見えるが、後件の意味を考慮すると、文全体は話し手が誤解した内容を表すことになり、これは非現実性認識である。尾上（2006: 7）によると、「みかん」という名詞一語を発話し、有効に意味が表現される場合、特別な文脈がない限り、それは「みかん」の「存在の承認」か「存在の希求」かのいずれかになる。ここで「存在の承認」というのは、「存在」、もしくは、「あること」が事実であると認めることを意味する。(209)の「もう学校に行ったの」は、「みかん」のような名詞一語ではないが、名詞節の形で発話されることによって、まず、「もう学校に行ったこと」が事実であると認めることになる。さらに、「もう学校に行ったの」という名詞節に、「詠嘆」の意味を持つ「か」が後続し、「もう学校に行ったのか」になると、この文は、学校に行ったことを事実として認めた上で、新しく認識したという意味を表すことになる。つまり、「新たな気づき」という意味になる。それに比べ、(210)の「か」には、「不定性」の意味があると考えられる[24]。

(209)（家に妹がいないことを確認した私はその瞬間、）「<u>もう学校に行ったのか</u>」と思った。

- 新たな気づき

[24] 詠嘆の意味と不定性の意味の２つの「か」があるという意味ではない。詠嘆は疑問・不定の延長にあるものと考えられる。

(210)もう学校に行ったかと思ったけど、まだ家に居たんだね。 - 非現実性認識（誤解内容）

下記の(211)と(212)のように、新たな気づきと非現実性認識の従属節が名詞節の場合は、両方の前件とも「テレビのリモコンを入れといたのは机かと思う」という同じ意味になる。その結果、両方の意味と構造は非常に似通うことになる。(211)と(212)の間の違いは、前件と後件の関係が(211)は順接で、(212)は逆接であり、順接か逆接かという部分である。

(211)「テレビのリモコンを入れといたのは机か」と思いながら、引き出しを開けた。 - 新たな気づき

(212)テレビのリモコンを入れといたのは机かと思ったけど、ポケットの中なのか。- 非現実性認識（誤解内容）

4.2 推量（3.1.3）と非現実性認識（3.2.1）

(213)は、主語が推量した内容を表す文である。(213)の「聡子」のように、小説の地の文の場合は、主語を 3 人称にすることもできる。一方で、(214)の主語は 1 人称になるのが普通である。(214)の「営業時間が終わったかと思った」という部分だけをみると、確かに推量そのものであると考えられる。しかし、後続する「けど」と後件の「まだやっているのか」により、この文を発話した時には、営業時間が終わったと思ったことが間違いであると、話し手はすでに知っている状態である。したがって、文全体で考えると、前件はどのように誤解していたのかを表しており、(214)は誤解した内容を表す非現実性認識タイプに該当する。言い換えれば、(214)の前件が、前後の文脈に逆接の意味を持つ文がない場合、推量の意味になるとも言える。

(213)（店が閉まっているのを見た）聡子は「営業時間が終わった（んじゃない）か」と思った。

(214)営業時間が終わったかと思ったけど、まだやっているのか。

4.3 推量（3.1.3）と断定和らげ（3.2.2）

次の(215)は、3節で行った分類によれば、推量に該当する。この文は「んじゃない」がなくても、前後の文脈で「推量」の意味になることが可能である。しかし、ここでは「推量」であることを明らかにするため、(215)に「んじゃない」を入れて比較を行う。(216)は断定和らげに該当する。両者は表面的な形態は似ているが、両者の間には大きな違いがある。

(215)「あの生徒さんは今日も休むんじゃないか」と思った。(推量)
(216)あの生徒さんは今日も休むかと思います。(断定和らげ)

まず、文の構造を分析してみると、(215)は「か」までの推量の従属節に「～と思った」が付いているのに対し、(216)は「あの生徒さんは今日も休む」という断定の平叙文に「～かと思います」が付いている。このように、両方の文の構成は異なっている。目につく表面的な形態の違いは、(215)の主節述語は過去形の「思った」であるが、(216)の主節述語は非過去形の敬語の「思います」であるところと、(215)の従属節に推量のモダリティの「～のではないか」という表現が入っているところである。(215)と(216)の間には、こうした表面的な形態の違いだけでなく、文の性質における明らかな違いがある。例えば、(215)の場合は、聞き手を前提としていない独白文で、聞き手は居ても居なくても構わない。一方、(216)の場合は、聞き手を前提としている発話文で、必ず発話の先に聞き手が必要になる。また、(215)は発話時より過去のある時点で話し手がどのように推量していたかを表す文だが、(216)は発話時に話し手の断定をやんわりと表現している文である。このように、両者は主節述語の時制と丁寧さの違いにより、文全体の意味・機能は大きく異なっていることが分かる。

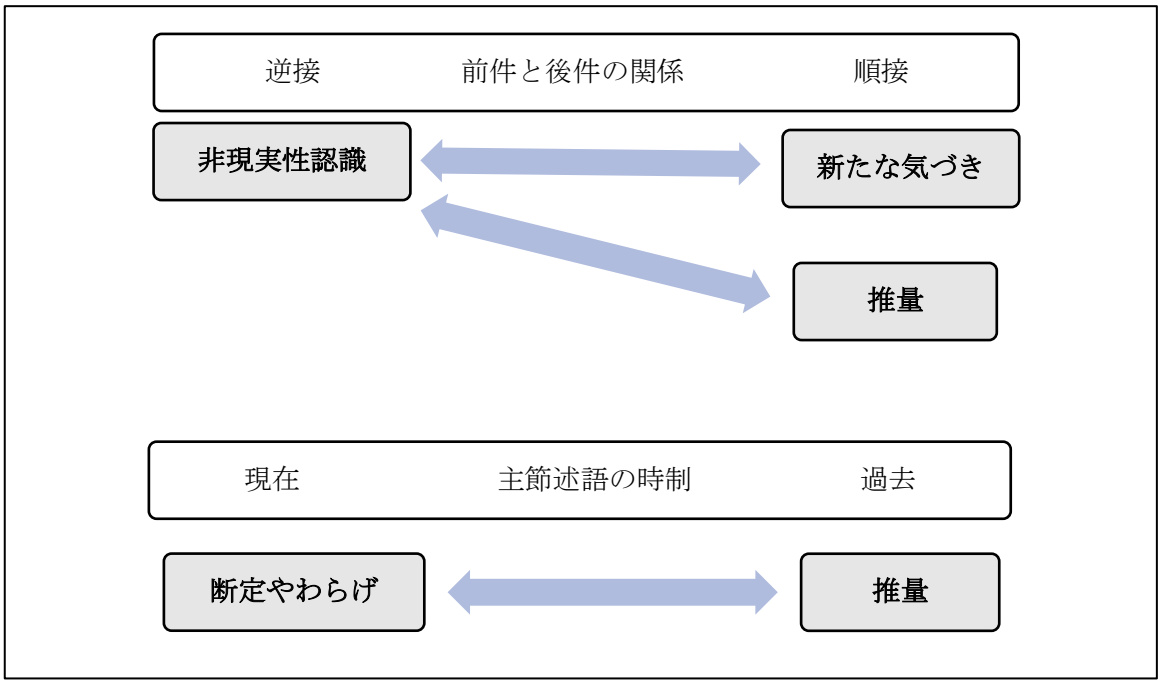
(217)のように従属節内に「～のではないか」という推量のモダリティが含まれており「推量」であるが、主節述語に非過去の敬語の「思います」が来る場合もある。この文は「断定和らげ」の機能を持っており、推量と断定和らげの両方の特徴を併せ持っている文[25]である。ここから、推量と断定和らげ構文はつながっていることが分かる。

(217)あの生徒さんは今日も休むんじゃないかと思います。

[25] (206)も(217)と同じように「か」の代わりに「のではないか」という推量の意味が作用し、断定和らげの意味を表しているため、推量と断定和らげの両方の特徴を併せ持っている文である。

4 節では、「～かと思う」を持つ文において、下位タイプ同士がどのような条件（構造、および、他の要素）を満たす場合に、互いが似通うことになるのかを明らかにした。具体的には、前後の文や節の意味関係、従属節の述語の品詞性、主節主語の人称、主節述語の時制、モダリティの有無が関わっていることが確認できた。つまり、下位タイプ同士はそれぞれが完全に独立して存在しているわけではなく、条件を満たす場合には、お互いが非常に似通うことになるなど、相関関係を持ちながら「～かと思う」全体の体系を成していることが明らかになった。各下位タイプがどのような条件の下で接近するかを【図 5】にまとめた。

【図5】下位タイプの相互関係



5　まとめと今後の課題

この節では、まとめとしてすべての「～かと思う」文にみられる共通点と、それらの間の相違点について総合的に概観する。また、今後の課題を提示する。

第１に、３節で確認したように、一般的な場面での「～かと思う」文の主節主語は、基本的に１人称である。これは、「～と思う」という表現形式が、話し手の認識的態度を表す「モダリ

ティ」というものに近いことを意味している[26]。「～と思う」がモダリティに近づく場合があるという主張は、森山（2000：128-129）でも述べられている。断定和らげ構文は小説の地の文で観察されることはほぼなく、対話の構造の中で使われ、主節主語は必ず１人称である性質を持つ。

第２に、「～かと思う」文の中には、主節述語の「思う」を、別の動詞に置き換えることができ、主節述語の使用が相対的に自由なものがある反面、「思う」以外に置き換えることができず、主節述語動詞の使用に制約がみられるものもあった。主節述語の使用が相対的に自由な文は、ある特殊な意味として定着しているわけではないため、文としての生産性が高く、文の意味もより一般的であると考えられる。このような「～かと思う」文には、独白の疑問を直接引用しているもの、具体的には、単純疑問引用、新たな気づき、推量、願望、意志がある。例えば、主節述語の「思う」を、単純疑問引用と推量の場合は「疑う、心配する、不思議に思う」などに、新たな気づきの場合は「気づいた、感じた」などに、願望の場合は「願う、祈る」などに、実践していない意志の場合は「迷う、考える」などに置き換えることができる。これに対し、主節述語動詞に「思う」のみが使えるタイプは、その文が全体として特殊な意味を持って定着しているため、そのような制約が生じると思われる。このような「～かと思う」文には、平叙節を「かと思う」が受けるタイプとして言及した、非現実性認識タイプ、断定和らげタイプの２つがある。

第３に、カ節の文としての独立性が高い（従属度が低い）ため、「か」の後ろにポーズを入れることができる「～かと思う」文と、そうではない「～かと思う」文の２つがある。例えば、独白の疑問を直接引用しているものに該当する、単純疑問引用、新たな気づき、推量、願望、意志の「～かと思う」文は、従属カ節の中にモダリティが含まれる場合が多く、カ節の独立性が高いものである。そのため、これらの文の「か」の後ろには、ポーズを入れることができる。さらに、「か」は省略できないという特徴もみられる。一方で、平叙節を「かと思う」が受けるタイプに該当する、非現実性認識と断定和らげは、従属節の中にモダリティが含まれず、従属節の独立性が低いタイプであり、これらの文の「か」の後ろには、ポーズを入れることができない。さらに、このタイプは聞き手を想定し発話される場合が多いという特徴もみられる。

上記で考察した、各タイプの形式的（構造的）特徴を【表 6】に整理した。

---

[26] 「～と思う」がモダリティ表現であるのは、「～と思う」という形の時で、「～と思った」になると、モダリティとは言えない。

【表6】各タイプの意味を支える形式的（構造的）特徴[27]

<table>
<tr><th>文の構造</th><th colspan="2">「～かと思う」の種類</th><th>文全体が発話文か独白文か</th><th>「思う」のテンス・アスペクトの制約</th><th>従属節内の述語の特性（モダリティの有無）</th><th>主節主語の人称</th><th>主節述語「思う」の他の動詞への転換可能性</th><th>従属カ節の文としての独立性（カの後にポーズを置けるか）</th></tr>
<tr><td rowspan="5">カ節＋と思う</td><td colspan="2">単純疑問引用</td><td rowspan="6">発話文
独白文</td><td>無し</td><td>モダリティの有無は問わない</td><td rowspan="6">基本的に１人称</td><td rowspan="5">可能</td><td rowspan="5">従属節の独立性が高い（ポーズをおける）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">モダリティ</td><td>推量</td><td rowspan="4">過去形</td><td rowspan="3">モダリティ有り</td></tr>
<tr><td>願望</td></tr>
<tr><td>意志</td></tr>
<tr><td colspan="2">新たな気づき</td><td rowspan="5">モダリティ無し</td></tr>
<tr><td rowspan="2">節＋カト思う</td><td colspan="2">非現実性認識</td><td rowspan="3">不可能</td><td rowspan="2">従属節の独立性が低い（ポーズを置けない）</td></tr>
<tr><td colspan="2">断定和らげ</td><td>聞き手がいる発話文のみ</td><td>非過去形</td><td>必ず１人称</td></tr>
</table>

主節述語動詞の「思う」を別の動詞に置き換えることができるか否か、従属節が文として独立性が高いか否か（カの後にポーズを置けるか否か）といった特徴は、「～かと思う」文の構造を「カ節＋と思う」と分析できるのか、「節＋カト思う」と分析できるかを判断する際の根拠となると考えられる。

今まで考察したように、「～かと思う」という表現形式を持つ文には、単に「聞き手がおり質問の答えを要求する疑問文」を引用している文と、それとは異なる別の意味を持つ文があることが分かった。具体的には、独白の疑問文を「～と思う」で引用しているものと、形態的には同様に独白の疑問文を「～と思う」で引用しているように見えるものの、文全体が個々の要素の意味から導き出せない別の意味を持つものの２つが確認できた。本章では、これらの下位タイプを、その意味と意味を支える形式的（構造的）特徴を中心とし、考察を行った。また、下位タイプの中には、類似するものが確認できた。そのため、具体的にどのような条件下でお互いが似通うのかの検討も行った。以上の考察を通して、各下位タイプはお互い意味・構造的に深く関連しながら、全体の体系を成していることも明らかになった。今後は、「～かと思う」の

[27]新たな気づきと非現実性認識は非常に近いものであるため，【表 6】ではモダリティと新たな気づきの位置を入れ替えた。

下位タイプにおいて、文体による偏りがあるのか否かについても、詳しく検討したい。

第４章　カノ構文と被修飾名詞の種類

1　はじめに

本章では、カノ構文について考察を行う。まず、カノ構文はどのようなものを指すのかを確認する。例えば、(218)は「～カ」で終わり、疑問を表している疑問文である。(219)は、このような「～カ」で終わる疑問文をカ節とし、「の」を後続させ、後ろの「判断」という名詞を修飾している。また、「判断」という被修飾名詞は、主節主語に該当する。つまり、カノ構文は、(220)のように、「N＋述語」の基本構造を持つ文に、Nを修飾するカ節が「の」で繋がっている文のことを指す。このタイプの文も修飾節としてのカ節があるため、カ節を持つ文と考えられる。

(218)会場に入れる人数の制限を何人までにすればいいか
(219)会場に入れる人数の制限を何人までにすればいいかの判断がつかない。

この構造を一般化すると、次の(220)のような構造を持っていることが分かる。

(220)「～カ＋ノ（修飾節）＋Ｎ（主節主語としての被修飾名詞）＋主節述語」

このタイプの文はカ節が「の」で名詞を修飾しているため、以下では「カノ構文」と称する。序論で述べたように、カノ構文は名詞を修飾していることから、名詞修飾節の一部として研究されてきた。又は、一般的に間接疑問文として扱われている「節-か」という部分を文中に持っていることから、間接疑問文として研究されてきた。しかし、カノ構文についての研究はほとんど見つからない。本章ではカノ構文を１つの構文形式と考え、その特徴と下位分類、「～カ＋ノ」という修飾節と被修飾名詞との関係などについて考察する。

以下の(221)と(222)はどちらも「～カ＋ノ＋Ｎ（被修飾名詞）」節が文中に含まれているため、カノ構文である。しかし、その構成要素の間の関係において、何らかの差があり、別のタイプであると思われる。

(221)パソコンが完全に壊れたのか、バッテリーが切れただけなのかの判別は簡単ではない。

(222)その二人が何の素材を使って修理を行ったかの結果は、想像を超えるくらいの大きい差があった。地震が起きた時、Aが修理した建物はあちこちひびが入り、一部崩れてしまったが、Bが修理した建物は何ともなかった。

(223)パソコンが完全に壊れたのか、バッテリーが切れただけなのかを判別するのは簡単ではない。

(224)＊その二人が何の素材を使って修理を行ったかを結果するのは、想像を超えるくらいの大きい差があった。地震が起きた時、Aが修理した建物はあちこちひびが入り、一部崩れてしまったが、Bが修理した建物は何ともなかった。

(225)＊パソコンが完全に壊れたのか、バッテリーが切れただけなのかによる判別は簡単ではない。

(226)その二人が何の素材を使って修理を行ったかによる結果は、想像を超えるくらいの大きい差があった。地震が起きた時、Aが修理した建物はあちこちひびが入り、一部崩れてしまったが、Bが修理した建物は何ともなかった。

例えば、(221)は被修飾名詞である「判別」の前の「の」を「を」に、「判別」を「判別するの」に替え、(223)のように言い換えられる。(222)は被修飾名詞である「結果」の前の「の」を「を」に、「結果」を「結果するの」に替えると、(224)のような非文になる。一方、(222)は被修飾名詞である「結果」の前の「の」を「による」に替え、(226)のように言い換えられる。(221)は被修飾名詞である「判別」の前の「の」を「による」に替えると、(225)のような非文になる。

また、(227)の場合は、通常のカノ構文である(221)と等しく、被修飾名詞の「頼み」がどのようなものなのかが修飾節に言及されているが、この文は非文である。しかし、(227)は被修飾名詞である「頼み」の前の「の」を「という」に替えると、(228)のような自然な文になる。

(227)＊もう一度確認してくれないかの頼みを断ることはできなかった。

(228)もう一度確認してくれないかという頼みを断ることはできなかった。

しかし、これらの文の間になぜこのような差がみられるのだろうか。それは同じカノ構文であっても、「～カ＋ノ」という修飾節と被修飾名詞との関係がそれぞれ異なるためだと考えられる。つまり、修飾節と被修飾名詞との関係により、文の性格が異なるため、異なる下位タイプとして分類できる。

このように、カノ構文は異なる下位タイプが存在するにも関わらず、今までの研究では、カノ構文の下位タイプについて記述されてこなかった。また、上記で確認したように、カノ構文の修飾節と被修飾名詞との関係は、被修飾名詞がどのような名詞になるかによって異なると思われる。例えば、上記の(221)、(222)、(228)は、それぞれ「判別」、「結果」、「頼み」が被修飾名詞になっており、このような被修飾名詞の違いが、カノ構文の修飾節と被修飾名詞との関係に影響を与えていると予想される。しかし、今までの研究では「被修飾名詞の種類」に関しても、ほとんど言及されていない。したがって、本研究では、カノ構文について、「～カ＋ノ」という修飾節と、被修飾名詞との関係に影響を与えると思われる被修飾名詞の種類により、下位分類を行う。また、被修飾名詞となる名詞には、どのようなタイプがあるのか、その種類についても明らかにする。

2　先行研究と問題提起

第２章の4.1と4.2ですでに述べたことではあるが、ここで再び、次のことを確認しておきたい。カノ構文は、「節-カ- ノ AbsN（抽象名詞）」の構造を持っており、志波（2016： 211）で内容構文と定義したもの、つまり、「節-カ- ノ/トノ/トイウ AbsN（抽象名詞）」の構造を持つ文の一部の下位タイプと考えられる。カノ構文である(229)は、内容構文の下位タイプであり、この文の構造で分かるように心理動詞がない。一方、典型的な間接疑問構文である(230)は、第２章の4.1で確認したように、心理動詞が主節述語になる[28]。このようなことを考慮し、志波（2016： 211）では、内容構文を、心理述語をとらないことから間接疑問構文の周辺に位置するタイプとして分類した。本研究では、志波（2016）に従い、カノ構文が文中に疑問を表す節を持っていることに注目し、間接疑問構文の１つとして扱う。また、カノ構文は、同じ意味を持つ間接疑問構文で述べることもできるため、間接疑問構文の１つのタイプであると考えられる。例えば、(229)のカノ構文は(230)のような間接疑問構文として述べることができる。

(229) 大学に進学するかしないかの判断を迫られる。（カノ構文）
(230) 大学に進学するかしないかを判断しなければいけない。（間接疑問構文）

志波（2016: 212）では、内容構文は、被修飾名詞の種類により、(231)のように疑問を表すタイプと、

[28] (230)の場合、「判断する」

(232)のように比況を表すタイプの２つがあると述べている。例えば、被修飾名詞が、問題、疑問、原因、問いなどの抽象名詞である場合は、疑問を表すタイプで、憂、考え、懸念、不安、疑などの心理名詞である場合は、比況を表すタイプだと言及している。

(231)彼は子供に対する母親の愛情が父親のそれに比べてどの位強いかの疑問にさえ逢着した。（志波（2016）の用例117）

(232)今までつまらない事を書いた自分をも、同じ眼で見渡して、あたかもそれが他人であったかの感を抱きつつ、やはり微笑しているのである。（名詞述語）（志波（2016）の用例129）

本研究では、現代日本語についてカノ構文の下位タイプを被修飾名詞の種類によって分類するため、カノ構文の被修飾名詞がどのようなタイプの名詞であるのかについて検討する必要がある。また、志波（2016：211）は、「「原因」と「問題」や「疑問」などの名詞では、カ節と名詞の関係が異なるが、内容構文の名詞とカ節の関係についてまでは考察が及ばなかった。今後の課題としたい。」としている。例えば、(233)は被修飾名詞の「原因」の前の「の」を「という」に替えることができるが、(234)は被修飾名詞の「問題」の前の「の」を「という」に替えることはできない。志波はこのような「被修飾名詞と修飾節（カ節）の関係」を基準とし、被修飾名詞の種類を分け、下位タイプを分類したわけではなく、被修飾名詞自体が持つ意味的な性格により下位タイプを分類している。本研究では、志波（2016）が今後の課題と言及した「名詞とカ節の関係」、つまり、「被修飾名詞と修飾節の関係」を基準とし、被修飾名詞の種類を分け、カノ構文の下位タイプを分類する。

(233)こういう手腕で彼に返報する事を巨細に心得ていた彼は、何故健三が細君の父たる彼に、賀正を口ずから述べなかったかの源因に就いては全く無反省であった。（志波（2016）の用例118）

(234)要点はただその人が金を貸してくれるか、くれないかの問題にあった。（志波（2016）の用例116）

本研究では、前述した先行研究を踏まえ、「～カ＋ノ（修飾節）＋Ｎ（主節主語としての被修飾名詞）＋主節述語」という構造を持っているカノ構文を、間接疑問節と被修飾名詞との間の意味役割的な関係に基づき、どのような構造に置き換えられるかで分類を行った。その結果、a.間接疑問構文に言い換えられるカノ構文、ｂ.通常の連体修飾に言い換えられるカノ構文、c.選言文に関わるカノ構文の３つのタイプが見つかった。

ここで、選言文について調べる。大浦（2007：47）によると、選言文とは、「pまたはq」という形式によ

って表される命題」のことを指す。例えば、「あの人は大学の教授か、または塾の先生である」という文は、大学の教授か塾の先生かのどちらか（もしくは両方）であるという意味を持つ選言文に該当する。選言文の１つの特徴は、実際どちらなのか確定していないというところである。「先週の週末はポップソングかジェーポップかを聞いた」という文において、話し手はどちらが真実なのかについては確信しておらず、聞き手に答えを求めている訳でもない。さらに、「pまたはq」という形式を持つ選言文において、一般的にpとqは同じカテゴリーに属するものであるという特徴もある。選択疑問文の場合は、このような選言文とは異なり、疑問文であるため、文中の疑問に対する答えが分からず、その答えに注目しているという特徴を持つ。例えば、(235)は選択疑問文で、私と彼女という選択肢の中でどちらなのか、その答えが分からず、聞き手にその答えを求めている。一方で、(236)は選言文で、どちらが答えなのか分からない部分は一致しているが、聞き手にその答えを求めている訳ではない。しかし、選言文と選択疑問文は形式と意味の両面で非常に類似しており、連続的である。

(235)あなたが好きなのは、私か彼女か？（選択疑問文）

(236)あなたが好きなのは、私か彼女かどちらかです。（選言文）

【図6】カノ構文の下位分類

カノ構文

a. **間接疑問構文に言い換えられるカノ構文**

炎症が小さくなっているかどうかの検査が必要だ。

→炎症が小さくなっているかどうかを検査する必要がある。

b. **通常の連体修飾に言い換えられるカノ構文**

どうして北極の氷山が溶け始めたのかの原因については、何も明らかになっていない。

→北極の氷山が溶け始めた原因については、何も明らかになっていない。

c. **選言文に関わるカノ構文**

ただ内部の構造が見えるか見えないかのちがいだけなんです。

【図6】のカノ構文を分類した基準である「被修飾名詞と修飾節の関係」は、先述したように「被修飾名詞の種類」によって決まるため、３つのタイプ別に、どのような名詞が被修飾名詞になれるのかを分析する。さらに、その結果である「被修飾名詞になれる名詞の種類」によって、３つのタイプの下位分類を行う。また、間接疑問節（修飾節）としてどのような疑問タイプ（選択疑問、疑問詞疑問、肯否疑問）がこられるのかについても分析を行う。間接疑問節（修飾節）の疑問タイプが、選択疑問、疑問詞疑問、肯

否疑問の中で、どれに偏っているのかというところも1つの構造的な特徴であるためである。例えば、(237)の「成功できるかできないか」は、疑問文の中に疑問の答えが選択肢として述べられている選択疑問文で、(238)の「日本のこれからの国際的役割をどう推進していくか」は、疑問文の中に疑問詞が含まれている疑問詞疑問文で、(239)の「あらためて確認すると人が立っているか」は、疑問の答えがYESかNOになる肯否疑問文である。

(237)成功できるかできないかの瀬戸際だと思う。
(238)日本のこれからの国際的役割をどう推進していくかの問題が残っている。
(239)あらためて確認すると人が立っているかの印象があった。

現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT）を用い、短単位検索のタブを選択した後、以下のような条件で検索を行った。

キー：書字形出現形が「か」　＆　品詞の大分類が「助詞」
後方共起１（キーから１語）：書字形出現形が「の」　＆　品詞の大分類が「助詞」

検索の結果は、全22,372件の用例が見つかり、その中の4,960件を用いて分析を行った。4,960件の用例の中で、修飾節の部分が不定の意味の一語と思われる「どこかの」、「いくつかの」、「何人かの」、「いずれかの」、「何らかの」などになっている4,260例は派生語であるため、すべて除外した。その結果、残った700例がカノ構文であり、それらを最終的な分析対象とした。

3　カノ構文の下位タイプと被修飾名詞の種類

２節で説明したように、カノ構文の中には、間接疑問節と被修飾名詞との間の意味役割的な関係が異なる文が観察できる。また、このような間接疑問節と被修飾名詞との間の意味役割的な関係により、どのような構造に置き換えられるかというところにも差が出る。実際、「置き換えられる３つの構造」が見つかり、この「置き換えられる３つの構造」を基準とし、カノ構文の分類を行った。つまり、①間接疑問構文に言い換えられるカノ構文、②通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文、③選言文に関わるカノ構文のように、大きく３つのタイプに分けて考える。この３つのタイプごとに、被修飾名詞となる名詞に

は、どのようなものがあるのかを調べる。その際、意味的共通点に準じて、被修飾名詞の種類を分類する。意味的に類似している語は、構造的な振る舞いにおいても、類似している場合が多いためである。カノ構文の全700例中、間接疑問構文に言い換えられるカノ構文は416例、通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文は67例、選言文に関わるカノ構文は217例が見つかった。

3.1　間接疑問構文に言い換えられるカノ構文

第2章の4.1で調べたように、藤田（1983、1997）は、間接疑問構文の従属句と主節述語の関係を「一種の応答的意味関係」と見なし、主節述語には未決、既決、対処の3つがあると述べている。この３つの分類は、間接疑問構文に言い換えられるカノ構文において、置き換えられた間接疑問構文が本当に間接疑問構文であるのか否かを判断する際に必要である。まず、(240)は間接疑問構文の構造に変えると、「＊花火大会がなぜ延期になったのかを原因する」のような非文になる。

(240)花火大会がなぜ延期になったのかの原因については、何も発表されていない。

しかし、本章の3.1に属するカノ構文は、すべて間接疑問構文に置き換えられるタイプである。例えば、(241)のカノ構文の場合、「資源が地下に埋蔵されているかどうか」を知るために「検査する」と解釈できるため、(242)のような間接疑問構文（対処タイプ）に置き換えられる。また、(243)のカノ構文の場合、(244)のように、従属句と述部の「問題だ」が意味的呼応関係を成している間接疑問構文（未決タイプ）に置き換えることも可能だ。

(241)資源が地下に埋蔵されているかどうかの検査が必要だ。
(242)資源が地下に埋蔵されているかどうかを検査する必要がある。
(243)どのようにこれに適切に対応するかの問題がある。
(244)どのようにこれに適切に対応するかが問題だ。

つまり、間接疑問構文に言い換えられるカノ構文とは、「間接疑問節（修飾節）を＋N（被修飾名詞）する」、もしくは、「間接疑問節（修飾節）が＋N（被修飾名詞）だ」のように、被修飾名詞を述語とした間接疑問構文に置き換えられるタイプである。

この間接疑問構文に言い換えられるカノ構文の中には、カノ構文の間接疑問節（修飾節）が、実際には、疑問文ではない例もある。例えば、(245)の間接疑問節（修飾節）の「寅吉がいかに強情我慢であるか」は、疑問の意味を表しているというより、「寅吉が非常に強情我慢である」という意味に近い。つまり、この場合のカ節は、間接感嘆構文[29]に近い。

(245)寅吉の異称の「五寸釘」は、寅吉がいかに強情我慢であるかの証明として、起きている。(煉獄無宿)

さらに、本章では、被修飾名詞の間に類似している意味的共通点によって、被修飾名詞の下位タイプを抽出し、それぞれの下位タイプについて述べる。被修飾名詞となる名詞のタイプは次の５つがある。これらの被修飾名詞の間に類似している意味的共通点は、各タイプの構造的特徴を創り出すものと考えられる。

①判断タイプ：判断、判定、見極め、見通し、予想、区別、選別、選択、確認、比較、把握などの思考や認識を表す動作性名詞
②問題・疑問タイプ：問題、問い、ほう、一点、点、ポイント、内容、課題などの問題・疑問に関する名詞
③検証タイプ：実験、研究、調査、分析、吟味、議論、論議、検証、証明、試験、検討などの検証を表す動作性名詞
④言語表現タイプ：説明、話、記録、記述、質問などの言語表現を表す動作性名詞
⑤心情タイプ：不安、苛立ちなどの心情を表す名詞

間接疑問構文に言い換えられるカノ構文の修飾節（間接疑問節）の疑問の種類を【表7】に示した。肯否疑問に比べ、選択疑問と疑問詞疑問の割合が非常に大きいことが目立つ。

[29]「彼女は自分がいかに恵まれているかを思った」のようなカ節で表される命題が誰の疑念（疑問）でもなく、話し手が事実と認めつつこれを感嘆の対象としている構文のことを指す（稲田 2007）。「彼女は自分がいかに恵まれているか」という文は、彼女自身、もしくは、聞き手に対する疑問ではなく、自分が恵まれていることを認識し認めた上で、「私は本当に恵まれている」という感嘆を表している文である。

【表7】間接疑問構文に言い換えられるカノ構文の修飾節（間接疑問節）の疑問の種類

従属節（間接疑問節）の疑問の種類	全体　416例（100%）
選択疑問　（疑問文の中に疑問の答えが選択肢として述べられている疑問文）	255例（61.3%）
疑問詞疑問（疑問文の中に疑問詞が含まれている疑問文）	128例（30.8%）
肯否疑問　（疑問の答えがYESかNOになる疑問文）	33例（7.9%）

以下では、間接疑問構文に言い換えられるカノ構文において、その下位タイプの意味・構造的特徴について確認する。

3.1.1 判断タイプ

間接疑問構文に言い換えられるカノ構文の全416例の中で、47.84%に当たる199例が判断タイプに分類される。判断タイプの被修飾名詞となる名詞は、判断、判定、見極め、見通し、予想、区別、選別、選択、確認、比較、把握などの思考や認識を表す動作性名詞である。判断タイプの被修飾名詞は、思考や認識を表す動作性名詞であるため、「被修飾名詞(N)＋する」の形にして、「間接疑問節（修飾節）＋を＋被修飾名詞（N）する」という構造の間接疑問構文で述べることが可能である。修飾節は被修飾名詞（思考・認識）の対象と考えられるが、同時に思考・認識の内容とも考えられる。例えば、(246)は「天体観測において星が遠ざかっているか、近づいているかを判断する」と述べることが可能であるため、修飾節の「天体観測において星が遠ざかっているか、近づいているか」は、被修飾名詞の「判断」の対象と考えられるが、同時に判断の内容とも考えられる。

(246)実際に、天体観測において星が遠ざかっているか、近づいているかの判断などにも利用されている。（光入門）

判断タイプは、藤田（1983、1997）の間接疑問構文の3つの分類の中で、「対処」タイプに該当する。(247)は、「あの学生が病気か中毒か」という疑問の答えは知らず、その答えを探る「対処」としての過程が、「判定する」であると解釈できる。「あの学生が病気か中毒か」という判定をするための基準は知っている可能性があるが、その答えは知らないため「既決」ではない。また、「あの学生が病気か中毒か」の答えが知らないという意味を表している文でもないため「未決」でもない。(248)も「相手が本物かどうか」とい

う疑問の答えは知らず、その答えを探る「対処」としての過程が、「見極める」であると解釈できる。

(247) あの学生が病気か中毒かの判定については、東南医大に連絡して、分かり次第こっちに知らせるように言ってあるんですがね。(二重殺人トライアングル)

(248) インターネットの世界を思い浮かべてもらえばわかるが、そこは目に見える世界と違って無色透明な空間だから、常に相手が本物かどうかの見極めや証明が必要になる。(特許封鎖)

(249) 代表取締役が行った契約が、代表取締役自身の個人の契約なのか、会社の代表機関としての契約なのかの区別を明確にする必要があります。(契約書のすべて)

(250) 地震とちがって、いつごろどこが危険かの予想はだいたいできますが、台風そのものをなくしたり、進路を変えたりはできません。(はてな？なぜかしら？文化・科学問題)

(251) その際、在宅で治療をするか、一時入院するかの選択を、ゆかりちゃんと家族に任せることになりました。(自宅で迎える幸せな最期)

3.1.2 問題・疑問タイプ

間接疑問構文に言い換えられるカノ構文の全416例の中で、26.44%に当たる110例が問題・疑問タイプに分類される。問題・疑問タイプの被修飾名詞となる名詞は、問題、問い、ほう、一点、点、ポイント、内容、課題などの問題・疑問に関する名詞である。問題・疑問タイプは、修飾節であるカ節を主語とし、被修飾名詞を述語とすることで、「間接疑問節(修飾節)が+N（被修飾名詞）だ」という構造の間接疑問構文で述べることが可能である。例えば、次の(252)は「西日本にも骨格たくましい野生馬がどうしていなかったかが疑問だ」と述べることができる。

(252) 日本の国土が、まだ大陸と陸つづきだったころから棲んでいた野生馬だとの説もあるが、そうなら、西日本にも骨格たくましい野生馬がどうしていなかったかの疑問も湧いてくる。(陸奥甲冑記)

志波（2016: 212）が「疑問を表すタイプ」と言及したものがこの問題・疑問タイプに属する。また、志波（2016: 211）は現代語では、この構造でカ節が疑問詞疑問であることは難しいと述べているが、(253)のようにカ節が疑問詞疑問である文も確認された。

(253) しかし、安全性の基準（確率数値）をもって、個体性（あるいは自我）の唯一性をどう考えるかの問いに代えることができるのだろうか。（自我の哲学史）

問題・疑問タイプは、藤田（1983、1997）の間接疑問構文の3つの分類の中で、「未決」に当たる。(254)は「人間の認識のレベルの中で、ロジックが整合的に通るようになるかどうかが問題だ」と述べることができ、発話時点でまだ修飾節の疑問に対する答えが分からないため、「既決」ではなく「未決」タイプとして考えられる。また、従属節の疑問に対し、その答えを知るために何とかするという意味はないため「対処」でもない。最後に、(255)の被修飾名詞の「点」は、「問題」に置き換えても、文の意味は変わらないため、問題・疑問タイプに分類した。

(254) 人間の認識のレベルの中で、ロジックが整合的に通るようになるかどうかの問題ですね。（フリッパーズ・テレビ）

(255) そこで、現在公取委の命じている措置が効果的か、価格改訂命令が現行法でも可能かの点を中心として検討してみます。（独占禁止法を学ぶ）

(256) 日中合弁がうまくいくかどうかのポイントは「相互信頼の精神」をどこまで信頼できるかにかかっていると断言した…（以下省略）（国別・外人接待法）

(257) これらの課題は、子どもたちへの教育の課題ともなりうるが、それ以上に、大人自身が、自らの暮らし、地域、国づくりの中で実践しているかどうかの課題となっている。（生涯学習時代の社会教育をつくる）

(258) そうしてここで提起された欧化か国粋かの課題は、こののち、どんな思想が創られる場合にも、一貫して意識の底に流れつづけることとなりました。（近代日本思想案内）

3.1.3 検証タイプ

間接疑問構文に言い換えられるカノ構文の全416例の中で、14.42%に当たる60例が検証タイプに分類される。検証タイプの被修飾名詞となる名詞は、実験、研究、調査、分析、吟味、議論、論議、検証、証明、試験、検討などの検証を表す動作性名詞である。検証タイプの被修飾名詞は検証を表す動作性名詞であるため、「被修飾名詞（N）＋する」の形にして、「間接疑問節（修飾節）＋を＋被修飾名詞（N）する」という構造の間接疑問構文で述べることが可能である。また、修飾節は被修飾名詞の対象と考えられるが、同

時に検証の内容とも考えられる。例えば、(259)は「単純に便に血液が混じっていたかどうかを検査する」と述べることが可能であるため、修飾節の「単純に便に血液が混じっていたかどうか」は、被修飾名詞の「検査」の対象と考えられるが、同時に「検査」の内容とも考えられる。

(259)便潜血検査は大腸癌を検出しているのではなく、単純に便に血液が混じっていたかどうかの検査のため、このような偽陰性が多くなるのです。(Yahoo!知恵袋)

このような特徴は判断タイプと類似しているが、検証タイプの被修飾名詞は、疑問節である修飾節の答えを出すための、より「物理的な手段」である。例えば、(260)は「耐性を持つものかどうか」という疑問に対し、その答えを知るための手段として「調査」を行うと解釈できる。検証タイプは、藤田(1983、1997)の間接疑問構文の3つの分類の中で、「対処」タイプに該当する。(261)は「確実に原因が特定されたか否か」という疑問の答えを探るため、「検証する」という「対処」をとると解釈できる。

(260)今後発生した場合は耐性を持つものかどうかの調査を保健所や県教育委員会とも相談し、適切に対応したい。(広報やかげ)

(261)確実に原因が特定されたか否かの検証を経たものではないとしても(以下省略)(医者も驚く病気の話)

(262)わたしにとって長篇小説とは、自分の日常生活では起り得ない状況を設定することで、それを自分ならどう反応し、どう行動し、どう生きるかの実験を行うことであった。(中野孝次の生きる言葉)

(263)発見された結核患者を治るまで見守り、患者の家族の健康を管理していくために、どのような方法が適切かの研究が進められた結果，結核患者登録票を用いた患者管理が，昭和三十六年から全国一斉に実施された。(地域精神保健指導論;感染症保健指導論)

(264)各企業が課題に対する解決手段について、特許を何件出願しているかの分析を行う。(非接触型ICカード)

この「検証タイプ」は、3.1.2の「問題・疑問タイプ」より3.1.1の「判断タイプ」に近いと思われる。しかし、割合が大きいタイプから小さいタイプの順に並べたため、このような順にした。

3.1.4 言語表現タイプ

間接疑問構文に言い換えられるカノ構文の全416例の中で、10.58%に当たる44例が言語表現タイプに分類される。言語表現タイプの被修飾名詞となる名詞は、説明、話、記録、記述、質問などの言語表現を表す動作性名詞である。言語表現タイプの被修飾名詞は、言語表現を表す動作性名詞であるため、「被修飾名詞（N）＋する」の形にして、「間接疑問節(修飾節)＋を＋被修飾名詞（N）する」という構造の間接疑問構文で述べることが可能である。例えば、(265)は「がん告知を行っていなかったころの、再発発見のための検査をなぜ行なうのかを説明する」と述べることができる。

言語表現タイプは、藤田（1983、1997）の間接疑問構文の3つの分類の中で、「既決」に当たる。例えば、(266)は「エンゲルスが第四部の編集の仕事にどう取り組もうとしていたかを話す」と述べられる。この時、修飾節の「エンゲルスが第四部の編集の仕事にどう取り組もうとしていたか」について話せるのは、すでにその答えを知っているからであり、そのため、「未決」ではなく「既決」タイプに該当する。また、従属節の疑問の答えを知るために説明するという意味ではないため、「対処」ではない。

(265)がん告知を行っていなかったころの、再発発見のための検査をなぜ行なうのかの説明に四苦八苦した時代に比べれば医療の効率化は確実に進んでいると思います。（ウソのない医療）

(266)エンゲルスが第四部の編集の仕事にどう取り組もうとしていたかの話に入る前に、この『学説史』そのものの成り立ちについて、その来歴を調べておきましょう。（エンゲルスと『資本論』）

(267)ついでに会長受付も兼ねさせれば、会長のところへ、いつだれが訪ねてきたかの記録も残ります。（漫画王国の崩壊）

(268)科学での真は、文字通り世界で何が実際に起こっているかの記述に他ならない。（生物の内景から）

(269)先程確定申告で国民年金が控除されるかの質問をした者です。（Yahoo!知恵袋）

3.1.5 心情タイプ

間接疑問構文に言い換えられるカノ構文の全416例の中で、416例中0.72%に当たる3例が心情タイプに分類される。心情タイプの被修飾名詞となる名詞は、不安、苛立ちなどの心情を表す名詞である。心情タ

イプは、修飾節であるカ節を主語とし、被修飾名詞を述語とすることで、「間接疑問節（修飾節）が＋N（被修飾名詞）だ」という構造の間接疑問構文で述べることが可能である。例えば、(270)は「将来は新会社へ行けるのか行けないのかが不安だ」と述べることができる。また、(271)も「娘の自殺をなぜとめられなかったのかに苛立つ」と述べることができる。心情タイプは、藤田(1983、1997)の間接疑問構文の3つの分類の中で、「未決」タイプに当たる。(270)では、「将来は新会社へ行けるのか行けないのか」の答えが分からないため、不安だと解釈できる。ただし、心情タイプは、限られた用例しか見つからなかったため、未だ一般化することは難しい。

(270)希望退職で国鉄やめなさい、そしてまた将来は新会社へ行けるのか行けないのかの不安もありますしね。（国会会議録）

(271)手も届くような場所に母親が座っていて、娘の自殺をなぜとめられなかったのかの苛立ちから、薄田の言葉はほとんどかすれていました。（一女優の歩み）

(272)鳥が散弾のようにぼくのほうへ落下しいく粒かの不安にかわるぼくは拒絶された思想となってこの澄んだそらを…（以下省略）（Yahoo!ブログ）

この心情タイプは、3.1.2の問題・疑問タイプと類似していると思われるが、名詞の語彙的な意味で分類を行ったため、別のタイプに分けた。

上記で述べたように、3.1の「間接疑問構文に言い換えられるカノ構文」は、すべて「間接疑問節（修飾節）を＋N（被修飾名詞）する」、もしくは、「間接疑問節（修飾節）が＋N（被修飾名詞）だ」という間接疑問構文の構造に置き換えて述べることが可能なタイプである。このうち、藤田（1983、1997）の間接疑問構文の3つの分類の中で、「対処」タイプに該当する判断タイプと検証タイプ、「既決」タイプに該当する言語表現タイプの３つは、「間接疑問節（修飾節）＋を＋被修飾名詞（N）する」という構造に置き換えて述べられる傾向にある。一方、「未決」タイプに該当する問題・疑問タイプと心情タイプは、「間接疑問節（修飾節）＋が＋Nだ」に置き換えて述べられる傾向にある。

①「間接疑問節（修飾節）＋を＋被修飾名詞（N）する」という構造に置き換えて述べられるタイプ

−「対処」

判断タイプ：実際に、天体観測において星が遠ざかっているか、近づいているかの判断などにも利用されている。（光入門）（＝(246)再掲）

検証タイプ：今後発生した場合は耐性を持つものかどうかの調査を保健所や県教育委員会とも相談し、適切に対応したい。（広報やかげ）（＝(260)再掲）

−「既決」

言語表現タイプ：がん告知を行っていなかったころの、再発発見のための検査をなぜ行なうのかの説明に四苦八苦した時代に比べれば医療の効率化は確実に進んでいると思います。（ウソのない医療）（＝(265)再掲）

②「間接疑問節（修飾節）＋が＋Nだ」に置き換えて述べられるタイプ

−「未決」

問題・疑問タイプ：日本の国土が、まだ大陸と陸つづきだったころから棲んでいた野生馬だとの説もあるが、そうなら、西日本にも骨格たくましい野生馬がどうしていなかったかの疑問も湧いてくる。（陸奥甲冑記）（＝(252)再掲）

心情タイプ：希望退職で国鉄やめなさい、そしてまた将来は新会社へ行けるのか行けないのかの不安もありますしね。（国会会議録）（＝(270)再掲）

「未決」、「既決」、「対処」という分類は、3.1の冒頭で述べたように、間接疑問構文の従属句と主節述語の関係によって決まる。カノ構文では修飾節と被修飾名詞の関係に当たる。つまり、間接疑問構文に言い換えられるカノ構文において、修飾節と被修飾名詞の関係が異なることにより、対応する間接疑問構文の構造も異なっている。また、修飾節と被修飾名詞の関係は、被修飾名詞の種類によって決まると考えられる。

3.2　通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文

ここに属するカノ構文は、すべてカノ構文の「間接疑問節（修飾節）＋の」という部分を、通常の連体修飾に置き換えられるタイプである。例えば、(273)の「どうしてそのチームが急に強くなったのかの」までの部分は、(274)のような「そのチームが急に強くなった」という通常の連体修飾の形に置き換えられる。

(273) どうしてそのチームが急に強くなったのかの原因については、何も知らされていない。

(274)そのチームが急に強くなった原因については、何も知られていない。

このタイプのカノ構文の中にも、3.1のタイプと同じように、カノ構文の間接疑問節（修飾節）が、実際には、疑問文ではない例がある。例えば、(275)の間接疑問節（修飾節）の「いかに力を持っているか」は、疑問の意味を表しているより、「非常に力を持っている」という意味に近い。つまり、この場合の間接疑問節（修飾節）に位置する文は、間接感嘆構文に近い。

(275)「社会部帝国主義」が、いかに力を持っているかの例を挙げてみよう。(毟られる日本)

通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文において、被修飾名詞となる名詞のタイプには次の５つがある。

①証拠タイプ：証左、証、証拠、確証、証し、根拠などの証拠を表す名詞
②原因タイプ：理由、原因などの原因に関する名詞
③印象タイプ：感、観、意、印象などの心情を表す名詞
④手段タイプ：手段、方法、戦略、手練手管、検査法などの手段に関する名詞
⑤過程タイプ：過程、径路、プロセス、経緯などの過程を表す名詞

通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文において、修飾節（間接疑問節）の疑問の種類を【表8】に示した。肯否疑問や選択疑問に比べて疑問詞疑問の割合が非常に大きい点が目立つ。

【表8】通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文の場合

従属節（間接疑問節）の疑問の種類	全体　67例（100%）
疑問詞疑問	43例（64.2%）
肯否疑問	12例（17.9%）
選択疑問	12例（17.9%）

3.2.1 証拠タイプ

通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文の全体67例の中で、26.87%に当たる18例が証拠タイプに分類される。証拠タイプの被修飾名詞となる名詞は、証左、証（し）、証拠、確証、根拠などの証拠を表す名詞である。(276)の「それはいかに合理的に準備をしているか」という部分は、「それは非常に合理的に準備をしている証左」と通常の連体修飾に置き換えられる。証拠タイプは、(276)、(277)、(279)、(280)のように、文中に「いかに」、「どれだけ」などの副詞がある例が多い。その場合、修飾節は「疑問」の意味を表しているわけではなく、現実の世界の物事に対して、その程度の凄さに驚いている「感嘆」の意味を表している。このようなカノ構文は、間接感嘆構文である。一方、修飾節の文が通常の疑問文である(278)のような例もある。

(276)それは**いかに**合理的に準備をしているかの証左だと思っています。(シンプルごはんの思想)

(277)これは、質の高い情報の滞りない流通が経済の発展、社会の安定また国家の安全にとって**どれだけ**重要なものであるかの証左とも言えよう。(通信白書)

(278)つまり、電話の発信者が本人であるかどうかの確証がないからである。(電子ネットワークと個人情報保護)

(279)**いかに**「七百七」が生産されたかの証拠ですね。(Yahoo!ブログ)

(280)暴力で犯された心の傷の数々は、地上への転生が**いかに**厳しく苦難に満ちているかの証であり、みずからの魂の成長の記録そのものだった。(バベルの戦士)

3.2.2 原因タイプ

通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文の全体67例の中で、25.37%に当たる17例が原因タイプに分類される。原因タイプの被修飾名詞となる名詞は、理由、原因などの原因に関する名詞である。寺村（1977）が述べた、「逆補充（相対概念を持っている言葉による補充）[30]による名詞修飾」に類似している。しかし、寺村（1977）の逆補充による名詞修飾では、名詞修飾節と被修飾名詞の間の「の」を「という」に置

[30]「動物園に行った帰り」のように、「帰り」の相対概念に当たる「行った」で被修飾名詞の「帰り」を補充すること。

き換えられないが、原因タイプではそれが可能である。例えば、(281)の「なぜ、こうなったかの理由」という部分は、「なぜ、こうなったかという理由」に替えられる。

(281) なぜ、こうなったかの理由は、新しい製品をどんどん提供することが、技術の進歩だとする考えがあったことだ。(「21世紀」・脱構築への視座)

(281)～(283)では、それぞれの修飾節から「なぜ」や「どうして」という疑問詞を取り除いた「こうなった」、「今日見られるような隆盛を保ち続けてこられた」、「ここまで両者の関係がこじれた」という部分は、被修飾名詞の「理由」や「原因」の具体的な内容を表しているわけではない。むしろ「理由」や「原因」の相対概念に当たる「結果」の具体的な内容である。

(282) このグループの占いが、なぜ今日見られるような隆盛を保ち続けてこられたかの理由は、実にここにある。(占いの宇宙誌)

(283) しかし、前館だけの話ではどちらの話が正しいのか、まして、どうしてここまで両者の関係がこじれたのかの原因はつかめそうもなかった。(人の砂漠)

修飾節と被修飾名詞の間の意味的関係は、修飾節の「なぜ」に対して、被修飾名詞の「理由」を用い、「～という理由／原因で」と答えられるような関係にある。また、修飾節はそのすべてが「なぜ、どうして」を含む疑問詞疑問節である。上記の(281)～(283)を含め、原因タイプのすべての例の修飾節の中には、疑問詞が含まれている。

3.2.3 印象タイプ

通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文の全67例の中で、19.40%に当たる13例が印象タイプに分類される。印象タイプの被修飾名詞となる名詞は、感、観、意、印象などの心情を表す名詞である。印象タイプは、志波（2016： 197）で述べられた「節- かのごとく／かのように」という形を持つ「比況構文」に該当するとみられる。例えば、(284)～(286)は、修飾節と被修飾名詞の間の「の」を「のような」に置き換えられるため、「比喩比況」の意味を表していると考えられる。

(284) この反対意見は、今後も引きつづいて、平沢氏を監獄に閉じ込めておくための法的根拠として案出されたかの感がある。(法廷博物学)

(285) 出かける前から外観は写真で見知っていたが、あらためて眺めると巨大なロボットが立っているかの印象があった。(闇のなかの石)

(286) 設立当初は其の趣旨の存する所も了解されず、強ひて勧誘せられるを以つて入所、出席しておつたかの感があつたけれども最近漸く其の趣旨の存する所が…(以下省略)(大阪河内の近代)

印象タイプのすべての例の修飾節は、疑問詞疑問ではないという特徴がみられた。このタイプのカ節は、疑問文の形をしているが、実際には疑問文ではなく、被修飾名詞がどのようなものなのかを描写している比喩比況であるため、肯否疑問や選択疑問になる場合が多いと考えられる。修飾節の疑問の種類は(287)のような選択疑問よりは、(284)～(286)のような肯否疑問の割合が相対的に大きかった。また、修飾節の疑問の種類が選択疑問の(287)は、修飾節の疑問の種類が肯否疑問の(284)～(286)に比べ、修飾節の疑問の非現実性は弱くなる傾向がある。

(287) スタメンとベンチに競争がある以前に代表に選ばれるか落とされるかの危機感がなければ代表である意味がないし、若手も育たない。(Yahoo!知恵袋)

印象タイプの被修飾名詞は心情を表す名詞であり、心情を表す名詞は、あるものや出来事に遭遇した際の心の中の思いを表す名詞であるため、より抽象的で不明確な概念である。そのため、「～そうな」「～のような」という「比喩比況」の表現を補って修飾されることが多い。「比喩比況」は、事態が現実世界では成立していないことが前提であり、その点で判断が未成立の「疑問」と共通するが、典型的な疑問ではない。例えば、(285)の修飾節の「巨大なロボットが立っているかの」は、「巨大なロボットが立っているかのような」に置き換えられる。そのため、事態が現実世界では成立していない「比喩比況」であり、典型的な疑問ではないことが分かる。一方、(288)は比喩比況ではなく、「～ではないかという意味に解釈する」という意味である。

(288) 師から伝えられた事に対し、時に之を習うという努力を払わなかったのではないかの意に解釈する説もある。(諸橋轍次『論語の講義』)

3.2.4 手段タイプ

通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文の全67例の中で、14.93%に当たる10例が手段タイプに分類される。手段タイプの被修飾名詞となる名詞は、手段、方法、戦略、手練手管、検査法などの手段に関する名詞である。(289)の「その結果右保全の要請と自動車道路の整備拡充の必要性とをいかにして調和させるべきかの手段」というところは、「その結果右保全の要請と自動車道路の整備拡充の必要性とを調和させる（べき）手段」と置き換えることが可能である。手段タイプの修飾節の中には「いかに」、「どのように」、「どうすれば」などの疑問詞が含まれている場合が多い。修飾節と被修飾名詞の間の意味的関係は、修飾節の「いかに」、「どのように」、「どうすれば」などの疑問詞に対して、被修飾名詞の「手段、方法」などを用い、「～という手段／方法で」などと答えられるような関係にある。

(289) その結果右保全の要請と自動車道路の整備拡充の必要性とを**いかに**して調和させるべきかの手段、方法の探究において、当然尽すべき考慮を尽さず、また…（以下省略）（判例行政法入門）

(290) その選択肢の利点・弱点を精査し、最終的に**どのように**目的を達成するかの戦略を提案する。（ハーバードで語られる世界戦略）

(291) 世田谷ベースの本の方なら、確か同じ号で、**どうやったら**みんなが道にゴミを捨てなくなるかの方法について、所さんがこんな内容の事を言っていた。（Yahoo!ブログ）

(292) しかしながら、ハマフエフキの稚魚がいつごろどこに着底するのかはほとんどわかっておらず、ましてや**どうやって**調査するのかの方法すら思いつかなかった。（稚魚の自然史）

3.2.5 過程タイプ

通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文の全67例の中で、13.43%に当たる9例が過程タイプに分類される。過程タイプの被修飾名詞となる名詞は、過程、径路、プロセス、経緯などの過程を表す名詞である。過程タイプの修飾節の中には「いかにして」、「いかに」、「どのように」など、過程を表している疑問詞が含まれている場合が多い。修飾節と被修飾名詞の間の意味的関係は、修飾節の「いかにして」、「いかに」、「どのように」などの疑問詞に対して、被修飾名詞の「過程/経路/プロセス」などを用い、「～という過程/経路/プロセスで」などと答えられるような関係にある。

(293) 戦後の欧州統合の歴史は、ドイツを**いかに**封じ込めるかのプロセスだったということはよく知られ

ている。(Euroの衝撃！)

(294)現在の世界がどう変化しているかを理解するためには、大戦直後まで遡って、当時の世界が**どのように**東西陣営に分裂したかの経緯について、考える必要があると思います。(90年代世界はどう動く)

(295)在日の立場では具体的に、かつて支配者の言語である日本語が日本語の個別性を超越して、想像力の空間―フィクション―を形成するかの過程で、**いかにして**言語は民族語の呪縛を脱し得るか。(存在の原基金石範文学)

この過程タイプは、3.2.4の手段タイプと類似していると思われるが、名詞の語彙的な意味で分類を行ったため、別のタイプに分けた。

以上、確認したように、3.2で記述したカノ構文はすべて通常の連体修飾に置き換えられるタイプである。そのうえ、原因タイプ、手段タイプ、過程タイプの３つにおいて、修飾節と被修飾名詞の間の意味的関係は、修飾節の疑問詞に対する答えとして、被修飾名詞を用い、「～という＋被修飾名詞＋で」などと述べられるような関係にある。一方で、証拠タイプと印象タイプは、そのように述べることは難しいとみられる。それは他のタイプと違い、修飾節が典型的な疑問文ではなく、感嘆文や比喩比況を表す文であることと、深く関連しているように見える。最後に、3.1の各タイプでも、修飾節と被修飾名詞の関係は、被修飾名詞の種類のよって決まっていたが、3.2においても、同じように、被修飾名詞の種類によって決まると考えられる。

3.3 選言文に関わるカノ構文

ここに属するカノ構文は、選言文に関わるタイプのカノ構文であり、間接疑問構文に置き換えることも、通常の連体修飾に置き換えることもできないタイプである。3.1の間接疑問構文に言い換えられるカノ構文と3.2の通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文は、修飾節の文が疑問文であるため、その答えに焦点を当てていると同時に、被修飾名詞も修飾節の疑問の答えと関係がある。一方で、選言文に関わるカノ構文は、修飾節の文が疑問文の形をしているものの、選言文に近いため、疑問の答えよりは修飾節自体の局面に注目している。例えば、(296)の「そこが国際化を真に理解できるか、表面的な辻褄合わせに終わるか」という修飾節の部分は、疑問文の形をしている。しかし、疑問の答えよりは、どのような「瀬戸際」であるのかを、修飾節の部分で具体的に述べながら、修飾節の局面に注目している。

(296)そこが国際化を真に理解できるか、表面的な辻褄合わせに終わるかの瀬戸際だと思う。

修飾節の疑問の種類を観察すると、間接疑問構文に言い換えられるカノ構文と、通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文は、「疑問詞疑問」が多かったが、選言文に関わるカノ構文は、「AかBか」のように、疑問文の中に疑問の答えが選択肢として述べられている「選択疑問」ないし「選言」である。このような部分が1つの構造的な特徴である。

選言文に関わるカノ構文において、被修飾名詞となる名詞のタイプは次の４つがある。

①分かれ目タイプ：瀬戸際、岐路、分岐点、分かれ目などの分かれ目に関する名詞
②差異タイプ：違い、差、相違、差異などの差異を表す名詞
③時間タイプ：うち、ころ、瞬間、時期などの時間に関わる名詞
④結果タイプ：結果を表す名詞

選言文に関わるカノ構文において、修飾節（間接疑問節）の疑問の種類を【表9】に示した。疑問詞疑問や肯否疑問に比べて選択疑問の数が非常に多いところが目立つ。このタイプは、前述したように、修飾節の疑問の種類が選択疑問であるところが1つの構造的な特徴だと考えられる。

【表9】選言文に関わるカノ構文の場合

従属節（間接疑問節）の疑問の種類	全体　217例（100%）
選択疑問（もしくは、選言）	187例（86.2%）
疑問詞疑問	26例（12.0%）
肯否疑問	4例（1.8%）

3.3.1 分かれ目タイプ

選言文に関わるカノ構文の全217例の中で、47%に当たる102例が分かれ目タイプに分類される。分かれ目タイプの被修飾名詞となる名詞は、瀬戸際、岐路、分岐点、分かれ目、分かれ道、限界、二者択一、天王山、基準、尺度、目安、二途などの分かれ目に関する名詞である。分かれ目タイプは、「～するかしないかの分かれ目」というパターンで、「ある出来事が起きるか起きないかが不確実である大事な局面・場

面」という意味を表している。このタイプは、分かれ目という文字通りの意味だけではなく、大事な局面という意味が読み取れるため、他の構文に比べて慣用的な言い回しに近い構文として考えられる。また、修飾節と被修飾名詞をつなげる「の」は「という」に替えることも可能である。

次の(297)の「故郷の松本で彼女と一緒に暮らすべきか、それとも幸子と別れて仕事に徹するか」という文は選択疑問文である。

(297)ぼくは仕事を辞めて、故郷の松本で彼女と一緒に暮らすべきか、それとも幸子と別れて仕事に徹するかの岐路に立たされた。(あなたを忘れきれない男たち)

しかし、(297)のカノ構文は、その選択疑問文の答えよりは、文の主語がどのような局面に置かれているのかに注目している。言い換えれば、修飾節の具体的な内容を通して、文の主語がどのような局面にあるのかを詳しく説明しているタイプのカノ構文である。このように文の意味関係を中心として考えると、修飾節の疑問文は、選択疑問文でありながら、その答えを求めていない選言文に近いと考えられる。すなわち、修飾節の文が選択疑問文なのか選言文なのかが曖昧であるという特徴を持つ。こうした特徴がある3.3.1に比べて、3.1.2問題・疑問タイプに該当する(298)はどうだろうか。

(298)日本の国土が、まだ大陸と陸つづきだったころから棲んでいた野生馬だとの説もあるが、そうなら、西日本にも骨格たくましい野生馬がどうしていなかったかの疑問も湧いてくる。(陸奥甲冑記)(=(88)再掲)

(298)は3.1.2で確認したように、「西日本にも骨格たくましい野生馬がどうしていなかったかが疑問だ」と述べることができることから、この文は修飾節の疑問の答えに注目していることが読み取れる。つまり、(298)のカノ構文は典型的な間接疑問構文に言い換えられるカノ構文である。一方で、ここの3.3.1の分かれ目タイプの中にも次の(299)、(300)のように、典型的な間接疑問構文ではないが、その周辺に近いタイプがある。(299)、(300)は志波(2016: 195)が依存構文と指摘した、間接疑問構文の周辺の構文に近いタイプだと思われる。例えば、(299)は「失敗した時の対応如何で、園芸が上達するか否かが決まる」という依存構文に、(300)は「その行為が公的活動なのか私的活動なのかで、公務員の行動を公開するか非公開にするかが決まる」という依存構文に言い換えることもできる。つまり、(299)と(300)は依存構文に似通う。このように、(299)と(300)が依存構文に似通うのは、この２つの文は後続節にも疑問節があるためだと考えられる。(299)は後続節に「如何」があり疑問詞疑問節に、(300)は後続節が選択疑問節に

なっているため、依存構文に換えることができる。

(299) 園芸が上達するか否かの分かれ目は、失敗した時の対応如何にあります。(盆栽は楽しい)
(300) 公務員の行動を公開するか非公開にするかの分岐点は, その行為が公的活動なのか私的活動なのかです。(よくわかる情報公開制度)

一方、次のような結論タイプもある。結論タイプは分かれ目タイプに類似しているものの、一部異なる部分があるため、分かれ目タイプの周辺に位置するものとして分類する。結論タイプは分かれ目タイプと同様に、被修飾名詞がどのようなものなのかを修飾節の部分で詳しく述べている。さらに、修飾節の疑問の種類が選択疑問になっており、被修飾名詞の前の「の」を省略できるところも分かれ目タイプと一致する。しかし、結論タイプは、被修飾名詞の前の「の」を「についての」に替えられるが、分かれ目タイプは替えられない。例えば、(301)は「どっちがいいかについての結論」に、(302)は「結婚か仕事かについての結論」に替えても文全体の意味は変わらない。

(301) どっちがいいかの結論は出ませんね。(Yahoo!知恵袋)
(302) 千九百八十四年６月、結婚か仕事かの結論を出せぬまま、テレサはロンドンに短期留学をする。(女性セブン)

3.3.2 差異タイプ

選言文に関わるカノ構文の全217例の中で、32.72%に当たる71例が差異タイプに分類される。差異タイプの被修飾名詞となる名詞は、違い、差、相違、差異、有無などの差異を表す名詞である。差異タイプは、被修飾名詞を主題とし、修飾節を述部とする選言文に置き換えられるタイプである。例えば、前述した分かれ目タイプの(299)の場合、非文ではないが不自然な文になるため、「分かれ目は園芸が上達するか否かだ」のようには変えられない。元の文と意味上の差が出る上で、この文だけでは、やや不自然に思われる。しかし、差異タイプに当たる次の(303)は、「違いは猫の所有者が一個人か地域かだ」のような完全な選言文に変えても、元の文との意味上の差はなく、この文だけでも自然な文である。つまり、3.3.1分かれ目タイプは選言文の構造に変えられないが、差異タイプは選言文の構造に変えられるため、差異タイプのほうがより選言文に近いと考えられる。残りの(304)～(306)の例もそれぞれ「ちがいはただ障害が

見えるか見えないかです」のような選言文に替えられる。

(303)猫の所有者が一個人か地域かの違いです。(Yahoo!知恵袋)

(304)ただ障害が見えるか見えないかのちがいだけなんです。(これがぼくらの五体満足)

(305)サービスマンとしてのプライドを持てるかどうかの差です。(クレームはラブレターだ)

(306)基本を知っている、そしてそれに忠実か、あるいはそうでなかったのかの差だけなのである。(ヒロカネ食堂)

3.3.3 時間タイプ

選言文に関わるカノ構文の全217例の中で、15.21%に当たる33例が時間タイプに分類される。時間タイプの被修飾名詞となる名詞は、うち、ころ、時、瞬間、時期、タイミングなどの時間に関わる名詞である。時間タイプは、「～するかしないかのうち」というパターンを用い、「その事態が成立してすぐに」という意味を表している。つまり、「～するかしないかのうち」というパターンの文字通りの意味だけではなく、そこから「その事態が成立してすぐに」という少々異なる意味が出るため、分かれ目タイプと同様に、他の構文に比べて慣用的な言い回しの構文と考えられる。「～するかしないか」という修飾節の表現は、形式上、肯定と否定が並べられており、選択疑問文の形をしている。しかし、修飾節と被修飾名詞の意味的な関係からは、「その事態が成立してすぐに」という意味が導かれる。そのため、修飾節の文は、選言文としてみることも可能である。したがって、時間タイプは、その修飾節の文が選択疑問文か選言文かが曖昧なタイプであると考えらえる。例えば、(307)の「根回しくんが最後の足を降ろすか降ろさないかのうちには」という部分は、「根回しくんが最後の足を降ろしてすぐには」に、(308)の「一時間過ぎたか過ぎないかの頃」という部分は、「一時間過ぎてすぐの頃」に言い換えられる。

(309)と(310)のように、被修飾名詞が時間タイプに該当する名詞ではあるが、修飾節が「～するかしないか」ではなく、「～するかどうか」になっている文が少数見つかった。この場合は、「その事態が成立してすぐに」という意味はなくなる。

(307)ぞろぞろとお三人衆が降りて、そして、根回しくんが最後の足を降ろすか降ろさないかのうちにはもう、その木遣り一本気合充分のオアニイサン的運ちゃん、いきなりアクセルを踏み込んだかと思うと…(以下省略)(消えた十二支の謎)

(308)「もう無理絶対に無理動けないし・・・」と言いながらめったに飲まないコーラで一息入れる。それから一時間過ぎたか過ぎないかの頃、今夜二度目を開始していたどうせそうかなぁー…（以下省略）（Yahoo!ブログ）

(309)妊娠したかどうかの時に言われる言葉です。（Yahoo!知恵袋）

(310)その交渉が妥結するかどうかのときに、当然当たり前のことで、収用のことを、別に収用というのは交渉じゃありませんから…（以下省略）（国会会議録）

3.3.4 結果タイプ：結果を表す名詞

選言文に関わるカノ構文の全217例の中で、11例（5.07%）が結果タイプに分類される。結果タイプの被修飾名詞となる名詞は、結果を表す名詞である。(311)の場合、修飾節の疑問文の種類は「Aか、Bか」という選択疑問文の形をしている。しかし、AとBは、お互い相反する内容のものではなく、同じ部類と考えられる事態であるため、選択疑問文ではなく選言文そのものと考えられる。

(311)小川が見落としたか、無視したかの結果にすぎない。（山下昇『フォッサマグナ』）

一方で、(312)と(313)の場合、修飾節の疑問文の種類は「AかBか」という選択疑問文ではなく、疑問詞疑問である。しかし、結果タイプのカノ構文が焦点を当てているのは、その疑問詞疑問の答えではなく、それによる結果、もしくは、命題である「修飾節による結果」そのものである。つまり、このような部分で選言文に近いと思われる。結果タイプのこのような特徴は、日本語記述文法研究会（2003）の「付随名詞修飾節」[31]に類似している。

(312)グラフで表される数字は、ダイエットしようと言う気持ちではなく、どう実行したかの結果なのです。（Yahoo!知恵袋）

(313)それは、起こったことをあなたがどう受けとめたかの結果なのです。（「願う力」で人生は変えられる）

---

[31]付随名詞修飾節とは、修飾節の内容の結果、付随するものが被修飾名詞となるような修飾節を指す。例えば、「お菓子を買ったおつり」という文で、修飾節の「お菓子を買った」結果、付随するもの（「おつり」）が被修飾名詞となる。このような修飾節のことを附随名詞修飾節という。

修飾節と被修飾名詞の関係は、被修飾名詞の前の「の」を「による」に替えられるため、修飾節の事態に付随するものが被修飾名詞であると考えられる。例えば、(312)の「どう実行したかの結果」という部分は、「どう実行したかによる結果」と述べられる。また、修飾節と被修飾名詞はこのような関係にあるため、修飾節と被修飾名詞の間の「の」を「という」に替えることは不可能である。結果タイプに比べ、3.1.1判断タイプから3.3.3時間タイプまでのタイプは修飾節と被修飾名詞の間の「の」を「という」に替えられる。このことは、カノ構文が、カ節の具体的な内容に焦点を当てている引用構文と深い関係があることを意味する。これについては、次の第５章で再び説明する。最後に、選言文に関わるカノ構文は、その修飾節の疑問の種類が、【表9】で確認したように、選択疑問である場合が圧倒的に多い。しかし、(312)と(313)は、疑問詞疑問であり、それぞれ「実行した結果」、「起こったことをあなたが受けとめた結果」のように変えられるため、通常の連体修飾に置き換えられるタイプに類似しているように見える。しかし、これについては検討の余地がある。

以上、確認したように、3.3のカノ構文は選言文に関わるカノ構文である。各下位タイプの修飾節と被修飾名詞の間の関係は以下の通りである。

① 修飾節を通して被修飾名詞がどのような局面にあるのかを詳しく説明している関係

3.3.1分かれ目タイプ

→園芸が上達するか否かの分かれ目は、失敗した時の対応如何にあります。((299) 再掲)

3.3.3時間タイプ

→妊娠したかどうかの時に言われる言葉です。((309)再掲)

② 被修飾名詞を主題とし、修飾節を述部とする選言文に置き換えられる関係

3.3.2差異タイプ

→猫の所有者が一個人か地域かの違いです。((303)再掲)

③ 修飾節の事態に付随するものが被修飾名詞であると考えられる関係

3.3.4結果タイプ

→小川が見落としたか、無視したかの結果にすぎない。((311)再掲)

つまり、同じく選言文に関わるカノ構文であっても、上記の①～③のように、被修飾名詞の種類により、修飾節と被修飾名詞の関係は異なるということが分かった。また、同じ下位タイプに属しても、構造的にも意味的にも選言として考えられる③のようなタイプがある反面、選言と構造的には異なるが、意

味的には近い①と②のタイプがあるということも確認できた。つまり、選言文に関わるカノ構文の下位タイプは、どのくらい選言に近いかという程度において、差があると思われる（①→③の順番で選言文に近くなる）。

最後に、被修飾名詞の位置にどのような名詞が来やすいのかを具体的に確認するため、抽出されたカノ構文の被修飾名詞の数の順位を、上位49位[32]までを【表10】に示す。抽出された上位49位までの名詞はそのすべてが抽象名詞であるという特徴がある。また、過半数以上の名詞が「する」を後続させ、動作を表せるような動作性名詞であるという特徴もあった。カノ構文700例を対象に、分類した3つのタイプのそれぞれの数を【表11】に示した。カノ構文の過半数以上が間接疑問構文に対応するタイプであることが分かる。

[32] ３例以上見つかったものを順位化した。

【表10】カノ構文の被修飾名詞の上位49位まで[33]

被修飾名詞	被修飾名詞の種類	数	割合（%）	被修飾名詞	被修飾名詞の種類	数	割合（%）
問題	問題・疑問タイプ	74	12.3	目安	分かれ目タイプ	5	0.8
判断	判断タイプ	60	10.0	ほう	問題・疑問タイプ	4	0.7
違い	差異タイプ	37	6.2	一点	問題・疑問タイプ	4	0.7
瀬戸際	分かれ目タイプ	19	3.2	結果	結果タイプ	4	0.7
判定	判断タイプ	15	2.5	点	問題・疑問タイプ	4	0.7
選択	判断タイプ	14	2.3	二通り	分かれ目タイプ	4	0.7
差	差異タイプ	14	2.3	評価	分かれ目タイプ	4	0.7
確認	判断タイプ	14	2.3	論議	検証タイプ	4	0.7
うち	時間タイプ	13	2.2	検査	検証タイプ	4	0.7
理由	原因タイプ	13	2.2	見極め	判断タイプ	4	0.7
決定	判断タイプ	10	1.7	指標	分かれ目タイプ	4	0.7
区別	判断タイプ	9	1.5	時	時間タイプ	4	0.7
議論	検証タイプ	8	1.3	証明	検証タイプ	4	0.7
分岐点	分かれ目タイプ	7	1.2	岐路	分かれ目タイプ	3	0.5
基準	分かれ目タイプ	7	1.2	記録	言語表現タイプ	3	0.5
検討	検証タイプ	7	1.2	結論	結論タイプ	3	0.5
説明	言語表現タイプ	6	1.0	見通し	判断タイプ	3	0.5
分かれ目	分かれ目タイプ	6	1.0	原因	原因タイプ	3	0.5
二者択一	分かれ目タイプ	6	1.0	手段	手段タイプ	3	0.5
審査	判断タイプ	6	1.0	ポイント	問題・疑問タイプ	3	0.5
決断	判断タイプ	5	0.8	検証	検証タイプ	3	0.5
質問	言語表現タイプ	5	0.8	証左	証拠タイプ	3	0.5
判断基準	分かれ目タイプ	5	0.8	チェック	判断タイプ	3	0.5
話	言語表現タイプ	5	0.8	調査	検証タイプ	3	0.5
問い	問題・疑問タイプ	5	0.8				

【表11】カノ構文の3つのタイプとその数

カノ構文の3つのタイプ	数	割合（%）
間接疑問構文に対応するカノ構文	416例	59.4%
通常の連体修飾に言い換えられるカノ構文	67例	9.6%
選言文に関わるカノ構文	217例	31.0%
合計	700例	100.0%

[33]現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT）を用いて抽出した700例から作成された。

4　カノ構文の被修飾名詞となることが難しい名詞

分析を行ったカノ構文700例の中で、698例の被修飾名詞はすべて抽象名詞であり、具体名詞である文は以下の(314)と(315)の2例しかなかった。しかし、「幼児」と「カギ」は具体名詞に該当するが、実際、文の中では比喩の１つである隠喩の用法を用い、抽象名詞として使われていることが分かる。例えば、(314)の「幼児」と言われている自分は、本当に幼児かどうかは関係なく、従属節で敢えて幼児の特徴について具体的に、かつ、抽象的に述べられているのは、被修飾名詞の「幼児」が抽象的な意味として使われていることを意味する。(315)の「カギ」も目に見える具体物としてのカギではなく、何かを解決するのに最も大切な事柄という意味の「抽象的な概念」として使われている。つまり、具体名詞はカノ構文の被修飾名詞になることが難しいと言える。もし、具体名詞がカノ構文の被修飾名詞になるとしても、それは抽象的な概念として使われている時に限られる。言い換えれば、カノ構文において被修飾名詞となる名詞は、修飾節が被修飾名詞の内容を表すことができるものでなければならないということを意味する。

(314) 自分がなにをしているか、それさえもわからない、物心つくかつかないかの幼児なの。(面影は幻の彼方)

(315) この制度が有用なものとなるかどうかのカギとなるだろう。(消費者はなぜだまされるのか)

(314)は、「幼児」は成長期の１つの段階で、時間の流れと関係あるため、時間タイプの周辺に位置付けられる。つまり、「時間タイプのメトニミー的使用」である。(315)は、「カギ」が最も大切な事柄を表しているため、分かれ目タイプの周辺に位置付けられる。

抽象名詞ではあるものの、「命令」、「禁止」、「依頼」などもカノ構文の被修飾名詞となることが難しい。「はじめに」のところで少し述べたが、(316)の場合、普通のカノ構文と等しく、被修飾名詞の「依頼」がどのようなものなのかが、修飾節に具体的に言及されている。そのため、文法的には特に問題がないように思われる。しかし、この文は非文である。

(316) ＊会社の取引先からこの仕事をやってくれないかの依頼を受けたが、断るしかなかった。

このカノ構文は、「～てくれないか」というモダリティが修飾節の中に使われている。カノ構文700例の中で、モダリティが修飾節の中に使われているカノ構文は、わずか9例しかなかった。この9例に使われているモダリティは、すべて「か」が後続できる「のではない」、「べき」、「～なければならない」など、モダリ

ティの中の一部だけである。つまり、モダリティの中で「～なさい」、「～てください」、「～かもしれない」、「～に違いない」など、「か」が後接しないタイプは、カノ構文の修飾節の中にこられない。言い換えれば、疑問の「か」が後ろに後接しない「命令（行け）」、「禁止（行くな）」、「推量（行ったかもしれない）」のモダリティは、カノ構文の修飾節にはなりにくい。当然、このようなタイプのモダリティ表現によって修飾を受ける「命令」、「禁止」、「推測」などの抽象名詞も、カノ構文の被修飾名詞とはなりにくいことになる。実際、カノ構文700例の中で被修飾名詞に「命令」、「禁止」、「推測」が使われている例は1つも見つからなかった。

「行こう（誘い）」の場合、「か」が後ろにきて「行こうか」のように使えるモダリティである。一般的に「行こうか」という表現を使うと、聞き手が想定され、聞き手に問いかけているようなニュアンスが出てしまう。そのため、(317)のように、「行こうか」がカノ構文の修飾節の中で使われると、引用のように感じられてしまう。一方で、(318)のように「の」の代わりに、引用の表現を媒介する「という」が使われると、自然に感じられる。つまり、カノ構文の「の」の前には、聞き手に問いかけているようなニュアンスが出てしまう「引用節」は入れないということが分かる。言い換えれば、(317)のようなカノ構文の「の」には、「と」のような「引用したい文と主節述語を結ぶ機能」はないということになる。そのため、(316)の例も非文になる。しかし、(319)の「辞めようかどうしようか」のように、修飾節が「独り言」のニュアンスの文になると、その容認度は上がり、非文ではなくなる。

(317) ＊一緒に映画館に行こうかの誘いを断った。

(318) 一緒に映画館に行こうかという誘いを断った。

(319) ？長い間、辞めようかどうしようかの迷いで辛い気分だった。

5　まとめと今後の課題

本研究では、カノ構文の「～カ＋ノ」という修飾節と被修飾名詞との間の異なる関係により、どのような形式に置き換えられるかという構造的な特徴を基準とし、カノ構文の下位タイプの分類を行った。さらに、分類されたカノ構文の下位タイプにおいて、被修飾名詞となる名詞の種類や修飾節の疑問の種類についても考察を行った。その結果、被修飾名詞となる名詞の種類は、被修飾名詞と修飾節がどのような構造的関係を持っているのかに大きく影響を与えることが分かった。【表12】にカノ構文の下位タイプと被修飾名詞の種類を提示しておく。

【表12】カノ構文の下位タイプと被修飾名詞の種類

カノ構文の種類	下位タイプ	被修飾名詞となる名詞
間接疑問構文に言い換えられるカノ構文	判断タイプ	**思考や認識を表す動作性名詞**： 判断、判定、見極め、見通し、予想、区別、選別、選択、確認、比較、把握など
	問題・疑問タイプ	**問題・疑問に関する名詞**： 問題、問い、ほう、一点、点、ポイント、内容、課題など
	検証タイプ	**検証を表す動作性名詞**： 実験、研究、調査、分析、吟味、議論、論議、検証、証明、試験、検討などの
	言語表現タイプ	**言語表現を表す動作性名詞**： 説明、話、記録、記述、質問など
	心情タイプ	**心情を表す名詞**： 不安、苛立ちなど
通常の連体修飾に言い換えられるカノ構文	証拠タイプ	**証拠を表す名詞**： 証左、証、証拠、確証、証し、根拠など
	原因タイプ	**原因に関する名詞**： 理由、原因など
	印象タイプ	**心情を表す名詞**： 感、観、意、印象など
	手段タイプ	**手段に関する名詞**： 手段、方法、戦略、手練手管、検査法など
	過程タイプ	**過程を表す名詞**： 過程、径路、プロセス、経緯など
選言文に関わるカノ構文	分かれ目タイプ	**分かれ目に関する名詞**： 瀬戸際、岐路、分岐点、分かれ目、分かれ道、限界、二者択一、天王山、基準、尺度、目安、二途など
	差異タイプ	**差異を表す名詞**： 違い、差、相違、差異、有無など
	時間タイプ	**時間に関わる名詞**： うち、ころ、時、瞬間、時期、タイミングなど
	結果タイプ	**結果を表す名詞**： 結果

修飾節（間接疑問節）の疑問の種類は、3.1の間接疑問構文に言い換えられるカノ構文の場合、選択疑問と疑問詞疑問の割合が大きく、3.2の通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文の場合は、疑問詞疑問の割合が大きく、3.3の選言文に関わるカノ構文場合は、選択疑問（もしくは、選言）の割合が大きかった。これは、修飾節の疑問のタイプと被修飾名詞の意味が、お互いに関わっていることを意味すると考え

られる。それに、同じタイプのカノ構文でも、修飾節（間接疑問節）の疑問の種類によっては、別のタイプのカノ構文に似通うこともあった[34]。

最後に、本章における今後の課題を考える。本研究では、(320)と(321)のような用例は確認できなかった。(320)と(321)は3.1の間接疑問構文に言い換えられるカノ構文に近いと思われるが、(322)と(323)のような間接疑問構文の構造にすると、非文になる。しかし、これらの文もカノ構文と考えられる。

(320)運転免許証の再交付の流れがどうなっているのかの詳細が分からない。

(321)元気かどうかの安否を知りたい。

(322)＊運転免許証の再交付の流れがどうなっているのかが詳細だ。

(323)＊元気かどうかが安否だ。

今後、さらに多くの用例を観察し、これらの文がどのようなタイプとして分類できるのかを検討する必要があるだろう。さらに、カノ構文の名詞修飾節と、通常の名詞修飾節との違いを明らかにしたい。なお、本研究では、カノ構文の３つのタイプについて、被修飾名詞の共通する意味的側面によって、下位タイプを分類した。しかし、何を基準とし、共通する意味的側面を持っていると判断するのかについては、さらに明確にする必要があると考える。

[34] これについては、(312)と(313)の説明のところで述べた。

第５章　カト構文と間接疑問構文の相関関係

1　はじめに

第３章で扱った「～かと思う」構文は引用構文に、**第４章**で扱ったカノ構文は間接疑問構文に属するものである。本章では、「～かと思う」構文とカノ構文の上位概念である、引用構文と間接疑問構文が、どのようなところで異なっているのか、どのようなところで類似しているのかについて、その構造と意味の両面から考察を行う。その中で、両者がどのような関係を結んでいるのか、その全体の体系を明らかにすることを目的とする。

2　カト構文と間接疑問構文の形式的な相違点

(324)の「寂しくないかと思います」のように、カ節を持っている引用構文のことを第１章でカト構文と定義した。

(324)今度の旅行は二人で行くので、寂しくないかと思います。

間接疑問構文については、従属節の疑問と主節述語が意味的に「疑問」と「答え」の関係を成している構文のことを第２章の 4.1 で間接疑問構文と定義した。例えば、(325)は間接疑問構文であり、(325)の従属節の「今年の世界経済成長率がどのくらいなのか」という疑問に対し、主節述語の「分からない」は、その答えと考えられる。

(325)今のところ、今年の世界経済成長率がどのくらいなのか分からない。((94)再掲)

カ節を持っているというところで共通している、カト構文と間接疑問構文は、その典型的なタイプとして、基本的に両文とも以下のような構造を持っている。

(326)両構文の共通する構造：「(主節主語)＋従属節-カ＋主節述語」

(326)の構造で確認できるように、カト構文と間接疑問構文の構造は、各構文の特徴を見せてくれる「かと」と「か」以外の部分は、ほぼ一致していることが分かる。

次は、カト構文と間接疑問構文が、構文の形式面においてどのように異なっているのかについて考察する。カト構文と間接疑問構文は、①文の基本的な構造、②従属節の疑問のタイプ、③主節述語動詞、④モダリティの有無の大きく４つの面において、異なる点が観察できる。

2.1　文の基本的な構造

まず、カト構文と間接疑問構文の基本的な構造における相違点について確認する。従属節としてカ節を持っているというところで共通しているこの２つの構文は、その典型的なタイプとして、以下のような構造を持っている。

(327)カト構文の基本構造：「(主節主語)＋従属節-カ＋ト＋主節述語」

・どうしてだれもこないのかと思った。

(328)間接疑問構文の基本構造：「(主節主語)＋従属節-カ＋主節述語」

・何時に授業が始まるのか分からない。

すぐに認識できる相違点は、「と」の有無である。例えば、(329)は、従属節として引用節を持つ引用構文の典型的なタイプである。主節主語の「私」が省略されており、従属節の「どうしたらこの窓が開けられるのか」と主節述語の「考えた」で文が構成されている。この文は、引用の「と」を用い、どのように「考えた」のか、その具体的な内容を従属節の中に表している。また、形式的には「どうしたらこの窓が開けられるのか」のように「か」があるので、疑問の形になっているが、実は主節主語である私が「窓を開ける方法を考えた」という内容であり、聞き手を想定し、その聞き手に質問をしている疑問文ではないと考えられる。つまり、カト構文は、従属節が疑問の意味を持っていない場合が多く、形式だけが疑問文になっていることが多い。一方、(330)は、従属節として間接疑問節を持つ間接疑問構文の典型的なタイプであ

る。省略された主節主語の「私」が、従属節の疑問である「どうしたらこの窓が開けられるのか」の答えが「分からない」という文である。つまり、「か」を用い何が分からないのか、その具体的な疑問の内容を従属節の中に間接的に表している。このように間接疑問構文は、従属節が形式的にも意味的にも疑問文である。

(329) どうしたらこの窓が開けられるのかと考えた。(カト構文)
(330) どうしたらこの窓が開けられるのか分からない。(間接疑問構文)

上記で確認したように、カト構文と間接疑問構文の構造における相違点は、「と」の有無である。しかし、カト構文における従属節は疑問の意味はなく、平叙の意味を持っていることが多い。それに比べ、間接疑問構文の従属節は形式的にも意味的にも疑問文である。

2.2 従属節の疑問のタイプ

カト構文と間接疑問構文の間で、従属節の疑問のタイプについては、どのような差が観察できるのか。小説の地の文と名大会話コーパスから収集した「カト構文」の 800 例を対象とし、従属節が疑問詞疑問[35]なのか、肯否疑問[36]なのかを調べた。その結果、疑問詞疑問と肯否疑問の割合は、約 3 : 7 (243 例 : 557 例) であった。ただし、カト構文の従属節は、(331)の「ひと眠りしようか」のように、疑問の意味を持っていないまま、形式だけが肯否疑問になっていることが多いため、「肯否疑問」という用語は使わず、「肯否疑問の形式」とする。

(331) 明け方に飲んだ痛み止めの薬が効きはじめ、さてひと眠りしようかと思った頃、江崎が来た。(王将たちの謝肉祭)

一方で、典型的な間接疑問構文のカ節の疑問詞疑問と肯否疑問の割合は、志波 (2015、2016) によれば、近代語の場合は約 8:2、現代語の場合は約 7:3 である。これらの結果を比較すると、典型的な間接疑問構文に比べ、カト構文の場合は、従属節の疑問のタイプにおいて、疑問詞疑

[35] 疑問文の中に疑問詞が含まれている疑問文のことを指す。例) いつ終わるんですか。
[36] 疑問の答えが YES か NO になる疑問文のことを指す。例) 今日は終わるのか。

問の形式より肯否疑問の形式の割合が大きいことが分かる。これにはどのような原因が考えられるであろうか。

カト構文は、思考動詞が主節述語動詞となる文が 800 例中 494 例で、過半数を占めていた。言い換えれば、カト構文では、主節述語が思考動詞、特に「思う」になる文が最も典型であると考えられる。ここでは、カト構文の中でも「～かと思う」の構造を持つ、最も典型的な文を用いて考察を行う。**第３章**の **3.1.3** のモダリティで確認したように、「～かと思う」文の従属節述語の中には、「推量」、「願望」、「意志」の３つのモダリティが高い頻度で使われる。この３つのモダリティに当たる「～（の）ではないか」、「～てくれないか」、「～（よ）うか」、「～だろうか」などは、そのモダリティ自体が持つ「推量」、「願望」、「意志」という意味の為に、疑問詞が入っている文よりは、疑問詞が入っていない平叙文と親和性がある。言い換えれば、この３つのモダリティは、疑問詞との親和性が低いと思われる。「推量」、「願望」、「意志」のモダリティは話し手の判断や態度であり、既定の意味を持つ。しかし、疑問詞には決まっていないという不定の意味があり、不定のことを用い、既定の意味を表すことは難しい。そのため、これらのモダリティは疑問詞との親和性が低いと考えられる。例えば、従属節の中に疑問詞が入っていない(332)、(334)、(336)は自然であり、従属節の中に疑問詞が入っている(333)、(335)、(337)は非文である。

(332)ずいぶん勇気があるなと思われている人も、じつは震えている自分を奮起させて発言しているということを、人は知らないのではないかと思います。（きみは変われる！）

(333)＊なぜ人は知らないのではないかと思います。

(334)もしかすると、このまま逢えなくなるのではないかと思った。（うたかた）

(335)＊どこで逢えるのではないかと思った。

(336)それにしてもガラガラですね、なんだか薄気味悪くて、早く来てくれないかと思っていたところです。（佐渡伝説殺人事件）

(337)＊いつ来てくれないかと思っていたところです。

無論、「～（よ）うか」と「～だろうか」は、疑問詞が入っている文に後続できるが、「～かと思う」という形式の中で(338)と(339)のように使用され、従属節が疑問詞疑問になる場合は、相対的に少数に限られる。カト構文は、(340)のように、従属節述語の中にモダリティがあっても、従属節が肯否疑問の形式になるのが典型である。

(338)実家でネコを飼い出した時はどうしようかと思った・・・(Yahoo!ブログ)
(339)彼の口からどんな答えが返ってくるだろうかと思った。(オイルロード)
(340)「今日から夏休みだろうか」と思った。

また、「～かと思う」という文の従属節述語の中にモダリティが入る割合が小さい、もしくは入らない場合は、単純疑問引用以外の、新たな気づき、非現実性認識（誤解内容、比喩比況)、断定和らげの用法があり、このような場合も文の意味上、従属節の中に疑問詞が入ることは難しいと考えられる。つまり、従属節の疑問の種類は肯否疑問の形式になる。例えば、(341)と(343)は、従属節の中に疑問詞を入れた場合、(342)と(344)のように別の意味の文か非文になる。一方、(345)と(347)は、従属節の中に疑問詞を入れた場合、非文にはならないが、元の用法ではなく、(346)と(348)のように、単純疑問引用の別の意味を持つ文になってしまう。

(341)(海で水泳禁止の立て看板をみて)「ここで泳いだらいけないのか」と思った。(新たな気づき)
(342)(海で水泳禁止の立て看板をみて)「どこで泳いだらいけないのか」と思った。
(343)明日から新しい気持ちで頑張ればいいかと思います。(断定和らげ)
(344)＊いつから新しい気持ちで頑張ればいいかと思います。
(345)不燃ごみはもう出したのかと思った。(誤解内容)
(346)いつ不燃ごみを出したのかと思った。(誤解内容の意味にはならず、単純疑問引用)
(347)テレビからドラえもんが出てきたのかと思った。(比喩比況)
(348)どこからドラえもんが出てきたのかと思った。(比喩比況にはならず、単純疑問引用)

(345)は「出していなかった不燃ごみを出していたと誤解していた」という意味を表す誤解内容の用法であるが、(346)のように「いつ」という疑問詞を入れると、「いつ不燃ごみを出したのか」と単純にそのような疑問を思ったという意味を表す単純疑問引用の用法になる。(347)は「テレビからドラえもんが出てくることはない」と知っている上で、そのような表現を使っているため、比喩比況の用法であるが、(348)のように「どこから」という疑問詞を入れると、「どこからドラえもんが出てきたのか」と単純にそのような疑問を思ったという意味を表す単純疑問引用の用法になる。

このような理由により、カト構文は、従属節の疑問のタイプとして、疑問詞疑問文の形式で

はなく、肯否疑問文の形式をとる割合が一段と大きくなるのだと思われる。

これはまた、カト構文の中で「思う」を主節述語とする文の場合、従属節に「か」がついており、肯否疑問の形式が整っていても、従属節の内容は純然たる「疑問」を表わしているわけではないことが関係している。すなわち、(341)のように、話し手が新たに気づいたことを「発見・納得」の意味を持つ従属節で表している文、もしくは、(343)のように、話し手が断定していることを「和らげ」の意味を持つ従属節で表している文は、肯否疑問の形式になっているだけで、実は疑問を表していないと考えられる。つまり、(341)は「今日でこの会社も最後なんだ」と気づいたという意味を表す文で、(343)は「明日から新しい気持ちで頑張ればいい」と断定していることを表す文である。このタイプの文が存在するために、従属節の疑問のタイプが肯否疑問文の形式になる割合は高くなる。

カト構文の中で、主節述語が「思う」以外の用例も以下の(349)から(358)の 10 例を提示しておく。この中で、従属節が疑問詞疑問になるのは、特に(353)～(358)のように、主節述語が「言う」、「尋ねる」、「聞く」などの発話動詞の場合が多かった。

(349)こんなに美人だったのかとびっくりしたくらいだった。(翼はいつまでも)

(350)ああ、こんなにいい法律ができるのですかと喜んでいるというようなことなんだけれども。(国会会議録)

(351)いい角度からの撮影を装い、結構やるじゃないかと笑いそうになる。(眠る体温)

(352)綾野が修道院の奥から出てきて、消えていくところが、女って、こんなに美しいものなのかと感じたんですね。(おせいさんのほろ酔い対談)

(353)金製品を売る店で、アラブ人の四人の妾が、一斉に手をあげ、船の出航は何時かと訊いた。(海辺の扉)

(354)ぎんさんがテレビに出ておられて、アナウンサーが出演料を何に使うんですかと言ったんです。(どうなる日本の社会保障)

(355)ここは一体どこなのかと尋ねたくなる。(行きそで行かないとこへ行こう)

(356)『ドキュメント・ジャパン』で連載第一回が始まったとき、電話をかけてきて、あちらの話はいつごろ決まったものなのかと訊いてきた。(模倣犯)

(357)ちょっと歌の上手いヤツがいるのでオレンジレンジの花はどうかと話したのですがいかがなものでしょうか？ (Yahoo!知恵袋)

(358)物価、為替について議論が行われていないんですが、なぜですかと伺っているんです。(国会会議録)

上記の議論では、カト構文の場合、従属節の疑問のタイプは、疑問詞疑問文の形式よりも肯否疑問文の形式になるのが典型であることが明らかになった。一方、間接疑問構文の場合、従属節の疑問のタイプは、肯否疑問文よりは疑問詞疑問文になるのが典型であると言える。

カト構文の従属節が、疑問詞疑問文の形式より肯否疑問文の形式になるのは、従属節述語の中に用いられることが多いモダリティが、疑問詞との親和性が低いためだと思われる。また、従属節述語の中にモダリティがない場合でも、従属節の中に疑問詞を入れると、文の意味上、非文になることが多いためだと思われる。

このような特徴からは、カト構文が本質的にどのような構文であるのかが分かる。つまり、カト構文は、従属節が疑問文の形式になっていても、実は、従属節は疑問文ではなく、新たに気づいたこと、誤解していたこと、比喩比況、断定していることなどを婉曲的な言い方で表している構文であるということである。

2.3 主節述語動詞

間接疑問構文の場合、志波（2016: 194）は、「主 – 述で構成される従属節に助詞カが後接し、このカ節を直接に受ける主節述語が心理動詞である構文を典型的な間接疑問構文と見なす」と定義している。例えば、(359)～(361)は、従属句と述部が意味的呼応関係を成している文で、第２章で間接疑問構文と定義した文である。これらの文の主節述語の動詞は、「分かる」、「知る」、「考える」で、奥田（1968-72）の分類では心理動詞に属するものである。本研究もこの定義に従う。

(359)なぜパソコンが壊れたのか分からない。
(360)北海道で有名な観光地はどこなのか知らない。
(361)どうしてこんなことになったのかを考えた。

一方、引用構文であるカト構文の主節述語動詞のタイプはどうだろうか。小説の地の文と名

大会話コーパスから収集した例から、検討してみる。主節述語動詞のタイプを論じる際、心理動詞と動作動詞の分類基準については、奥田（1968-72）を参照する。主となる心理動詞を思考動詞、発話動詞、態度動詞、知覚動詞の４つに、動作動詞の場合は動作動詞に分類し、残りの形容（動）詞と動詞が省略された場合は、その他に分類した。各項目別に、具体例を以下のように提示する。

（ア）思考動詞：どうしたらこの問題が上手く治まるんだろうかと｛思った／考えた｝。
（イ）発話動詞：知人が今年は就職できそうなのかと言った。
（ウ）態度動詞：本当にお金を返してくれるのかと疑った。
（エ）知覚動詞：兄はどこまで見えるのかと、視力検査表をずっと見ていた。
（オ）動作動詞：友達でも来たのかと出てみると、誰もいなかった。
（カ）その他 － 形容（動）詞：俺はまったく相手の気持ちも知らず、ただ自慢に思っていたのではないかと、新池は恥ずかしかった。
省略：月とか火星で人が住めるような環境を作ったらどうかとね。勝手に想像してみた。

小説の地の文と名大会話コーパスから収集した「カト構文」の 800 例に対し、主節述語動詞のタイプを上記の動詞の分類基準で、分類を行った。その結果を【表 13】に示す。

【表13】「カト構文」の文体別主節述語動詞の種類と割合

文体／動詞の種類	小説の地の文	割合（%）	名大会話コーパス	割合（%）
思考動詞	255	55.7	239	69.9
発話動詞	102	22.3	74	21.6
態度動詞	72	15.7	0	0
知覚動詞	15	3.3	0	0
動作動詞	8	1.7	0	0
形容詞 or 形容動詞	5	1.1	0	0
省略	1	0.2	29	8.5
総計（800）	458	100.0	342	100.0

その結果、主節述語動詞の多くは動作動詞や形容（動）詞ではなく、思考動詞、発話動詞、

態度動詞などの心理動詞であることが判明した。つまり、引用構文であるカト構文においても、その主節述語動詞の主なタイプは心理動詞であり、間接疑問構文と類似していることが分かる。

しかし、主節述語が特定の動詞に限り、カト構文と間接疑問構文の間に差が観察できる。まず、引用構文は「思う」が主節述語になるが、間接疑問構文は「思う」が主節述語になることができないということは、江口（1996：343）で指摘されている。例えば、引用構文である(362)のカト構文は、「何が気になっているのかと思った」から「と」を省いた場合、(363)の「何が気になっているのか思った」という非文になる。このことは何を意味するのだろうか。間接疑問構文は基本的に疑問の意味を間接的に表している文である。しかし、(363)の従属節は答えを求めている疑問文であるが、「思った」が主節述語になることによって、従属節の疑問の答えを、だだ「思った」という意味になってしまい、文全体は疑問の意味を表せなくなる。つまり、従属節の文の形式は間接疑問文であるのに対し、文全体は疑問の意味を表せなくなり、非文となる。

(362)何が気になっているのかと思った。（カト構文）
(363)＊何が気になっているのか思った。

一方、両構文とも、(364)と(365)のように、「言う」が主節述語になることができるが、「言う」が主節述語の場合、文の他の部分が同じであっても、両構文での文全体の意味はまったく異なることになる。例えば、(364)の「何が一番食べたいのかと言った」から「と」を省いた場合、(365)の「何が一番食べたいのか言った」という文になるが、その意味は全く異なる文になる。つまり、(364)は省略されている話し手が、「何が一番食べたいのか」と「言った」という意味であるが、(365)は「何が一番食べたいのか」という文の答え、例えば「お寿司」や「焼肉」などのことを「言った」という意味である。

(364)何が一番食べたいのかと言った。（引用構文であるカト構文）
(365)何が一番食べたいのか言った。（間接疑問構文）

(362)～(365)はすべてカ節の疑問の種類が疑問詞疑問文の用例であるが、カ節の疑問の種類が肯否疑問文の場合もある。(366)は「と」を省略すると、従属節が疑問詞疑問文の場合と同様に、(367)の「雄介は今週からもう梅雨入りしたのか思った」のような非文になる。また、(368)

は「と」を省略すると、従属節が疑問詞疑問文の場合とは異なって、(369)の「真紀さんは来週も会議があるのか言った」のような非文になる。

(366)雄介は今週からもう梅雨入りしたのかと思った。
(367)＊雄介は今週からもう梅雨入りしたのか思った。
(368)真紀さんは来週も会議があるのかと言った。
(369)＊真紀さんは来週も会議があるのか言った。

以上で考察したように、カ節の疑問の種類が疑問詞疑問に限り、「言う」が主節述語として使われた文が間接疑問構文になれる[37]が、その間接疑問構文の意味は「と」がある引用構文とは異なるということが分かった。

次は、主節述語を中心とした観点からではなく、カト構文を中心に考察を行う。カト構文は引用構文であるため、上記で確認したように、「思う」も「言う」も主節述語になれる。カト構文において、主節述語が、思考活動を表す動詞の中でも「思う」の時、カ節の部分は「思う」の具体的な内容を表すことになる。例えば、(370)で「Ｕターンする場所を探しているのか」の部分は、「思った」の内容に当たり、カ節は、どのように思ったのかを具体的に表すことになる。

(370)Ｕターンする場所を探しているのかと思ったが、そのままＪＲの踏切を越えた。（時には懺悔を）

カト構文において、主節述語が、言語活動（発話）を表す動詞の中でも「言う」の時、この時も、上記の「思う」と同様に、カ節の部分は「言う」の具体的な内容を表すことになる。例えば、(371)で「その人物の忘れ物ではないか」の部分は、「言った」の内容に当たり、従属節は、何を言ったのかを具体的に表すことになる。

(371)やや首を傾げてその人物の忘れ物ではないかと言った。（白い館の惨劇）

すなわち、(370)と(371)の、カ節と主節の間の関係は、間接疑問構文の未決タイプや既決タ

[37] 文の意味が元の文とは異なるようになるが、「言う」を否定形の「言わない」にし、「真紀さんは来週の会議に来るのか言わなかった」などとすれば、可能である。

イプ、もしくは、対処タイプの「疑問のカ節」＋「その答えを知るための対処の意味としての述語」という関係ではない。「何を言ったのか、思ったのかの具体的な内容を表すカ節」＋「と」＋「引用の述語」という具体―抽象の二重表現的構造（藤田 1999）と解釈される。例えば、(370)の場合、カ節の「Ｕターンする場所を探しているのか」という質問に対し、主節述語の「思った」は、「分からない（未決）」や「分かる（既決）」のように意味的呼応関係を成すことができない。また、カ節の「Ｕターンする場所を探しているのか」という質問に対し、その答えを分かるために「思った」という解釈（対処）もできない。一方、カ節の「Ｕターンする場所を探しているのか」は、主節述語の「思った」の具体的な内容に該当するため、具体―抽象の二重表現的構造と解釈できる。(371)の主節述語が「言った」の場合も同様である。つまり、カト構文において、主節述語が「思う」でも「言う」でも、カ節の部分は、主節述語動詞の具体的な内容を表すことを明らかにした。

2.3 では次のようなことが明らかになった。まず、引用構文であるカト構文は「言う」、「思う」の両方が主節述語になることができるが、間接疑問構文は「思う」が主節述語になることはできず、「言う」が主節述語になることしかできない。引用構文は、序論で確認したように、藤田（1999）によると、カ節と主節の間の関係が具体―抽象の二重表現的構造と解釈できる第Ⅰ類と、同一場面に共存する動作・状態を表す並示的構造の第Ⅱ類がある。引用構文であるカト構文は、「言う」と「思う」が主節述語になると、「どのように言ったのか、思ったのかの具体的な内容を表すカ節」―「引用の述語」になり、二重表現的構造が成り立つ。一方、間接疑問構文は、「言う」が主節述語になると、カ節と主節の間の関係は、「カ節の疑問に対する答え」を「言う」という関係になり、引用構文とはまったく別の意味の文になる。

両構文の主節述語になれる動詞においても、こうした差が現れるのは、両構文の本質的意味が異なるためだと思われる。つまり、引用構文であるカト構文は、どのように言ったのか、思ったのかが、カ節の中に具体的に言及されるような文であり、カ節は形式的に疑問文になっているが、疑問文ではない場合が多い文である。一方、間接疑問構文は、カ節が疑問文であり、疑問の意味を間接的に表している文である。

2.4 モダリティ

カト構文は、「思う」が主節述語になる文が一番典型であると考えられる。第３章の５節で確認したように、独白の疑問を直接引用しているものに該当する、単純疑問引用、新たな気づき、推量、願望、意志の「～かと思う」文は、従属節の中にモダリティが含まれる場合が多い。この時、モダリティによって、従属節だけで独立した１つの文として成り立つことができる。一方、間接疑問構文の従属節の中にはモダリティが含まれないということは、従来から指摘されている。つまり、「思う」が主節述語として使われた次の(372)～(379)の用例は、従属節の中にモダリティが含まれない間接疑問構文からは、遠いところに位置する引用構文であると言える。

(372)即ち、こう言った事が最初の閃き、発想だったのではなかろうかと思われる。(明智光秀冤罪論)

(373)自分の考えていることが、舟に刻んで剣を求めることではないかと思ったのである。(陸奥甲冑記)

(374)道節はふと、自分の他にも同じような玉を持っている人間がいるのではないかと思った。(新・里見八犬伝)

(375)いまはどうしようかと思っている。(ルアン)

(376)これは結構難しい問題というか、日本のテレビ局が伝統的におろそかにしてきた部分ではないかと思う。(ビデオジャーナリズム入門)

(377)およそ親が過ぎた可愛がりをやってしまい、危険を察知するという能力を欠落させてしまったのではないかと思わないでもない。(孫子に学ぶプロジェクト管理)

(378)その意味でも、過激な部署を新たに政策秘書室の中につくろうかと思ってね。(ニッポン解散)

(379)いっそのこと、毎日礼乃に渡される調査経費を使い込んで、旨いものでも食べようかと思ったが。(帝都探偵物語)

カト構文の従属節がモダリティを持たない時でも、主節述語が「言う」、もしくは、「思う」という条件が満たされれば、このタイプの文は、「カ節―主節述語」が「具体―抽象」の二重表

現的構造[38]を持つ典型的な引用構文であり、間接疑問構文からは離れているところに位置する引用構文であると考えられる。以下の(380)～(384)はすべてこのようなタイプに当てはまる。

(380)私はともかく、育ち盛りの娘二人に腐ったものを食わされるかと思うと、たまらない気分になる。(ワルツ)

(381)ホラッ、こんなこともあるかと思って、こんなものも持ってきたんだ。(やさしくなりたい)

(382)正確に言うと、行きつ戻りつ、という感じで、前向きに考えるようになったかと思うと、翌週はまた「私なんてダメ」「どうせ主婦だから」と言い出す。(主婦再生)

(383)高齢化社会に合わせた定年延長の動きを歓迎する人々などは、いったい何を見ているのかと言いたくなります。(正しい会社の辞め方教えます)

(384)なぜこれが重要かと言いますと、一人で得た悦びを分かち合える人こそ、心の友になれる人だからです。(女性の「オトコ運」は父親で決まる)

2.4 では次のようなことを確認した。「思う」が主節述語として使われた典型的な引用構文は、カ節だけを取り出して考えた場合、カ節がモダリティを持つ割合が大きく、そのような時、カ節は独立した直接疑問文に近いと考えられる。従属節の中にモダリティが含まれている引用構文は、従属節の中にモダリティが含まれない間接疑問構文からは、遠いところに位置する。また、カト構文のカ節がモダリティを持たない時でも、主節述語が「言う」、もしくは、「思う」という条件が満たされれば、このタイプの文は、「カ節―主節述語」が「具体―抽象」の二重表現的構造を持つ典型的な引用構文であり、間接疑問構文とは離れているところに位置する引用構文と考えられる。

[38] 「来年は必ず海外旅行に行くと思った。」という文で、主節述語の「思った」は「と」の前までの具体的な内容をどうしたのかを抽象的に表す思考動詞で、引用節の「来年は必ず海外旅行に行く」という部分は、何を思ったのかその具体的な内容を提示している。つまり、この文の引用節と述語は具体（何を思ったのかその具体的な内容）－抽象（その具体的な内容をどうしたのかを抽象的に表す動詞）の二重表現的構造を持っている。

3　両構文の本質的意味の差

前節では、引用構文であるカト構文と間接疑問構文が、構文の形式面においてどのように異なっているのかについて考察した。両構文の間でこのような形式的な相違点が観察できるのは、両構文の本質的意味が異なっているためだと考えられる。引用構文であるカト構文と間接疑問構文は、特に、文の意味的な焦点において、互いの相違点が明確に観察できる。志波（2016：208-209）が間接疑問構文の周辺のタイプであると指摘した照応構文を通して、カト構文と間接疑問構文が、それぞれ文のどこに意味的な焦点を当てているのか、その違いを確認する。照応構文とは、志波（2016：208-209）によると、「カ節の命題が話し手もしくは他の誰かの疑問を表し（単純不定）、これをいったん「それ」などの照応形が受け、さらにそれを心理述語が受けるという形式を持つ」構文である。典型的な照応構文としては、次の(385)のような文が挙げられる。

(385)もうそんな嘘つくのはやめてくれ！何を盗んだのか、それをさっさと言いなさい。

間接疑問構文の周辺構文である照応構文として、(385)の「それ」が指しているのは「何を盗んだのか」の答えである。この文は、カ節の後ろに「ト」を付け、引用構文にすると、文として成立せず、非文になってしまう。例えば、(386)は「何を盗んだのか」という文、そのものを話すことを望んでいる文と考えられる。しかし、この文に「それを」を入れ、(387)のように変えると、非文になる。

(386)何を盗んだのかとさっさと言いなさい。
(387)＊何を盗んだのかとそれをさっさと言いなさい。

「それを」がない(386)では、「何を盗んだのか」という文、そのものを話すことを望んでいる意味であるのに対し、「それを」入れた後の文である(387)では、「それ」が指しているのは「何を盗んだのか」の答えであり、話すように求められている２つのことがお互い食い違うようになるため、(387)は非文になると考えられる。

このように、間接疑問構文の周辺構文である、この照応構文を通して明確に分かることは、間接疑問構文の場合は、カ節の疑問に対する答えに意味的な焦点を当てているということである。一方、カト構文の場合は、カ節の疑問に対する答えではなく、カ節で述べられている内容

自体、つまり、カ節の具体的な内容全体に意味的な焦点を当てていると把握できる。以下では、このような意味的な焦点の違いを、間接疑問構文の典型的な主節述語の「分かる」が使われている文と、引用構文の典型的な主節述語の「思う」が使われている文で比較しながら考察する。ただし、間接疑問構文は、カ節の７割を占める疑問詞疑問文を用い、カト構文は、カ節の７割を占める肯否疑問文（Yes-No 疑問文）を用いて比較する。より典型的な構文を使って、両構文の差を明らかにしたいと思う。

(388)は、カ節の「そうしたサインを、誰に送っていいか」という疑問詞疑問文に対し、この疑問の答えが「分からない」という意味を持つ、典型的な間接疑問構文である。つまり、(388)は意味的に「誰に送るか」の答えに焦点が当たる。これに対し、(389)は、典型的な引用構文であり、「自分ができる以上に書くんじゃないか」という、カ節の疑問に対して、「思う」という主節述語はこの疑問の答えではない。(389)は、話し手が思った内容をそのまま発している文であり、肯否疑問文の形式で述べられている内容自体、つまり、「自分ができる以上に書くんじゃないか」という、カ節の具体的な内容そのものに焦点が当たる。

(388)そうしたサインを、誰に送っていいか分からない患者さんも当然います。(安楽病棟)

(389)だから自分が、もしかすると自分ができる以上に書くんじゃないかと思う。(名大会話コーパス)

3 節では、間接疑問構文の場合、カ節の疑問に対する答えに意味的な焦点を当てているが、カト構文の場合は、カ節の疑問に対する答えではなく、カ節で述べられている内容自体、つまり、カ節の具体的な内容全体に意味的な焦点を当てているということを確認した。こうした両構文の本質的意味の差があるからこそ、２節で述べた、次のような形式的な相違点が観察できると考えられる。

(ア)カト構文は、従属節が疑問の意味を持っていない場合が多く、形式のみが疑問文になっていることが多い。しかし、間接疑問構文の従属節は、意味的にも形式的にも疑問文である。

・この例文は正しいかと思います。(カト構文)

・この例文は正しいか分からない。(間接疑問構文)

(イ)カト構文の従属節は、疑問詞疑問文の形式より肯否疑問文の形式になっていることが多い

が、間接疑問構文は、肯否疑問文より疑問詞疑問文になっていることが多い。

・明日は雨が降るかと思います。(カト構文)

・明日は雨が降るかどうか分からない。(間接疑問構文)

(ウ)両構文の主節述語動詞の主なタイプは心理動詞である。しかし、両構文の主節述語が「言う」の場合、カト構文はカ節の部分が「言う」の具体的な内容を表す。一方、間接疑問構文はカ節の疑問文の答えを「言った」という意味である。

・和食の中で何が一番食べたいのかと言った。(カト構文)

・和食の中で何が一番食べたいのか言った。(間接疑問構文)

(エ)カト構文は、従属節内にモダリティを含むことが可能であるが、間接疑問構文はモダリティを含むことができない。

・明日でも間に合うんじゃないかと言った。(カト構文)

・＊明日でも間に合うんじゃないか分からない。

4　両構文が隣接する場合

カトによる引用構文の典型「[肯否疑問]形式節（モダリティ）カト 思う」は間接疑問構文からは最も離れたところに位置する構文だが、ある場合に隣接することがある。つまり、カト構文の主節述語が藤田（1983、1997）の対処タイプである「考える」と「聞く」などの場合、「と」を省略しても、文全体の意味は大きく変わらず、間接疑問構にできる。「～スルカ-ノ AbsN（抽象名詞)」の構造を持っている間接疑問構文の中では、「の」を「という」に変えても、文全体の意味は大きく変わらないタイプがあり、「～スルカトイウ AbsN（抽象名詞)」の構造を持つカト構文にできる。このような２つの場合、両構文は隣接すると考えられる。

4.1「～カト＋対処タイプの主節述語」

本研究では、カト構文の中で、主節述語として「思う」が使われる「～かと思う」が、最も使用頻度が高かったため、第３章で「～かと思う」を中心に取り扱った。しかし、「思う」の代わりに他の認識動詞も使用可能である。「考える」と「聞く」等、藤田（1983、1997）の対処タ

イプに当たる認識動詞の場合は、カト構文は間接疑問構文にかなり近づくことになる。例えば、主節述語が「考える」である(390)と(391)は、それぞれカト構文と間接疑問構文である。(390)は、考えた内容が「どうしたら回復できるか」であることを示している。一方、(391)は、「どうしたら回復できるか」、その答えを考えていると解釈できる。両文はこのように意味が異なるが、文全体で考えると、同じ出来事を異なる表現で表しているだけで、かなり近い意味を持つ２つの文である。言い換えれば、主節述語が「考える」である(390)から、「と」を省略し、(391)のように変えても、文全体の意味は大きく変わらず、文として成り立つとも言える。

(390)それから電気をつけて、ぐるぐる部屋の中を歩き回って、どうしたら回復できるかと考えたんです。(学ぶとは何だろうか)

(391)それから電気をつけて、ぐるぐる部屋の中を歩き回って、どうしたら回復できるか考えたんです。

また、主節述語が「聞く」である、(392)と(393)の場合も、同じ出来事を異なる表現で表しているだけで、この２つの文はかなり近い意味を持っている。

(392)そして、それにしたがって毎月そのレポートを提出することができるかと聞いた。(後悔をした今が、幸運のはじまり)

(393)そして、それにしたがって毎月そのレポートを提出することができるか聞いた。

このように、カト構文と間接疑問構文は、「考える」と「聞く」等の対処タイプに当たる認識動詞が主節述語になると、互いに近づくことになる。

上記で確認したように、「と」が省略された後、間接疑問構文と考えられる文は、そのほとんどが藤田（1983、1997）の対処タイプに該当する。次の(394)と(395)は、もし「と」が省略できれば、藤田（1983、1997）の既決タイプに当たるが、そもそも「と」が省略できない[39]。

(394)どうしたら再び正常化できるかと言った。

[39] (394)の場合、「と」を省略すれば、元の文とは意味がかなり変わってしまう。(394)は「どうしたら再び正常化できるか」という質問を言ったという意味である。しかし、「と」を省略し「どうしたら再び正常化できるか言った。」になると、「どうしたら再び正常化できるか」という質問の答えとしての内容を言ったという意味になる。そのため、「と」は省略できない。

(395)こういう人が歌っていたのかと知った例も多いです。(「愛される声」に生まれ変われる本)

(396)のように、「と」が省略でき、藤田（1983、1997）の未決タイプに当たる例もあるが、「～カト＋未決タイプの主節述語」の例はほとんど見つからなかった。これらのことは、引用構文であるカト構文は、基本的に思ったことや、言われたことを伝える性格の文であるが、間接疑問構文は、基本的に疑問に思っていることや分からないことを表現する性格の文であるということを意味する。つまり、引用構文は既知のことを伝えるため既決が原初的なものであるのに対し、間接疑問構文は未知のことを表現するため未決が原初的なものであると考えられる。この点が、カト構文と典型的な間接疑問構文の大きな差である。

(396)近頃は「タダ」というものもあふれてきて、これは本当によいことなのかと疑問に思うことがある。(産経新聞)

以上で確認したように、カト構文は従属節が疑問文の形をしていても、平叙の意味になる文であるが、主節述語が疑問の答えを追及するような「対処」を表すもの(例えば、(390)や(392))になると、間接疑問構文に隣接するようになる。もしくは、主節述語が、疑問の答えが分からないという「未決」を表すものの中で、ごく一部（例えば、(396)）は、間接疑問構文に隣接するようになる。

4.2「～スルカ-ノ/トノ/トイウ AbsN（抽象名詞)」

第２章の 4.1 と 4.2 で触れたように、志波（2016）は内容構文を間接疑問構文の周辺的なタイプとして分類している。志波（2016）が内容構文に分類しているのは、以下のように従属節の中に「か」を持つ文である。

「A スルカ-ノ/トノ/トイウ AbsN (抽象名詞)」、もしくは、「AbsN (抽象名詞) -ハ A スルカ-ダ」

１つ目に、上記の中で「～スルカ-トイウ AbsN（抽象名詞)」という内容構文は、すでに「～かと」が文中にあり、カト構文として認められる。２つ目に、「～スルカ-トノ AbsN(抽象名詞)」

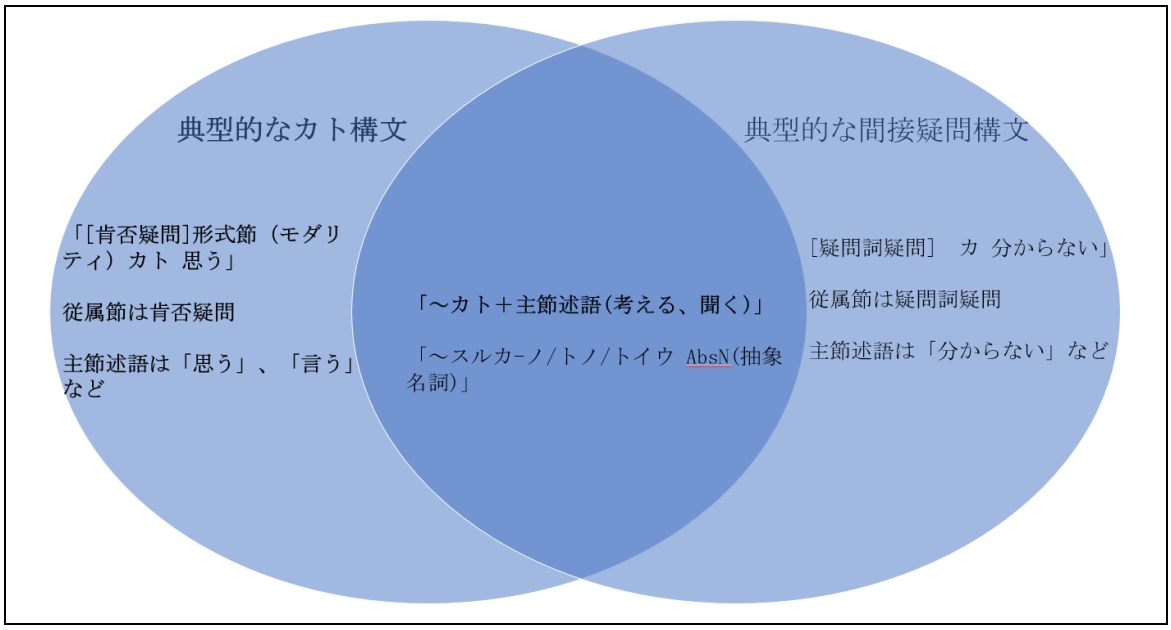
という内容構文は、引用のマーカーである「と」を従属節の中に含んでいるタイプであり、「と」の前までの部分を引用していると考えられるため、引用構文とも認められる。３つ目に、「と」を従属節内に含まない「A スルカ-ノ AbsN（抽象名詞）」という内容構文の中には、「の」を「という」に変えても、文全体の意味は大きく変わらないものがあり、「～スルカトイウ AbsN（抽象名詞）」の構造を持つカト構文にできるタイプがある。つまり、間接疑問構文の周辺的なタイプである内容構文の一部は、カト構文に言い替えやすくなる。例えば、(397)のような文は、「の」を「という」に変えられるタイプで、「の」を「という」に変えた(398)は引用構文であるカト構文と考えられる。無論、(398)のようなタイプは、従属節の主節述語が「言う」ではなく「いう」であり、典型的な引用構文に比べ、より文法化が進んでいるタイプである。

(397)将来のことを考えて引っ越しをするかどうかの悩みはあった。(心に残るとっておきの話)
(398)将来のことを考えて引っ越しをするかどうかという悩みはあった。

このように、間接疑問構文の周辺的なタイプである内容構文、つまり、「A スルカ-ノ/トノ/トイウ AbsN（抽象名詞）」という構造を持つ文は、カト構文に言い換えやすくなるため、カト構文に非常に隣接していると考えられる。

最後に典型的なカト構文と典型的な間接疑問構文の関係を【図 7】に示す。

【図7】典型的なカト構文と典型的な間接疑問構文の関係



【図 7】では、カト構文と間接疑問構文が積集合を持ち、横に並んでいるが、両文が統語論的に同じ位置にあるという意味ではない。カト構文の上位概念である引用構文と、間接疑問構文は別の領域にあると考えられる。阿部（2012）によれば、引用構文の従属節は代用系の「そう」によって置き換えることができるが、間接疑問構文の従属節は「それ」によって置き換えることができる。例えば、引用構文の(399)の従属節は、「そう」によって(400)のように置き換えることができるが、「それ」によって置き換えることはできない。一方、間接疑問構文の(401)の従属節は、「それ」によって(402)のように置き換えることができるが、「そう」によって置き換えることはできない。このようなことは、引用構文と間接疑問構文が統語論的に異なる領域に位置しているということを反映している。

(399)ユウは明日映画に行くつもりだと言った。（引用構文）（阿部（2012：129）の用例 1）
(400)ユウは｛そう／＊それ｝言った。（阿部（2012：129）の用例 3）
(401)パーティーに何人出席するかを教えてください。（間接疑問構文）（阿部（2012：129）の用例 29a）
(402)｛それ／＊そう｝を教えてください。（阿部（2012：129）の用例 29b）

5　まとめ

本章では、引用構文であるカト構文と間接疑問構文が、互いにどのような関係であるのか、その全体の体系を明らかにした。まず、カト構文と間接疑問構文が、構文の形式面においてどのように異なっているのかについて考察を行った。①両構文は、基本的な構造において、「カ」がある。しかし、カト構文における従属節は疑問の意味はなく、平叙の意味を持っていることが多い。それに比べて、間接疑問構文の従属節は形式的にも意味的にも疑問文である。②カト構文の場合、従属節の疑問のタイプは、疑問詞疑問文の形式よりも肯否疑問文の形式になるのが典型であることが明らかになった。一方、間接疑問構文の場合、従属節の疑問のタイプは、肯否疑問文よりは疑問詞疑問文になるのが典型であると言える。③引用構文は、「言う」と「思う」が主節述語になると、「どのように言ったのか、思ったのかの具体的な内容を表すカ節」―「引用の述語」になり、二重表現的構造が成り立つ。一方、間接疑問構文は、「言う」が主節述語になると、カ節と主節の間の関係は、「カ節の疑問に対する答え」を「言う」という関係になり、引用構文とはまったく別の意味の文になる。④「思う」が主節述語になるカト構文は、カ節がモダリティを

持つ割合が大きく、カ節は独立した直接疑問文に近い。つまり、「思う」が主節述語になるカト構文は、従属節の中にモダリティを含むことができない間接疑問構文とは、離れているところに位置する引用構文と言える。また、カト構文のカ節がモダリティを持たなくても、主節述語が「言う」、「思う」の時、このタイプの文は、「カ節―主節述語」が「具体―抽象」の二重表現的構造を持つ典型的な引用構文であり、間接疑問構文とは離れているところに位置する引用構文と考えられる。

両構文の間でこのような形式的な相違点が観察できるのは、両構文の本質的意味が異なっているためだと考えられる。つまり、カト構文の場合は、カ節の疑問に対する答えではなく、カ節で述べられている内容自体、つまり、カ節の具体的な内容全体に意味的な焦点を当てている。一方、間接疑問構文の場合は、カ節の疑問に対する答えに意味的な焦点を当てている。より根本的な文の性質について考えると、引用構文であるカト構文は、基本的に思ったことや、言われたことを伝える性格の文であるが、間接疑問構文は、基本的に疑問に思っていることや分からないことを表現する性格の文であるということを意味する。つまり、引用構文は既知のことを伝えるため、既決が原初的なものの、間接疑問構文は未知のことを表現するため、未決が原初的なものであり、本来の使い方であると言える。このような点が、カト構文と典型的な間接疑問構文の大きな差であると考えらえる。

しかし、両構文はお互いにまったく関係のない別の構文形式ではない。例えば、カト構文は、疑問の答えを追及する、「考える」と「聞く」等の対処タイプに当たる認識動詞が主節述語になると、間接疑問構文に隣接するようになることが確認できた。また、間接疑問構文の周辺的なタイプである内容構文、つまり、「Aスルカ-ノ/トノ/トイウ AbsN（抽象名詞）」という構造を持つ文は、カト構文に言い換えやすくなるため、カト構文に非常に隣接していると考えられる。

第６章　間接疑問構文の日韓対照研究

1　はじめに

本章では、日本語の間接疑問構文に該当する韓国語の表現形式は「-는지（-neunji)」であることを明らかにし、日韓の表現形式における共通点と相違点を明確にすることを目的とする。間接疑問構文に関する研究は、韓国語の場合はほとんど行われておらず、韓国語の文法において、間接疑問という概念さえ文法用語として定着していないように思われる。そのため、間接疑問構文の意味・構造的な特徴やその下位分類やタイプについての研究が進んでいる日本語に照らし合せ､韓国語との対照を行うことで､韓国語の間接疑問構文についての議論を可能とし、さらに、両言語の共通点と相違点を明らかにすることで、言語理解の発展に寄与することを目標とする。

2　先行研究と問題提起

これまでの研究では､韓国語における間接疑問構文は､間接話法[40]と混同されている場合が多い。間接話法とは、他者が言及した内容をそのまま聞き手に伝えるのではなく、話し手が引用する部分の文末の表現を変え、聞き手に間接的に伝達する用法であり、日本語の引用構文の中の１つに相当する。例えば、ミンジュンさんがジヒョンさんに(403)のように話したとしよう。それを聞いたジヒョンさんがその場から離れ、他の人に自分が聞いた内容を伝える時、(404)のように伝えると、実際に発言された表現形式と引用した表現形式が一致するため、直接的に伝達する直接話法になる。一方、(405)のように伝えると、実際に発言された表現形式と引用した表現形式は文末が異なるため、間接的に伝達する間接話法になる。

---

[40] 韓国語のこの間接話法という用語は、間接引用ともいう。日本語にも間接引用という用語はあるが、韓国語の間接引用は、引用される文の語尾と主節述語が、文のモダリティによって、決まっているいくつかの形に変化するなど、日本語のそれに比べ、複雑である。間接引用の縮約形もいくつかの決まっている形式があり、日本語の間接引用と比べ、より文法化が進んでいるため、類似している部分は多くないと思われる。

(403)오늘은　　몇　　시에 학원에　　갈　거예요？

Oneur-eun　myeot　si-e　hagwon-e　gal　geo-ye-yo?

今日は　　何　　時に 塾に　　行くんですか？

(404)민준　　씨가　　“오늘은　　몇　　시에 학원에　　갈　거예요？”라고 했어요.

minjun　ssi-ga　oneu-reun　myeot　si-e　hagwon-e　gal　geo-ye-yo?　rago　haess-eo-yo.

ミンジュンさんが　今日は　　何　　時に　塾に　　行くんですか？と　言いました。

(405)민준　　씨가　　오늘은　　몇　　시에　학원에　　갈거냐고　　했어요.

minjun　ssi-ga　oneu-reun　myeot　si-e　hagwon-e　gal-geo-nyago　haess-eo-yo.

ミンジュンさんが 今日は　　何　　時に　塾に　　行くのかと　言いました。

(405)の、日本語の「～かと」に類似している「-냐고（-nyago)」について、Park (2012) では、疑問文が引用節の内部に含まれている文という観点から、間接疑問構文の１つの形式として分類している。しかし、「-냐고（-nyago)」は疑問の意味を表す語尾である「-냐」に引用の格助詞の「-고」が結合されている形であり、これは疑問を表している文を引用している文、つまり、引用構文の一部として考えるのが妥当であり、間接疑問構文ではないと思われる。

韓国語の間接疑問についての代表的な研究は、Seo（1991）と Lee（1995）が挙げられる。これらの研究は、間接疑問節のことを内包文[41]と明示し、内包文の疑問の語尾として見なすことができる表現形式は何かについて考察を行っている。まず、Seo（1991）は「-는지（-neunji)」について、「-는가（-neunga)」との比較を通して、「-는지（-neunji)」は「冠形詞 型の語尾＋依存名詞」として把握し、「-는가（-neunga)」を内包文の疑問の語尾として認めた。その根拠としては、次のような点を提示している。

① 間接疑問の形式において「-는가（-neunga)」は、その内部の不定詞が母文（主節）全体に対する疑問詞として働くことを容認するが、「-는지（-neunji)」ではこのような現象は観察できない。

②繋辭(Gyesa)[42]と形容詞の叙述語の後ろには「-는가（-neunga)」が直接後続できるが、「-는지(-neunji)」の場合はできない。

[41] 韓国語の文法では、埋め込み文のことを「内包文」と呼ぶ。
[42] 韓国語の「나는 사람이다（私は人間だ)」の「이다（だ)」のことを指す。

③補助用言の「보（bo)」「싶（sip)」「하（ha)」などが主節述語の動詞で使われる時、「-는가(-neunga)」だけが内包文の疑問の語尾として使用することが可能である。
④認識動詞などが主節述語の動詞として使われる時、「-는가（-neunga)」が内包文の疑問の語尾として自然だが、「-는지（-neunji)」も使用可能である。しかし、「-는지（-neunji)」の場合は、格助詞が後続できない。
⑤発話動詞が主節述語として使われる時、「-는가（-neunga)」と「-는지（-neunji)」の両方が自然だが、引用の「고（go)」が「-는지（-neunji)」には使えない。

一方、Lee（1995）は、Seo（1991）が間接疑問構文の疑問の語尾は「-는지（-neunji)」ではなく、「-는가（-neunga)」である根拠として提示した上の説明を次のように反論している。１つ目に、①の説明のところで、Seo（1991）は(406)の場合、内包文の疑問詞である「어떻게(eotteohge)」が母文にまで影響を与えて文全体は「説明－疑問」として解釈できるが、(407)の場合は「어떻게（eotteohge)」が母文（主節）にまで影響を与えず、「判定－疑問」として解釈できるとしている。しかし、それは構文の構造によるものではなく、母文の述語（主節述語）である発話動詞、もしくは、補助用言「～아/어 보다（～てみる)」によるものであり、(407)についても同じことが言えるとしている。

(406)미나는 내가 어떻게 지내는가 물어보더냐?
Mina-neun nae-ga eotteoh-ge jinae-neun-ga mur-eo-bo-deo-nya?
みなは 僕が どう 過ごしているのか 聞いてみた？
(407)미나는 내가 어떻게 지내는지 물어보더냐?
Mina-neun nae-ga eotteoh-ge jinae-neun-ji mur-eo-bo-deo-nya?
みなは 僕が どう 過ごしているのか 聞いてみた？

２つ目に、②の説明のところで、Seo（1991）は(408)のように、「-는가（-neunga)」の場合、「학생이다（学生だ)」の後ろに「-ㄴ가（-nga)」の形で直接後続できるが、「-는지（-neunji)」はそのようにした場合、非文になるとみている。しかし、Lee（1995）は(409)で分かるように、「-는지（-neunji)」でも、主節述語を「보더라（bodeora)」から「묻더라（mutdeora)」に変えると、非文ではなくなることを挙げながら、これは繋辭(Gyesa)の叙述語の後ろに後続可能かどうかの問題ではなく、主節述語動詞の選択による制約の差に過ぎないと説明している。

(408)미나가 학생인가　보더라./＊미나가 학생인지　보더라.

Mina-ga haksaeng-i-nga bodeora/　＊mina-ga　haksaeng-i-nji bo-deo-ra

みなは 学生である みたい／　みなは 学生である みたい

(409)미나가 학생인가　묻더라./　미나가 학생인지　묻더라.

Mina-ga haksaeng-i-nga mut-deo-ra/　mina-ga　haksaeng-i-nji mut-deo-ra

みなが 学生なのか 聞いた。／みなが 学生なのか 聞いた。

３つ目に、③、④、⑤の Seo（1991）の説明は、補文（従属節）として疑問文をとることができる動詞についてのことである。補助用言の「보（bo)」「싶（sip)」「하（ha)」などが主節述語の動詞で使われる時、「-는가（-neunga)」は内包文の疑問の語尾として使われることが可能であるが、「-는지（-neunji)」は不可能であり、このような点を根拠とし「-는지（-neunji)」を内包文の疑問の語尾として認めていない。しかし、補助用言の「보 (bo)」「싶 (sip)」「하 (ha)」などが使われた動詞は、その補語として名詞をとることができず、「-는지（-neunji)」の場合名詞節に当たるため、補語になれないだけであると、Lee（1995）は説明している。また、他の動詞の「알다 (alda) =分かる・知る」、「모르다 (moreuda) =分からない・知らない」、「궁금하다（gunggeumhada）=気になる」、「기억하다（gieokhada）=覚えている」、「깨닫다（kkaedatda）=気づく・悟る」、「생각해보다（saenggakhae boda）=考えてみる」、「살펴보다（salpyeo boda）=調べる」などが母文の動詞（主節述語）として使われた場合は、「-는지（-neunji)」内包文の疑問の語尾として使われるため、Seo（1991）のように、一般化することは難しいとしている。

それでは、日本語の間接疑問構文に対応する韓国語の表現形式は何であろうか。本研究では、日本語の間接疑問構文に対応する韓国語の表現形式は「-는지（-neunji)」であると考える。まず、韓国語の多様な表現形式の中で、なぜ日本語の間接疑問構文に対応する韓国語の表現形式が「-는지（-neunji)」であるのか、その理由について考察を行う。

日本語の間接疑問構文は、疑問文の１つであるため、疑問の終助詞の「～か」を含んでいる。韓国語の疑問の終助詞[43]には、Yang（2021: 92）によると、以下のような多様なものがある。

疑問形語尾：-니[ni]、 -냐[nya]、 -어[eo]、 -지[ji]、 -으오[euo]、 -나[na]、
-습니까[seupnikka]、 -더냐[deonya]、 -습디까[seupdikka]、 -데[de]、

[43] 韓国語の文法では、疑問の終助詞のことを「疑問形語尾」と呼ぶ。

-을래[eullae]、 -느냐[neunya]、-는가[neunga]、 -나요[nayo]、
-을까요[eulkkayo]

日本語の疑問の終助詞「～か」を含む間接疑問節は、基本的に名詞節である。Yang（2021：92）は、上記の疑問形語尾の中で、名詞節の疑問形語尾として使われるのは、「-지[44]（-ji)」、「-(느) 냐 (-(neu) nya)」、「-는가 (-neunga)」、「-던가 (-deonga)」、「-을는지[45] (-eulneunji)」があるとしている。例えば、(410)～(414)は「-지（-ji)」、「-(느) 냐 (-(neu) nya)」、「-는가 (-neunga)」、「-던가（-deonga)」、「-을는지（-eulneunji)」がそれぞれ名詞節で使われている例である。

(410) 오늘　누가　올지가　　문제다.

oneul　nu-ga　ol-ji-ga　　munje-da.

今日　誰が　来るのかが　問題だ。

(411) 시험의 합격　여부는　3번 문제를　제대로 풀었느냐에　　달려 있다.

Siheom-ui hapgyeok yeobu-neun 3beon munje-reul jedaero　pur-eoss-neunya-e　　dallyeo iss-da.

試験の 合格の有無は、 3番の問題を きちんと 解いたかどうかに かかっている。

(412) 승패는　누가 많이　　먹었는가로　　결정된다.

Seungpae-neun nu-ga manh-i　　meo-geoss-neun-ga-ro gyeoljeong-doen-da.

勝敗は　誰が たくさん 食べたのかで　決まる。

(413) 그가 서울로　가던가　부산으로 가던가는　중요하지 않다.

Geu-ga seoul-lo　ga-deonga　busan-euro ga-deon-ga-neun jungyoha-ji anh-da.

彼が ソウルに 行くか、釜山に　行くかは 重要では ない。

(414) 만날　수 있을는지는　　모르겠다.

Man-nal su iss-eul-neun-ji-neun moreu-gess-da.

会えるかどうかは　　分からない。

---

[44] この「-지」は、本研究でいう「-는지（-neunji)，-은지（-eunji)，-을지（-eulji)，-인지（-inji)」のことを指している。

[45] この「-을는지（-eulneunji)」は、「-지」の未来の活用形の１つである「-을지（-eulji)」から派生したものである。

また、日本語の間接疑問構節は、「分からない」、「分かる」、「聞く」などの動詞が主節述語になることができる。しかし、名詞節の疑問形語尾として使われることが可能な、上記の(410)～(414)のうち、「-(느)냐(-(neu) nya)」、「-는가(-neunga)」、「-던가(-deonga)」、「-을는지(-eulneunji)」は、以下の(415)～(427)のように、主節述語となる動詞に制約がみられる。例えば、「-(느)냐(-(neu) nya)」、「-는가(-neunga)」は、「모른다(分からない)」、「안다(分かる)」が主節述語になると、文全体は(415)、(416)、(418)、(419)のように非文になる。「물었다(聞いた)」が主節述語になると、(417)と(420)のように、少し座りが良くなるが、「-(느)냐(-(neu)nya)」、「-는가(-neunga)」の後ろに、それぞれ引用マーカーの「고(go)」、「라고(rago)」がついたほうが、より自然になると思われる。

「-(느)냐(-(neu) nya)」

(415)*친구가 어디로 갔느냐　　모른다.

Chingu-ga eodi-ro gass-neunya moreun-da.

友達が どこに 行ったのか分からない。

(416)*친구가 어디로 갔느냐　　안다.

Chingu-ga eodi-ro gass-neunya an-da.

友達が どこに 行ったのか分かる。

(417)？친구가 어디로 갔느냐　　물었다.

Chingu-ga eodi-ro gass-neunya mur-eoss-da.

友達が どこに 行ったのか聞いた。

(417)は、「느냐」の後ろに引用マーカー「고」がついた方がより自然

「-는가(-neunga)」

(418)*숙제를 다 했는가　　모른다.

Sukje-reul da haess-neun-ga moreun-da.

宿題を 全部やったのか分からない。

(419)*숙제를 다 했는가　　안다.

Sukje-reul da haess-neun-ga an-da.

宿題を 全部やったのか分かる。

(420)？숙제를　다 했는가　　물었다.

Sukje-reul da　haess-neun-ga mur-eoss-da.

宿題を 全部やったのか 聞いた。

(420)は、「는가」の後ろに引用マーカー「라고」がついた方がより自然

「-던가（-deonga)」

(421)*혼자서 놀던가　　모른다.

Honja-seo　nol-deon-ga moreun-da.

一人で　遊んだのか分からない。

(422)*혼자서 놀던가　　안다.

Honja-seo nol-deon-ga　an-da.

一人で　遊んだのか分かる。

(423)*혼자서 놀던가　　물었다.

Honja-seo nol-deon-ga　mur-eoss-da.

一人で　遊んだのか聞いた。

「-을는지（-eulneunji）」

(424)나는　오늘은 운이 좋을는지　　모른다.

Na-neun oneur-eun un-i joh-eul-neun-ji moreun-da.

（私は）今日は　運が いいのか　知れない。(直訳)

（私は）今日は 運が いいのかも　知れない。(意訳)

(425)*나는　오늘은　운이 좋을는지　　안다.

Na-neun oneur-eun un-i joh-eul-neun-ji an-da.

（私は）今日は　運が いいのか　　分かる。

(426)나는　오늘은 운이 좋을는지　　알았다.

Na-neun oneur-eun un-i joh-eul-neun-ji ar-ass-da.

（私は）今日は　運が いいのか　分かった。(直訳)

（私は）今日は　運が いいのかと 考えた。(意訳)

(427)나는　오늘은 운이 좋을는지　　물었다.

Na-neun oneur-eun un-i joh-eul-neun-ji mur-eoss-da.

(私は) 今日は 運が いいのか　　聞いた。

このように、「-(느) 냐 (-(neu) nya)」、「-는가 (-neunga)」、「-던가 (-deonga)」、「-을는지 (-eulneunji)」は、典型的な間接疑問構文の主節述語である「分からない」、「分かる」、「聞く」などの動詞を主節述語として取るのに制約がみられる。ただし、「-을는지 (-eulneunji)」の場合、「-지」の未来の活用形の１つである「-을지 (-eulji)」から派生したものであるため、(424)～(427)で確認できるように、この中では一番制約が少ない。「-을는지 (-eulneunji)」以外の「-(느) 냐 (-(neu) nya)」、「-는가 (-neunga)」、「-던가 (-deonga)」という表現形式は、次のような特殊な間接疑問構文に用いられることは可能である。例えば、「-(느) 냐 (-(neu) nya)」は、(428)のように、志波 (2016: 206) で述べられた「A 節カハ B 節カニ／デ 依存動詞」という構造を持ち、「A 節の不定命題の値の決定が B 節で述べられる不定命題に依存することを表す」依存構文[46]に用いられる。「-는가 (-neunga)」は、(429)のように、間接感嘆構文に用いられる。最後に、「-던가 (-deonga)」は、過去のことを回想する場合に限り、(430)のように、普通の間接疑問構文にも用いられる。

(428)이 사업이 성공하느냐 마느냐는 너가 얼마나 노력했느냐에 달렸어.

I saeob-i seonggong-ha-neunya ma-neunya-neun neo-ga eolmana noryeok-haess-neunya-e dal-lyeoss-eo.

この　事業が　成功するかどうかは　君が　どれだけ　努力するのかに　よる。

(429)그는 자신이 얼마나 노력했는가를 돌이켜봤다.

Geu-neun jasin-i eolmana noryeok-haess-neunga-reul dorikyeo-bwass-da.

彼は自分が如何に努力したのかを振り返った。

(430)그 법안을 누가 제안했던가를 묻고 싶다.

Geu beoban-eul nu-ga jean-haess-deonga-reul mut-go sip-da.

その法案を誰が提案したのかを尋ねたい。

---

[46] 第２章の 4.1 で説明した「志波 (2016) の間接疑問構文の種類や全体の体系」のところを参照

一方、「-지 (-ji)」は下記の(431)～(433)のように主節述語として「分からない」、「分かる」、「聞く」のいずれも主節述語になることができる。つまり、主節述語として、「分からない」、「分かる」、「聞く」などの動詞を典型的に取る日本語の間接疑問構文の表現形式に近いのは、この「-지 (-ji)」という表現で、この「-지 (-ji)」と語彙素を同じくする形式に「-는지 (-neunji)、-은지 (-eunji)、-을지 (-eulji)、-인지 (-inji)」[47]があると思われる。

「-는지 (-neunji)」

(431)누가　사과를　먹었는지　　모른다.

Nu-ga　sagwa-reul　meog-eoss-neun-ji moreun-da.

だれがりんごを食べたのか　分からない。

(432)누가 사과를　먹었는지　　안다.

Nu-ga　sagwa-reul　meog-eoss-neun-ji an-da.

誰が りんごを食べたのか　　分かる。

(433)누가 사과를　먹었는지　　물었다.

Nu-ga sagwa-reul　meog-eoss-neun-ji mur-eoss-da.

誰が りんごを食べたのか　　聞いた。

先行研究では、韓国語の「-는지 (-neunji)」についての研究はあるものの、これらの表現形式が使われている文を間接疑問構文としてみている研究は数少ない。そのため、日本語の間接疑問構文との比較対照を行っている研究も見当たらない。例えば、Seo (2016) は、韓国語学習者のために「-는지 (-neunji)」について論じている。しかし、「-는지 (-neunji)」の文法的範疇について、韓国語の国語学で、依存名詞構成説[48]、名詞化語尾説[49]、終結語尾説[50]、連結語尾説[51]、間接疑問語尾説[52]などが激しく対立していることを指摘しながら、「-는지 (-neunji)」を名詞節と従属節を成す[53]ものとする立場を取っている。つまり、「-는지 (-neunji)」を間接疑問

---

[47] 「-는지 (-neunji)，-은지 (-eunji)，-을지 (-eulji)，-인지 (-inji)」のように、「지 (ji)」の前の部分が異なるのは、「지 (ji)」の前に来る動詞の時制に従い、活用形が異なるためである。便宜上、ここからは「-는지 (-neunji)」という１つの形式を使う。

[48] 「-는지 (-neunji)」を依存名詞として把握する説

[49] 「-는지 (-neunji)」は用言に語尾として付き、前の句や文を名詞化する機能を果たしているとみる説

[50] 「-는지 (-neunji)」を、文を切り上げ終結させる機能を果たしている終結語尾として把握する説

[51] 「-는지 (-neunji)」を、文を終止形で終えずに次の文と意味的に関連付ける連結語尾として考える説

[52] 「-는지 (-neunji)」を、間接疑問文を作る語尾として考える説

[53] 名詞節と従属節は同じレベルに並ぶものではないが、韓国語の「-는지 (-neunji)」は名詞節を成すこと

構文の表現形式としてみているわけではない。このような現状から、「-는지（-neunji)」を日本語の間接疑問構文と対照している研究は非常に少ない。

分析対象は、韓国語については、韓国語コーパスの国立国語院の말뭉치（マルムンチ）を使用した。文語マルムンチの 10 の小説から「-는지（-neunji)」の間接疑問構文を抽出し、得られた 500 例を分析した。日本語については、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT)』を使用した。単位検索のタブで以下の検索条件で抽出した例から、間接疑問構文を 500 例抽出し分析した。

書字形出現形＝か　＋　品詞の大分類＝助詞

検索対象：出版年 2000 年代

3　韓国語の間接疑問構文

ここでは、韓国語の「-는지（-neunji)」が名詞節として使われている文が日本語の間接疑問構文とどのような部分が共通しているのかを詳しく説明する。

韓国語の標準国語大辞典[54]では「-는지（-neunji)」について以下のように記述している。

-는지[neunji]、-은지[eunji]04

「語尾」

[1]

漠然とした疑問があるまま、それを後の節の事実や判断と関連させるために使う接続語尾

(434)아이들이　얼마나　떠드는지　　책을　　읽을　수가　　없었다.

Ai-deur-i　eolma-na　tteodeu-neun-ji　chaeg-eul　ilk-eul　su-ga　eops-eoss-da.

子供たちが　どれだけ　騒いでいるのか　本を　　読む　ことが　できなかった。

[2]

해라（～しな（さい））体[55]を使えるところや間接引用節に使われ、漠然とした疑問を示す終結

も、従属節を成すことも可能である。

[54]　翻訳;全　弘起

[55] 命令を表す文体という意味ではない。해라（～しな（さい））体は、現代韓国語の格式体の中で相手を最も下げる文体のことを指す。論文、説明文、新聞記事などの客観性と中立性を求める文に使われる。つまり、話し手の存在を排除したまま情報だけを伝えるという感じが強い文体である。

語尾である。後に補助詞の「요（ヨ）17」が来ることもある。

(435)고향에는　잘　　다녀오셨는지?

Gohyang-e-neun jal　　danyeo-osyeoss-neun-ji?

故郷には　無事に（問題なく）行ってきましたか。

(436)마을　사람들은　어느 말을　정말로　믿어야　옳은지

maeul　saram-deur-eun　eoneu　mar-eul　jeongmal-lo　mid-eoya　olh-eun-ji

몰라서　멀거니　두 사람의　입을　쳐다보고만　있었다.

Molla-seo　meolgeoni　du saram-ui　ib-eul　chyeodabo-goman iss-eoss-da.

村の　人々は　誰の話を　本当に　信じなければならないのか

分からず、ぼんやりと 二人の　口を　見つめているだけだった。

上の[1]のところからは、「-는지（-neunji）」は接続語尾として疑問を表していると理解できる。しかし、ここで例として挙げられている(434)は、典型的な間接疑問構文ではない。この文は、高宮（2003）では注釈句による構文と呼ばれており、志波（2016）では二文連置構文の背景注釈型と呼ばれている。二文連置構文については、第２章の４節の間接疑問構文のところで、確認したが、ここでもう一度述べておく。

志波（2016）によると、二文連置構文とは、連なっている２つの文で構成されており、従属カ節を直接に受ける述語や名詞句が後節に存在しない文で、背景注釈型、課題提示型、言い換え型の３つがある。背景注釈型とは、後節で表される様子や現われといった事実の背後にある事情（主に原因・理由）を推論し、それを前節に注釈句として添えた構文である。例えば、次の(437)のような文がこれに当たる。

(437)就活のストレスからか、胃の調子が悪い。（＝(105)再掲）

課題提示型とは、前節の従属カ節で課題としての疑問（単純不定）が提示され、それに対する一応の回答や処置が話し手の判断として後節に述べられる構文である。例えば、次の(438)のような文がこれに当たる。

(438)どのスイッチを押せばいいのかは、説明書に詳しく書いてある。（＝(106)再掲）

言い換え型とは、後節で述べられる事実（様子）について、話し手が自身の解釈から捉えなおして前節に不定命題として差し出す構造を持つ構文である。例えば、次の(439)のような文がこれに当たる。

(439)どれだけ苦労したか、部長が帰宅するまで、三日も寝ずに業務を続けた。（＝(107)再掲）

(434)の例は、この３つの二文連置構文の下位タイプの中で、(437)の背景注釈型に該当すると考えられる。

韓国語の標準国語大辞典の「-는지(-neunji)」に対する説明の[2]からは、「-는지(-neunji)」は「～か」と同じように、終結語尾として文の最後に使われ、直接疑問を表すことができることも分かる。一方、(436)を間接引用節としてみているが、引用の表現形式がないため、これはやはり間接疑問構文であると考えられる。先行研究のところで述べたように、間接疑問構文と引用節を混同している例だと判断できる。

藤田（1983）では、(440)のように疑問を表しているカ節「今日いつ授業が終わるか」と述部の「分からない」が意味的呼応関係を成している構文を間接疑問構文と定義した。韓国語では(441)のような文が藤田の定義に当てはまると考えられる。この文の「오늘 언제 수업이 끝날지(今日いつ授業が終わるか)」という部分は、疑問を表す「-는지（-neunji)」によって、述部の「몰라요（分からない)」と意味的呼応関係を成しているとみられる。この時、話し手は疑問に対する答えとしての情報がなく、(441)は藤田（1983）の間接疑問構文の３つのタイプの中で未決タイプに該当する。(442)の場合、話し手は疑問に対する答えとしての情報が既にあるため、既決タイプ、(443)の話し手は答えとしての情報がなく、それを追求するための処置として「생각했다（考えた)」という対処をしていると解釈できるため、対処タイプに該当する。これらの分類が正しいとすれば、日本語の「～か」のように従属節（カ節）と主節の述部を繋いでいる、韓国語の「-는지（-neunji)」が、日本語の「～か」のような意味を持っていると考えられる。そのため、次に、韓国語の「-는지（-neunji)」と日本語の「～か」が同様の振る舞いをするのかについて検討してみたい。

(440)今日いつ授業が終わるか分からない。

(441)오늘　언제　수업이　끝날지　　몰라요.

oneul　eonje　sueob-i　kkeut-nal-ji　molla-yo.

今日　いつ　授業が　終わるか　分からない。

(442) 그　사람이　어디에　있는지　알아요.

geu　saram-i　eodi-e　iss-neun-ji　ara-yo.

あの　人が　どこに　いるのか　分かります。

(443) 이　문제를　어떻게　풀지　생각했다.

i　munje-reul　eotteoh-ge　pul-ji　saenggak-haess-da.

この　問題を　どうやって　解くか　考えた。

Kim (2018: 15) は、「-는지 (-neunji)」を内包疑問節[56]の語尾として把握し、内包疑問節を形成する「-는지 (-neunji)」の文法的な地位について、現代韓国語での「-는지 (-neunji)」は、内包節を形成するのに活発に使用されている語尾の１つであると述べている。また、内包疑問節を形成する「-는지 (-neunji)」は、その意味的性質に基づいて、「-는지 (-neunji)」は、最初、文の中で疑問の意味を持つ従属節を作るのに使われ、その後、主文末の疑問としても使われ始めたと主張している。

以上、韓国語の「-는지 (-neunji)」が日本語の「～か」の一部の意味と役割[57]を果たしていることを確認し、日本語の間接疑問構文に類似している韓国語の表現形式は、疑問を表す「-는지 (-neunji)」によって、述部と意味的呼応関係を成している文であることを明らかにした。

4　日本語の間接疑問構文と韓国語の間接疑問構文

本節では、日本語の間接疑問構文の「～か＋主節述語」と韓国語の間接疑問構文の「-는지 (-neunji) ＋主節述語」の共通点と相違点について検討する。抽出した韓国語の間接疑問構文の500例を分析しながら、対照を行う。

[56]内包疑問節とは、韓国語の文法で、文の中で従属節として内包する疑問節のことを指す。

[57] 「か」の意味と役割（用法）の中で、「疑問の終助詞」として使われる用法と、間接疑問構文の従属節に付き、間接疑問節として使われる用法

4.1 間接疑問構文のタイプ

間接疑問構文のタイプについては、第２章で扱った志波（2016）に従って分類した。これは近代日本語のために使用された分類であるが、現代日本語や現代韓国語においてもその分類基準は有効であると判断し、使用した。コーパスから収集した用例を志波（2016）の分類に従い、次のように分類した。その結果は以下の【表 14】の通りである。

【表14】日本語と韓国語の間接疑問構文のタイプ（2000 年代）

<table>
<tr><th colspan="2">間接疑問構文のタイプ</th><th colspan="2">日本語</th><th colspan="2">韓国語</th></tr>
<tr><td colspan="2">典型的な間接疑問構文</td><td colspan="2">160</td><td colspan="2">295</td></tr>
<tr><td colspan="2">複雑述語の間接疑問構文</td><td colspan="2">16</td><td colspan="2">7</td></tr>
<tr><td colspan="2">照応構文</td><td colspan="2">5</td><td colspan="2">0</td></tr>
<tr><td colspan="2">潜伏疑問構文</td><td colspan="2">6</td><td colspan="2">0</td></tr>
<tr><td colspan="2">依存構文</td><td colspan="2">18</td><td colspan="2">2</td></tr>
<tr><td colspan="2">間接感嘆構文</td><td colspan="2">5</td><td colspan="2">55</td></tr>
<tr><td colspan="2">内容構文</td><td colspan="2">115</td><td colspan="2">3</td></tr>
<tr><td rowspan="3">二文連置構文</td><td>課題提示型</td><td rowspan="3">77</td><td>60</td><td rowspan="3">137</td><td>24</td></tr>
<tr><td>背景注釈型</td><td>14</td><td>110</td></tr>
<tr><td>言い換え型</td><td>3</td><td>4</td></tr>
<tr><td colspan="2">引用構文</td><td colspan="2">89</td><td colspan="2">0</td></tr>
<tr><td colspan="2">比況構文</td><td colspan="2">7</td><td colspan="2">0</td></tr>
<tr><td colspan="2">仮想構文</td><td colspan="2">2</td><td colspan="2">0</td></tr>
<tr><td colspan="2">総計</td><td colspan="2">500</td><td colspan="2">500</td></tr>
</table>

韓国語の間接疑問構文のタイプは、日本語に比べ、種類が限られており、(444)のような典型的な間接疑問構文、(445)のような二文連置構文(主に背景注釈型)、(446)と(447)のような間接感嘆構文に集中しているところが目立つ。とくに、背景注釈型の二文連置構文が多く、カ節が後ろに続く節の原因・理由を表している用法として使われることが多いのが特徴である。例えば、(445)の「-는지（-neunji)」までの疑問節は、後節の「편집국장과 현창영 편집부장도 이미 자리를 지키고 있었다（パク・ジミョン編集局長とヒョン・チャンヨン編集部長もすでに席を守っていた）.」の理由を表している。

(444)네가 어떻게 생각할지 몰라서 말 안 했어.（편집국 쪽으로）

Ne-ga eotteoh-ge saenggak-hal-ji molla-seo mal an haess-eo.

君がどう思うか分からなくて言わなかった。

(445) 회사에 도착하니 주말근무를 책임진 야간국장의 전화를

Hoesa-e dochak-ha-ni jumal-geunmu-reul chaegimjin yagan-gukjang-ui jeonhwa-reul

받았는지 박지면 편집국장과 현창영 편집부장도

Bad-ass-neun-ji bakjimyeon pyeonjip-gukjang-gwa hyeonchangyeong pyeonjip- bujang-do

이미 자리를 지키고 있었다. (편집국 쪽으로)

imi jari-reul jiki-go iss-eoss-da.

会社に到着したら、週末勤務を担当していた夜間局長の電話をもらったのか、

パク・ジミョン編集局長とヒョン・チャンヨン編集部長もすでに席を守っていた。

(446) 영이는 얼마나 멋진 저녁식사 시간이 될 지 잘 알고 있다. (영이)

Yeongi-neun eolma-na meosjin jeonyeok-siksa sigan-I doel ji jal al-go iss-da.

ヨンイはどれほど素敵な夕食の時間になるかをよく知っている。

(447) “이서연”이라고 소리치는 거야. 그때는 얼마나 놀랐는지…. (편집국 쪽으로)

“Iseoyeon”i-rago sorichi-neun geo-ya. Geu-ttae-neun eolma-na nollass-neun-ji….

「イ・ソヨン」と叫ぶのよ。その時はどれほど驚いたか…。

高宮（2004: 118）によると、日本語では注釈的二文連置[58]（二文連置構文）から段階を経て間接疑問文が成立したと考えられている。つまり、このような日本語の間接疑問構文の歴史的な発達の観点から考えた時、韓国語に二文連置構文の割合が大きいということは、韓国語のほうが日本語に比べ、間接疑問構文の発達が遅れている可能性を示唆していると思われる[59]。

この二文連置構文は、志波（2016）で、カ節を受ける主節述語がないため、当然カ節に助詞を後接させることはできないと言及している。また、間接疑問構文の下位タイプであっても、カ節に助詞を後接させることができない構文があるとし、それは江口（2013）で「複雑述語」と呼ばれる述語の一部で、「疑問が残る、不審が残る、見解を明らかにする、議論を進める」などの思考・判断・疑惑・言語活動などを表わす名詞と動詞との組み合わせによる述語であると述べている。この複雑述語の間接疑問構文は、韓国語では(448)のように「짐작이 가다（予想がつく）」という複雑述語が使われた文が見つかった。

[58] 高宮（2004: 118）は、二文連置構文のことを「注釈的二文連置」という用語を使い説明している。
[59] 韓国語の間接疑問構文の歴史的な発達推移については、今後の課題とする。

(448)도대체 무슨 일인지 짐작조차 가지 않았다. (정화함대의 꿈)

dodaeche museun ir-inji jimjak-jocha ga-ji anh-ass-da.

一体何が起こったのか予想すらつかなかった。

この複雑述語の間接疑問構文は、江口（2022 :42）では「補足語＋述語」の組み合わせが間接疑問節と共起している文として扱われていて、間接疑問節と「補足語＋述語」の間には、格助詞をつけることが難しいとされている。(448)の韓国語での複雑述語の間接疑問構文も、日本語と同様に、疑問節の「도대체 무슨 일인지（一体何が起こったのか)」と「補足語＋述語」の「짐작조차 가지 않았다（予想すらつかなかった)」の間には、「는（は)」のような副助詞をつけることは可能だが、「가（が)、을/를（を)、에（に)、과/와（と)、에서（で)、의（の)」などの格助詞をつけることは不可能である。

【表 14】で韓国語の間接疑問構文のタイプの用例数が少ないところは、先行研究のところで、除外すると述べた「-（느）냐（-（neu）nya)」、「-는가（-neunga)」、「-던가（-deonga)」、「-을는지（-eulneunji)」という、別の表現形式を用いて、該当する構文を表現するため、見つかった用例数が少ない可能性がある。これについては今後検討する余地がある。

【表 14】で１つも見つからなかった韓国語の間接疑問構文のタイプは、照応構文、潜伏疑問構文、引用構文、比況構文、仮想構文がある。このうち、日本語の照応構文の(100)を韓国語に訳した(449)、日本語の潜伏疑問構文の(101)を韓国語に訳した(450)は、両方とも「-는지（-neunji)」の未来の活用形である「-을지（-eulji)」が使われており、自然な文である。本研究では 500 例の韓国語の間接疑問構文を対象にしたが、分析対象の用例数を増やせば、「-는지（-neunji)」が使われている照応構文と潜伏疑問構文が見つかる可能性もあると思われる。

(449)환자를 어떻게 조치해야 할지 그건 아직 판단이 서지 않아.

Hwanja-reul eotteoh-ge jochi-haeya ha-l-ji geugeon ajik pandan-i seo-ji anh-a.

患者をどのように処置すべきか、それはまだ判断がつかない。

(450)몇 시에 찾아뵈면 좋을지 그쪽의 괜찮은 시간을 알려 주세요.

myeot si-e chajaboe-myeon joh-eul-ji geujjog-ui gwaenchan-eun sigan-eul al-lyeo ju-se-yo.

何時に伺ったらいいのか、あなたのいい時間（=御都合）を教えて欲しいんです。

また、【表 14】で１つも見つからなかった韓国語の間接疑問構文のタイプには、引用構文が

ある。引用構文については、韓国語では「～다고 했어요」、「～라고 했어요」、「～냐고 했어요」、「～자고 했어요」という、「-는지（-neunji）」とはまったく別の表現形式を使い、引用構文を表すため、その数が 0 になっていると考えられる。次に、比況構文と仮想構文については、日本語の比況構文の(109)と(110)を韓国語に訳した(451)と(452)は、両方とも「-는지(-neunji)」とは別の表現形式である「～처럼 보이다」が使われる。これは間接疑問構文とは異なる表現形式であり、そのため、比況構文と仮想構文は１つも見つからなかったと考えられる。言い換えれば、韓国語は、日本語とは異なり、比況構文を表す時、間接疑問構文ではない別の表現形式を使うということである。

(451)죽어버린 것처럼 보여서, 놀랐기 때문에 주변을 둘러봤다.

Jugeo-beorin geos-cheoreom boyeo-seo, nollass-gi ttaemune jubyeon-eul dulleo-bwass-da.

死んでしまったかのように思われ、驚いてあたりを見回した。

(452)그녀는 사회인으로서 잘 해나가고 있는 것처럼 보였다.

Geunyeo-neun sahoein-euroseo jal haenaga-go iss-neun geos-cheoreom bo-yeoss-da.

彼女は社会人としてうまくやっているかのように見えた。

さらに、【表 14】で項目を立てて分類を行ってはないが、江口（2022: 42～43）は、日本語の場合、「補足語＋述語」の組み合わせが間接疑問節と共起している文と異なったタイプとして、(453)のような「メトニミー的拡張による述語をとる文」を挙げている。

(453)[どうしてこんなことが起こったのか]、{腹が立った・あっけにとられた・目の前が真っ暗になった}。（江口（2020）の（14））

この文は間接疑問節を X とすると、「X がわからなくて Y になる・Y をする」のように解釈でき、この文の述語は間接疑問節で表される懸案の生起と隣接関係（特に因果関係）にある事象を表すもので、メトニミー的な関係にあるものとしている。このタイプの文は、韓国語では数少ない例しか見つからなかった。つまり、韓国語の場合、メトニミー的拡張による述語が間接疑問構文の主節述語として来るのは日本語に比べ、相対的に難しいと思われる[60]。例えば、韓国

[60] これはあくまで「-는지（-neunji）」の場合であり、他の表現形式ではどのようになっているのかは分からない。

語の(454)のような文は非文ではないが、不自然な文である。

(454)?［왜 이런 일이 일어났는지］{화가 났다・망연자실했다・눈앞이 캄캄해졌다}.
　　((453)の翻訳)

なぜ韓国語の(454)のような文が非文になるのかについては、次のことが理由として考えられる。平木（2015: 25）は日本語の場合、レストランのショーウインドウを前にし、子どもたちが「僕、ハンバーグ！　私も！」のように表現することが可能だが、韓国語は「난　햄버거 먹고 싶다! 나두!（僕、ハンバーグ食べたい！ 私も！)」のようにしか表現できないことを指摘している。これについて、「日本語では「ハンバーグ」と言うだけで、その場の状況から、「選ぶ・注文する・食べたい」などの意の動詞を省いても会話が成立する、場面への依存度が高い言語だが、韓国語の場合は「食べたい」という動詞表現を抜きにしては座りが悪く、不自然な語感を与える」と述べている。また、林八龍（2004: 231）は、「日本語の場合、事態簡潔で含蓄的な名詞表現でもって静的に捉えようとする傾向が強い反面、韓国語の場合は、事態を具体的且つ説明的に動詞でもって動的に捉えようとする傾向が目立つ」と論じている。つまり、日本語は「僕、ハンバーグ！」という表現だけで、「僕はハンバーグが食べたい」、もしくは、「僕はハンバーグにする」という意味を表せるが、韓国語は同一場面で「食べたい」や「(に) する」という動詞を省いて、「僕、ハンバーグ！」だけでは同じ意味を表せないということである。このような平木（2015: 25）と林八龍（2004: 231）の説明から、日本語の疑問の終助詞「～か」を含む間接疑問節は、基本的に名詞節(名詞表現)であるため、日本語は「X がわからなくて Y になる・Y をする」から、動詞表現の「わからなくて」を省略した(453)のような文が成立するが、韓国語は動詞表現なしでは不自然な文になってしまうのだと考えられる。

以上、4.1 では、次のようなことが明らかになった。１つ目に、「-는지（-neunji）＋主節述語」の構造を持つ韓国語の間接疑問構文のタイプは、典型的な間接疑問構文、二文連置構文（主に背景注釈型)、間接感嘆構文に集中している。２つ目に、韓国語に二文連置構文の割合が大きいことから、韓国語のほうが日本語に比べ、間接疑問構文の発達が遅れている可能性があると思われる。ただし、これについては今後の課題とする。３つ目に、日本語には、間接疑問構文の下位タイプであるが、カ節に助詞を後接させることができない「複雑述語」の間接疑問構文がある。韓国語にも「짐작이 가다（予想がつく)」という複雑述語が使われた文が見つかった。４つ目に、日本語の間接疑問構文のタイプにはあるが、韓国語の間接疑問構文のタイプにはな

い、もしくは、少ないものは、代わりに別の表現形式が使われている。５つ目に、日本語は、メトニミー的拡張による述語が間接疑問構文の主節述語として入ることができるが、韓国語の「-는지（-neunji）＋主節述語」の間接疑問構文は日本語に比べ、それが相対的に難しい。

4.2 間接疑問節の疑問文のタイプ

本節では日本語と韓国語の間接疑問構文において、間接疑問節の疑問文のタイプを分析した。その結果を以下の【表 15】に示す。各疑問文のタイプの具体例は以下のようである。

(455)疑問詞疑問：ブラウン管を通じてどのように映し出されているかを確認する。（学び心）

(456)肯否疑問：旅行するだけでなく、その国で自分の力で生活ができるのかを試すには、ワーキングホリデービザという強い味方があった。（アメリカ大陸行き当たりばったり）

(457)正反疑問：たいていの視力表は、五メートルぐらいの距離から見て判読できるか否かを問うものである。（アフリカを知る）

(458)選択疑問：本屋さんの店頭で「あとがき」を見ながら、買おうか買うまいか考えておられる方のために、これはどういう本なのかを、ご説明しておきたい。（刀と首取り）

【表15】間接疑問節の疑問文のタイプ

間接疑問節の疑問文のタイプ	日本語		韓国語	
	数	割合(%)	数	割合(%)
疑問詞疑問 「彼がいつ来るか知らない」	233	46.6	312	62.4
肯否疑問 「彼が来るか知らない」	212	42.4	162	32.4
選択疑問 「彼が来るか彼女が行くか知らない」	20	4.0	17	3.4
正反疑問 「成功だったか否かはまだ分からない」	35	7.0	9	1.8
総	500	100	500	100

【表 15】をみると、本研究で分析した 2000 年代日本語の 500 例からは、疑問詞疑問（46.6%）、肯否疑問（42.4%）、正反疑問（7%）、選択疑問（4%）の順になっていた。韓国語の場合も、疑問

詞疑問と肯否疑問の割合が大きい点が一致していた。高宮（2005）によると、間接疑問構文の歴史的発達においては、中世にカ節が選択疑問タイプの間接疑問構文から始まり、肯否疑問タイプが現れ、その後、疑問詞疑問タイプの順に使われるようになったとしている。

典型的な間接疑問構文だけを対象にした場合、間接疑問節の疑問文のタイプは【表 16】の通りだった。

【表16】間接疑問節の疑問文のタイプ（典型的な間接疑問構文のみ）

間接疑問節の疑問文のタイプ（典型的な間接疑問構文のみ）	日本語		韓国語	
	数	割合(%)	数	割合(%)
疑問詞疑問	94	58.8	213	72.2
肯否疑問	55	34.4	59	20.0
選択疑問	2	1.3	15	5.1
正反疑問	9	5.6	8	2.7
総	160	100	295	100

日本語も韓国語も【表 15】に比べ、疑問詞疑問の割合が大きくなっている。このことは周辺的な構文より典型的な間接疑問構文のほうで、疑問詞疑問がより積極的に使われているということを意味する。また、4.1 の【表 14】で確認できたように、間接疑問構文のタイプにおいて、日本語も韓国語も典型的な間接疑問構文の割合が一番大きいため、使用頻度が高い構文ほど、間接疑問節の疑問文のタイプが疑問詞疑問である確率が高いということが分かる。

それぞれの間接疑問構文における間接疑問節の疑問文のタイプを【表 17】にまとめた。

【表17】それぞれの間接疑問構文における間接疑問節の疑問文のタイプ

間接疑問構文のタイプ		日本語				韓国語			
		疑問詞疑問	肯否疑問	選択疑問	正反疑問	疑問詞疑問	肯否疑問	選択疑問	正反疑問
典型的な間接疑問構文		94	55	2	9	213	59	15	8
複雑述語の間接疑問構文		8	4	0	4	6	1	0	0
照応構文		2	1	0	2	0	0	0	0
潜伏疑問構文		3	2	0	1	0	0	0	0
依存構文		6	4	3	5	1	0	1	0
間接感嘆構文		5	0	0	0	55	0	0	0
内容構文		57	39	11	8	0	3	0	0
二文連置構文	課題提示型	29	23	3	5	21	2	0	1
	背景注釈型	1	13	0	0	15	95	0	0

言い換え型	1	2	0	0	1	2	1	0
引用構文	27	60	1	1	0	0	0	0
比況構文	0	7	0	0	0	0	0	0
仮想構文	0	2	0	0	0	0	0	0
総計	233	212	20	35	312	162	17	9

日本語も韓国語も、使用頻度が低い間接疑問構文に比べ、使用頻度が高い間接疑問構文のほうが、疑問詞疑問、肯否疑問、選択疑問の順で割合に明確な差が出ることが確認できる。また、高宮（2005）で明らかになった間接疑問節の発達の過程が、選択疑問タイプ→肯否疑問タイプ→疑問詞疑問タイプの順であることを考えると、後から発達した疑問文のタイプが、現代日本語ではより頻繁に使われていることも確認できる。ただし、日本語も韓国語も、二文連置構文の背景注釈型において、疑問詞疑問より肯否疑問の割合が大きいのは、背景注釈型は間接疑問節に、後節で表される様子や事実の原因や理由が述べられているためだと思われる。例えば、次の(459)と(460)は、それぞれ日本語と韓国語の二文連置構文の背景注釈型である。(459)は、後節の「無口で通した」という様子や事実に対し、「車のなかでは英二は気が張りつめているせいか」という、それの原因や理由と考えられる肯否疑問が、間接疑問節に述べられている。(460)も同様に、後節の「종로로부터 이동하는 데 많은 시간이 소요되지도 않았다.」という様子や事実に対し、「그날따라 회사 퇴근이 빨랐고, 전철을 타서인지」という、それの原因や理由と考えられる肯否疑問が、間接疑問節に述べられている。

(459) 車のなかでは英二は気が張りつめているせいか、無口で通した。(トヨタ・GM 巨人たちの握手)

(460) 그날따라 회사 퇴근이 빨랐고, 전철을 타서인지 종로로부터 이동하는 데 많은 시간이 소요되지도 않았다. (편집국 쪽으로)

Geunal-ttara hoesa toegeun-i ppal-lass-go, jeoncheor-eul taseo-in-ji jongro-ro-buteo idongha-neun de manh-eun sigan-i soyodoe-jido anh-ass-da. (pyeonjipguk jjogeuro)

その日に限って会社からの帰りが早く、電車に乗ったおかげなのか、鍾路から移動するのに時間がたくさんかからなかった。

以上、4.2 では次のようなことが明らかになった。１つ目に、間接疑問節の疑問文のタイプは、日本語も韓国語も、疑問詞疑問と肯否疑問の割合が大きい点が一致していた。２つ目に、

日韓両言語で、周辺的な構文より典型的な間接疑問構文のほうで、疑問詞疑問がより積極的に使われている。３つ目に、日本語も韓国語も、使用頻度が低い間接疑問構文に比べ、使用頻度が高い間接疑問構文のほうが、疑問詞疑問、肯否疑問、選択疑問の順で割合に明確な差が出る。４つ目に、日本語も韓国語も、二文連置構文の背景注釈型において、疑問詞疑問より肯否疑問の割合が大きいのは、背景注釈型は間接疑問節に、後節で表される様子や事実の原因や理由が述べられているためだと思われる。

4.3 日韓の間接感嘆構文

韓国語は全体の 500 例の中で、典型的な間接疑問構文ではなく、その周辺の構文タイプの１つである間接感嘆構文[61]が 55 例あった。一方、日本語は全体の 500 例の中で、間接感嘆構文は５例しか見つからなかった。つまり、韓国語のほうが日本語に比べ、間接感嘆構文の数が 11 倍で、圧倒的に多いことが分かる。この理由については、今後検討する必要がある。日本語の間接感嘆構文は疑問節に「如何に」が使われ、「どんなに」という意味で程度が甚だしいことを表している場合が多く、韓国語の場合も「どれほど」という意味を持つ「얼마나（eolmana)」が使われている部分がよく類似していた。また、本研究で調べた現代日本語の間接感嘆構文の主節述語は、「焦点を合わせる」、「見せつける」、「示す」など、間接疑問構文の主節述語とはやや異なるものだった。しかし、韓国語の間接感嘆構文を構成する主節述語は、(461)～(465)のように、「모르다（分からない/知らない)」、「알다（分かる/知る)」、「말하다（話す)」、「깨닫다(悟る)」など、間接疑問構文の主節述語と大きな差はなかった。

(461)그러니 걸어서 오분 거리에 홈플러스가 있다는 것이 얼마나 큰 위안인지

geureoni georeo-seo o-bun geori-e hompeulleoseu-ga iss-da-neun geos-i eolma-na keun wian-in-ji

몰라요.（영이）

mollayo.

だから歩いて五分の距離にホームプラスがあるということがどれほど大きな慰めなのか知

[61] 志波（2016）は、カ節で表される命題が誰の疑念（疑問）でもなく、話し手が事実として認めつつこれを感嘆の対象としている構文の間接感嘆構文として定義している。また、カ節の命題が疑問ではないという点で間接疑問構文と異なるが、カ節にダロウや丁寧などの要素を含み得ない点、また、主節の心理述語がカ節を直接に受ける点でも間接疑問構文に非常に近いところに位置していると述べている。

りません（どれほど大きな頼りになるのか知りません）。

(462)나도 그 개가 너희한테 얼마나 소중한지 알고 있다. (정화함대의 꿈)

Na-do geu gae-ga neohui-hante eolma-na sojunghan-ji al-go iss-da.

私もその犬があなたたちにどれほど大切なのか知っている。

(463)그는 도서관에서 파는 밥이 얼마나 맛이 없는지에 대해 끝도 없이

Geu-neun doseogwan-e-seo pa-neun bab-i eolma-na mas-i eops-neun-jie daehae kkeut-do eops-i

말했다. (영이)

malhaess-da.

彼は図書館で売っているご飯がどれほどまずいのかについて無限に語った。

(464)자신의 삶을 이해하게 된 한은 자신이 지금까지 얼마나 시시한 고통 속에서

Jasin-ui salm-eul ihaeha-ge doen han-eun jasin-i jigeum-kkaji eolma-na sisihan gotong sog-e-seo

바보 같은 삶을 살아왔는지 깨닫고는 웃음을 터뜨릴 수밖에 없었다. (영이)

babo gat-eun salm-eul sarawass-neun-ji kkaedat-go-neun useum-eul Teotteuril su-bakke eop-seoss-da.

自分の人生を理解するようになったハンは、自分がこれまでどれほどくだらない

苦しみの中で愚かな人生を生きてきたかを悟り、笑いを吹き出すしかなかった。

(465)자금 없는 조직이 얼마나 한심한지 톡톡히 겪어본 홍화는

jageum eops-neun jojig-i eolma-na hansimhan-ji toktok-hi gyeokkeobon honghwa-neun

이미 빈틈없는 계획을 짜두었다. (정화함대의 꿈)

imi binteum-eops-neun gyehoeg-eul jjadu-eoss-da.

資金のない組織がどれほど哀れなのか、ずいぶん経験した紅花は、

すでに隙のない計画を立てておいた。

(466)“이서연”이라고 소리치는 거야. 그때는 얼마나 놀랐는지…. (편집국 쪽으로)

“Iseoyeon”i-rago sorichi-neun geo-ya. Geu-ttae-neun eolma-na nollass-neun-ji….

「イ・ソヨン」と叫ぶのよ。その時はどれほど驚いたか…。

このことは、韓国語のほうが日本語に比べ、間接感嘆構文の文法化がより進んでいることを意味している可能性もあるため、今後検討する必要がある。つまり、韓国語の場合、「얼마나(eolmana)-는지(neunji)모른다(moreunda)/안다(anda)/말하다(malhada)/깨닫다(kkaedatda)(どれほど～か分からない/知らない・分かる/知る・話す・悟る)」が、よく使われる１つの慣

用的な言い回しとして定着していると思われるが、日本語の場合はそのような傾向はみられない。また、間接感嘆構文の中で主節述語の動詞が省略されていると思われる(466)のような例も、間接感嘆構文 55 例の中で２例あった。(466)は、後ろの述語「分からない」がなくても文意が推測できるため、省略可能となっている。このことも韓国語の間接疑問構文の周辺的なタイプとして、高い頻度で使われている間接感嘆構文の文法化を意味する。(466)を日本語に訳した文も自然だが、本研究の 500 例の日本語からは、主節述語の動詞が省略されている間接感嘆構文は１つも見つからなかった。

以上、4.3 では、次のようなことが明らかになった。１つ目に、韓国語のほうが日本語に比べ、間接感嘆構文の数が 11 倍で、圧倒的に多いことが分かる。２つ目に、日韓両言語の間接感嘆構文は、「どんなに」という意味で程度が甚だしいことを表している「如何に」、「얼마나(eolmana)」が使われている。３つ目に、日本語の間接感嘆構文の主節述語は、間接疑問構文の主節述語とはやや異なるが、韓国語の間接感嘆構文の主節述語は、間接疑問構文の主節述語と大きな差はない。４つ目に、韓国語のほうが日本語に比べ、間接感嘆構文の文法化がより進んでいる。

4.4 間接疑問構文の主節述語

次に、韓国語の間接疑問構文の主節述語動詞を、藤田（1983、1997）の３つのタイプを基準とし、【表 18】のように分類してみた。その結果、未決タイプ（60.9%）、対処タイプ（24.9%）、既決タイプ（14.2%）の順で割合が大きかった。現代日本語の場合は、対処タイプ（47.3%）、未決タイプ（41.3%）、既決タイプ（11.3%）の順で割合が大きかった。両言語を比べると、韓国語も日本語も既決タイプの割合が一番小さい点が一致している。一方、韓国語は未決タイプの割合が、日本語は対処タイプの割合が一番大きい点が異なっている。

【表18】韓国語の間接疑問構文の主節述語動詞

タイプ	間接疑問構文の主節述語動詞	数	割合（%）
未決タイプ	모르다 83（分からない/知らない）、알 수 없다 33（分かることができない/知ることができない）、알지 못하다 3（分かることができない/知ることができない）、알아보기도 힘들다 1（分かりにくい）、알아낼 수 없다 1（探し出せない）、기억나지 않다 2（思い出せない）、기억이 안 나다 1（思い出せない）、기억할 수 없다 1（覚えていない）、헷갈리다 2（こんがらがる）、갈피를 못 잡다 1（思い迷う）、난감해지다 1（困り果てる）、잊다 1（忘れる）、잊어버리다 1（忘れてしまう）、걱정되다 2（心配になる）、들어본 적이 없다 1（聞いたことがない）、분간할 수 없다 1（見分けがつかない）、가늠이 되지 않다 1（見当がつかない）、짐작할 수 없다 1（推測できない）、이해가 안 되다 1（納得ができない）など	142	60.9 日本語： 41.3
対処タイプ	보다 5（見る）、살피다 3（確認する）、살펴보다 1（確認してみる）、쳐다보다 1（見つめる）、지켜보다 1（確認する）、확인하다 3（確認する）、재어보다 1（はかる）、묻다 7（尋ねる）、여쭙다 2（伺う）、생각하다 4（考える）、고민하다 3（悩む）、논의하다 1（論議する）、논하다 1（論ずる）、정하다 3（決める）、들어보다 1（聞いてみる）、들려주다 1（聞かせてくれる）、밝히다 1（明らかにする）、연구하다 1（研究する）、결정하다 1（決める）、찔러보다 1（刺してみる）、표시하다 1（表示する）など	58	24.9 日本語： 47.3
既決タイプ	알다 18（分かる/知る）、알아듣다 1（聞き取る）、알려주다 1（教える）、알아채다 1（気が付く）、기억해내다 1（思い出す）、말하다 1（話す）、깨닫다 2（悟る）、이해하다 1（理解する）、이해가가다 1（納得する）、느끼다 1（感じる）、떠오르다 1（思い浮かぶ）、가늠하다 1（推し量る）、짐작하다 2（推量できる）など	33	14.2 日本語： 11.3

日本語の間接疑問構文の場合、高宮（2005：10）が、疑問を表す未決タイプから始まり、対処タイプが現れ、最後に既決タイプが現れたと主張しているように、未決タイプ、対処タイプ、既決タイプの順で発達したと思われる。これは、「疑問」という意味が、「答えが未決である主節述語」の「分からない」と親和性が高いためであると考えられる。この歴史的な発展に鑑みると、本研究の調査で、韓国語は未決タイプの割合が、日本語は対処タイプの割合が一番大きいということは、日本語の間接疑問構文のほうが韓国語に比べ、より発達している可能性が高いことを意味していると思われる。

一方、韓国語の場合、間接疑問構文の主節述語として上記の動詞以外に、形容詞が来る例も

全体の 500 例中、20 例が見つかった。(467)～(471)のように、「애매하다 (曖昧だ)」、「분분하다 (意見がまちまちだ)」、「궁금하다 (気になっている)」、「의심스럽다 (疑わしい)」、「혼란스럽다 (混乱している)」、「알기어렵다 (分かりにくい)」、「모호하다 (模糊としている)」、「난감하다 (困り果てている)」、「기쁘다(嬉しい)」、「불분명하다(不明だ)」、「의아하다(怪訝だ)」、「신기하다 (珍しい/不思議だ)」などの多様な形容詞が使われている。この形容詞を藤田 (1983、1997) の３つのタイプを基準とし分類すると、「애매하다 (曖昧だ)」、「분분하다 (意見がまちまちだ)」、「궁금하다 (気になっている)」、「의심스럽다 (疑わしい)」、「혼란스럽다 (混乱している)」、「알기어렵다 (分かりにくい)」、「모호하다 (模糊としている)」、「난감하다 (困り果てている)」、「불분명하다 (不明だ)」、「의아하다 (怪訝だ)」、「신기하다 (珍しい/不思議だ)」は、話し手が従属節の疑問に対する答えを持っていないため、これらは未決タイプとして分類できる。しかし、残りの「기쁘다 (嬉しい)」は、江口 (2022) が言及したメトニミー的拡張による述語のタイプであると思われる。この部類の形容詞が使われている(472)のような文もあった。

(467)문제는 시황인지 상품 동향인지 애매한 기사가 증권2면에

Munje-neun sihwang-in-ji sangpum donghyang-in-ji aemaehan gisa-ga Jeunggwon-i-myeon-e

들어왔다는 사실이다. (편집국 쪽으로)

deureowass-da-neun sasir-ida.

問題は市況なのか商品動向なのか曖昧な記事が証券 2 面に

入ってきたという事実だ。

(468)주가 1400을 내준 게 일시적 조정인지 추세하락인지

juga cheon-sa-baek-eul naejun ge ilsi-jeok jojeong-in-ji chuse-harag-in-ji

분분한 상황이라、 (편집국 쪽으로)

bunbunhan sanghwang-ira、

株価 1400 を渡してしまったのが一時的な調整なのか下降傾向なのか

意見がまちまちな状況なので、

(469)영규는 창준이 어디로 가자는 건지 궁금했지만 그냥

Yeonggyu-neun changjun-i eodi-ro gaja-neun geon-ji gunggeumhaess-ji-man geunyang

따라 가기로 했다. (석각의 비밀)

ttara ga-gi-ro haess-da.

ヨンギュはチャンジュンがどこに行こうと言っているのか気になったが、ただ付いていくことにした。

(470)처음부터　그들은　진시황을　꾀어서　재물이나 뜯으려　했지

Cheoeum-buteo geudeur-eun jinsihwang-eul kkoe-eoseo jaemur-ina tteud-euryeo haessji

정말　불로초를　구하겠다는 마음이 있었는지는　의심스럽습니다. (석각의 비밀)

jeongmal bullochoreul guhagessdaneun maeumi isseossneunjineun uisimseureop-seup-nida

最初から、彼らは真市皇を誘い出して財物を奪うとして、本当に不老草を探すつもりだったのかは疑わしいです。

(471)혹은 내가 정말　어딘가로 가길 원하는지조차 혼란스러웠다. (담배 한 개비의 시간)

hogeun nae-ga jeongmal eodinga-ro ga-gil wonha-neun-ji-jocha honranseureo-woss-da.

もしくは、私が本当にどこかに行きたいのかさえ混乱していた。

(472)내　무슨　복으로　이런　날을　맞는지　　너무　기쁘고

nae museun bog-euro ireon nar-eul maj-neun-ji neomu gippeu-go

감개가　무량해　　그만　주책을　　떨었네. (정화함대의 꿈)

gamgae-ga muryanghae geuman juchaeg-eul tteor-eoss-ne.

私は何の福でこんな日を迎えるのかとても嬉しいし、感慨が無量で、つい軽々しく振舞ってしまった。

日本語の場合も、現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT）から中納言を用い、「か＋形容詞（形容動詞)」で検索した 500 例中、12 例が間接疑問構文の主節述語として形容詞や形容動詞が使われていた。例えば、(473)～(478)では、「疑わしい」、「難しい」、「怪しい」、「不明だ」、「定かだ」、「問題だ」などが見つかり、韓国語に比べ数少ない形容詞に限られるが、形容詞や形容動詞が間接疑問構文の主節述語として使われている。日本語記述文法研究会編（2008: 41）によると、「明らかだ」、「不明だ」、「怪しい」など、知識の有無に関する述語も疑問節が補語になれると記述されている。上記の「疑わしい」、「難しい」、「怪しい」、「不明だ」、「定かだ」は、このタイプに該当する。藤田（1983、1997）の３つのタイプでは、未決タイプか、既決タイプに該当する。残りの「問題だ」は、日本語記述文法研究会編（2008: 41）で言及された命題の重要性・関連性に関する述語（重要だ、大切だなど）に該当する。これは藤田の３つのタイプでは、未決タイプに該当する。

(473)本当に外的事物として存在しているのか疑わしいもの（たとえば、雪男やネッシー)、想像上の存在にすぎないと信じているもの（たとえばサンタクロースや河童）などがふくまれうるだろう。(情報文明論)

(474)実務では、本当に捜査のために必要があるのかどうか疑わしいような場合にまで接見指定がなされることが少なくありません。(入門刑事訴訟法はこう読む)

(475)相手の弱い石をつくるとか、いろいろ作戦を見てきたわよね。でも、どこから戦うか難しいときもあるでしょ？（3日で強くなるこども囲碁作戦入門）

(476)男はじっと坐っており、われわれが背後にいることに気づいているかどうか怪しかった。(虐殺魔<ジン>)

(477)ふつう子オロシを堕胎、出生後の嬰児殺しを間引と解釈しているが、江戸時代に厳密に両者を区別していたかどうかは不明である。(人口から読む日本の歴史)

(478)持っているか、いないかが問題だ！（名医発見）

韓国語の間接疑問構文には、従属節の「-는지（-neunji)」と主節述語の順番が逆になり、「主節述語. -는지 （말이야(mariya)/말이다（marida))」の構造を持つ倒置文が、全体の500例の中で、8例見つかった。例えば、(479)は、「도대체 네가 무슨 소릴 하는 건지 모르겠어（いったい君が何を言っているのか分からない。)」という文の主節述語に相当する「모르겠어」が前置した文として考えられる。このタイプの倒置文は、韓国語の間接疑問構文の中の１つの構文タイプとして分類できるとみられる。現代日本語においても同じような構文があるのかについては検討の余地がある。

(479)모르겠어.　도대체 네가 무슨 소릴 하는 건지.....（석각의 비밀）

Moreu-gess-eo. dodaeche ne-ga museun soril ha-neun geon-ji.....

分からない。いったい君が何を言っているのか.....

(480)오늘에서야 깨달았지　뭐야. 내가 얼마나 회사를 지겨워하고 있었는지

Oneur-eseo-ya kkaedar-ass-ji mwo-ya. Nae-ga eolma-na hoesa-reul jigyeowo-ha-go iss-eoss-neun-ji

말이야.（영이）

mar-iya.

今日になってやっと分かった。俺がどれだけ会社に飽きていたのかさ。

(481)그럼　한번　설명을　　해 보게. 아버지의 글에　대해 자네는

geureom han-beon seolmyeong-eul hae bo-ge.　Abeoji-ui　geu-re daehae jane-neun

어찌 생각하는지를. (멋지기 때문에 놀러 왔지)

eojji　saenggak-ha-neun-ji-reul.

なら、説明してみなよ。お父さんの文章について君はどう考えているのかを。

(482)이옥은 다만 이해할 수 없을　뿐이었다.　자신의 어떤 부분이

Iog-eun　daman ihae-hal　su eops-eul ppun-ieoss-da. Jasin-ui eotteon bubun-i

임금을　그렇게　거슬리게　하는지를　　말이다. (멋지기 때문에 놀러 왔지)

Imgeum-eul geureoh-ge geoseulli-ge ha-neun-ji-reul mar-ida.

イオクはただ理解できないだけだった。自分のどの部分が

そんなに王様の気に障るのかを。

以上、4.4 では、次のようなことが明らかになった。１つ目に、間接疑問構文の主節述語動詞を藤田（1983、1997）の３つのタイプで分類すると、韓国語も日本語も既決タイプの割合が一番小さい点が一致している。２つ目に、日本語の間接疑問構文の主節述語動詞の場合、未決タイプ、対処タイプ、既決タイプの順で発達した歴史的な発展に鑑みると、韓国語は未決タイプの割合が、日本語は対処タイプの割合が一番大きいということは、日本語の間接疑問構文のほうが韓国語に比べ、より発達している可能性が高い。３つ目に、間接疑問構文の主節述語として形容詞が来る例は、韓国語が日本語に比べ、1.6 倍以上多かった。４つ目に、韓国語の間接疑問構文には、従属節と主節述語の順番は逆になっている倒置文が 500 例中 8 例見つかったが、日本語は１つも見つからなかった。

5　まとめと今後の課題

第６章では、まず、韓国語の間接疑問構文は、間接話法の「-냐고（-nyago)」を従属節として文中に含んでいる文ではなく、「-는지（-neunji)」で構成される従属節を持つ文であることを示した。「-는지（-neunji)」を従属節に持つ文は、日本語の間接疑問構文と同様に従属節が疑問の終助詞で終わっており、その従属節は名詞節であり、「分からない」、「分かる」、「聞く」

などの動詞を主節述語にすることができる点で日本語の間接疑問構文と類似していたことから、「-는지（-neunji)」を従属節に持つ文が間接疑問構文であることを示した。さらに、先行研究を通じて日本語の間接疑問構文に類似している韓国語の表現形式は、疑問を表す「-는지（-neunji)」によって、述部と意味的呼応関係を成している文であることを確認し、韓国語の「-는지（-neunji)」が日本語の「～か」のような意味と役割を果たしていることも明らかにした。

次に、これらをもとに韓国語の間接疑問構文のタイプと日本語の間接疑問構文のタイプの比較検討を行った。韓国語の間接疑問構文は、日本語の間接疑問構文に比べ、種類が限られており、典型的な間接疑問構文、二文連置構文（主に背景注釈型)、間接感嘆構文に集中していることが分かった。これは、韓国語には「-는지（-neunji)」とは異なる別の表現形式があり、この別の表現形式が、一部の間接疑問構文の、代わりの役割を果たしているためだと思われる。とくに背景注釈型の二文連置構文が多く、カ節が後ろに続く節の原因・理由を表している文が多いのが日本語の間接疑問構文とは異なる特徴であった。

複雑述語の間接疑問構文は、韓国語も日本語と同様に、疑問節と「補足語＋述語」の間には、「는（は)」のような副助詞をつけることは可能だが、「가（が)、을/를（を)、에（に)、과/와（と)、에서（で)、의（の)」などの格助詞をつけることは不可能であることが分かった。

間接感嘆構文の場合、韓国語のほうが日本語に比べ、間接感嘆構文の数が11倍で、圧倒的に多いことが分かった。これは韓国語の間接疑問構文の発達において、他の表現形式との何らかの関わりもあり、そのようになったと思われるが、具体的な理由については、今後検討する必要がある。日本語の間接感嘆構文には「如何に」が使われている文が多く、韓国語の場合も、「얼마나（eolmana)」が使われている部分がよく類似していた。しかし、日本語の間接感嘆構文の主節述語は、間接疑問構文の主節述語とはやや異なるものだが、韓国語の間接感嘆構文を構成する主節述語は、間接疑問構文の主節述語と大きな差はなかった。このことは、韓国語のほうが日本語に比べ、間接感嘆構文の文法化がより進んでいることを意味する。

間接疑問節の疑問文のタイプは、日本語も韓国語も疑問詞疑問と肯否疑問の割合が大きいところが一致していた。また、日韓両言語は周辺的な構文より典型的な間接疑問構文のほうで、疑問詞疑問がより積極的に使われているということが分かった。

日本語も韓国語も間接疑問構文の主節述語として動詞以外に、形容詞が来ることがあり、それらの具体的な例が両言語において、確認できた。韓国語の場合、間接疑問構文の主節述語としてメトニミー的拡張による述語が来るのは、日本語に比べ相対的に難しいことが確認できた。言い換えれば、日本語は「Xがわからなくて Yになる・Yをする」から、動詞表現の「わからなく

て」が省略できるが、韓国語は省略ができないということである。韓国語の場合は、事態を具体的且つ説明的に動詞でもって動的に捉えようとする傾向があるため、動詞表現の省略が難しいことが明らかになった。

さらに、間接疑問構文の主節述語は、韓国語は未決タイプの割合が、日本語は対処タイプの割合が一番大きいところが異なっていることが分かった。日本語の間接疑問構文が未決タイプ、対処タイプ、既決タイプの順で発達したという歴史的な発展に鑑みると、韓国語は未決タイプの割合が、日本語は対処タイプの割合が一番大きいということは、日本語の間接疑問構文のほうが韓国語に比べ、より発達している可能性が高いことを意味していると思われる。本研究では韓国語の間接疑問構文の発達の歴史について直接的に調査を行わなかった。しかし、韓国語の間接疑問構文と日本語の間接疑問構文の歴史的な変遷とその段階は異なる可能性があるため、今後検討する必要があるだろう。

また、韓国語の間接疑問構文には、日本語では見られなかった従属節の「-는지（-neunji)」と主節述語の順番が逆の「主節述語. -는지 （말이야（mariya）/말이다（marida))」の構造を持つ倒置文が、500例の中で、8例見つかった。現代日本語においても同じような構文があるのかについては検討の余地がある。

以上のように、本研究では、日本語の間接疑問構文と韓国語を対照したことで、韓国語の間接疑問構文についての議論を可能とし、前進させた。さらに、両言語の間接疑問構文における共通点と相違点を明らかにした。

第７章　結論と課題

1　本論文のまとめと結論

本研究では、現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT）、名大会話コーパス、韓国語コーパスの国立国語院の말뭉치（マルムンチ）という３つのコーパスから用例を収集した。収集した用例は、「～かと思う」構文の500例、カノ構文の700例、カト構文の800例、「-는지（-neunji）」の間接疑問構文の500例、日本語の間接疑問構文の500例の総計3000例である。この3000例を分析し、カ節を持つ構文の記述的研究を行った。本章では、まず、各章別の結論をまとめた上で、今後の課題を提示する。

1.1 第３章　「～かと思う」構文の下位タイプのまとめ

「～かと思う」という形式を持つ文は、その意味と構造によって、大きく２つに分けられることが分かった。１つ目は、独白の疑問を「～と思う」で引用している場合で、「カ節-と思う」の構造を持つ。２つ目は、形態的には独白の疑問を「～と思う」で引用しているように見えるものの、平叙文に「～かと思う」が後続し、非現実性判断や断定の和らげといった、平叙節を「かと思う」が受けるタイプである。この２つの下位タイプには以下のようなものがあることが明らかになった。

【図8】カト思う構文の下位分類（【図 4】再掲）

カト思う構文

① 独白の疑問を直接引用しているもの（「カ節-と思う」）

単純疑問引用「「何かが落ちたのか」と思った」

新たな気づき「「今日で新学期が始まったのか」と思った」

モダリティ　推量「「明日は雨が降るんじゃないか」と思った」

願望「「この会議を２時までに終えてくれないか」と思った」

意志「「本を買いに行こうか」と思ったが、明日にすることにした」

② 平叙節を「かと思う」が受けるタイプ（「節-かと思う」）

非現実性認識　誤解内容「今日が締め切りかと思ったんだけど、昨日だった」

比喩比況「地球が滅びるかと思った」

断定和らげ　「こっちを選んだほうがいいかと思います」

これらの下位タイプは互いに関係を持ちながら、「～かと思う」文として体系を成している。つまり、典型的な構造を持つ時は、互いに独立し、意味的な差が明確であるが、特定の条件（構造、および、他の要素）においては、下位タイプの間で意味が似通うことになる。下位タイプ同士がどのような条件を満たす場合に、互いが似通うのかを明確にした。具体的には、前後の文や節の意味関係、従属節の述語の品詞性、主節主語の人称、主節述語の時制・丁寧さ、モダリティの有無が関わっていることが分かった。

次に、多様な「～かと思う」文にみられる共通点と相違点について概観した。第１に、すべての「～かと思う」文の主節主語は基本的に１人称である。無論、特殊な場合である小説の地の文では、３人称も可能であるが、基本的には１人称である。このことは、「～と思う」という表現形式が、話し手の認識的態度を表す「モダリティ」に近いことを意味する。特に、断定和らげ構文の「～と思う」がモダリティに近づく。断定和らげ構文は、対話の構造の中で使われ、主節主語は必ず１人称である性質を持つ。

第２に、「～かと思う」文の中には、主節述語の使用が相対的に自由で、主節述語の「思う」を、別の動詞に置き換えることができるものがある反面、主節述語動詞の使用に制約があり、「思う」以外の動詞に置き換えることができないものもあった。主節述語の使用が相対的に自由な文は、ある特殊な意味として定着しているわけではないため、文としての生産性が高く、文

の意味もより一般的であると考えられる。独白の疑問を直接引用している文がこれに当たる。これに対し、主節述語動詞に「思う」のみが使えるタイプは、その文が全体で特殊な意味を持って定着しているため、主節述語を他の動詞に置き換えることができないという制約が生じる。平叙節を「かと思う」が受けるタイプがこれに当たる。

第３に、カ節の文としての独立性が高いため、「か」の後ろにポーズを入れることができる「～かと思う」文と、そうではない「～かと思う」文の２つがあった。例えば、独白の疑問を直接引用しているものは、従属カ節の中にモダリティが含まれる場合が多く、カ節の独立性が高いため、「か」の後ろにポーズを入れることができる。さらに、「か」は省略できないという特徴もみられる。一方で、平叙節を「かと思う」が受けるタイプは、従属節の中にモダリティが含まれず、従属節の独立性が低いタイプである。さらに、このタイプは聞き手を想定し発話される場合が多いという特徴もみられる。

上記の内容を以下の【表19】に再掲する。

【表19】各タイプの意味を支える形式的（構造的）特徴（【表 6】再掲）

<table>
<tr><th>文の構造</th><th colspan="2">「～かと思う」の種類</th><th>文全体が発話文か独白文か</th><th>「思う」のテンス・アスペクトの制約</th><th>従属節内の述語の特性（モダリティの有無）</th><th>主節主語の人称</th><th>主節述語「思う」の他の動詞への転換可能性</th><th>従属カ節の文としての独立性（カの後にポーズを置けるか）</th></tr>
<tr><td rowspan="5">カ節＋と思う</td><td colspan="2">単純疑問引用</td><td rowspan="6">発話文
独白文</td><td>無し</td><td>モダリティの有無は問わない</td><td rowspan="6">基本的に１人称</td><td rowspan="5">可能</td><td rowspan="5">従属節の独立性が高い（ポーズをおける）</td></tr>
<tr><td rowspan="3">モダリティ</td><td>推量</td><td rowspan="4">過去形</td><td rowspan="3">モダリティ有り</td></tr>
<tr><td>願望</td></tr>
<tr><td>意志</td></tr>
<tr><td colspan="2">新たな気づき</td><td rowspan="5">モダリティ無し</td></tr>
<tr><td rowspan="2">節＋カト思う</td><td colspan="2">非現実性認識</td><td rowspan="2">不可能</td><td rowspan="2">従属節の独立性が低い（ポーズを置けない）</td></tr>
<tr><td colspan="2">断定和らげ</td><td>聞き手がいる発話文のみ</td><td>非過去形</td><td>必ず１人称</td></tr>
</table>

このように、第３章では、「～かと思う」という表現形式を持つ文には、単に、独白の疑問文を「～と思う」で引用しているものと、形態的には同様に独白の疑問文を「～と思う」で引用

しているように見えるものの、文全体が個々の要素の意味から導き出せない別の意味を持つものの２つがあることが確認できた。また、下位タイプの種類、特徴、相関関係が把握でき、「～かと思う」文の全体の体系を明らかにすることができた。

1.2 第４章　カノ構文と被修飾名詞の種類のまとめ

カノ構文をどのような形式に置き換えられるかという特徴を基準とし、カノ構文の下位タイプを分類した。１つ目に、間接疑問構文に言い換えられるカノ構文は、すべて「間接疑問節（修飾節）を＋N（被修飾名詞）する」、もしくは、「間接疑問節（修飾節）が＋N（被修飾名詞）だ」という間接疑問構文の構造に置き換えて述べることが可能なタイプである。２つ目に、通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文は、「間接疑問節（修飾節）＋の」という部分を、通常の連体修飾に置き換えられるタイプである。３つ目に、選言文に関わるカノ構文は、間接疑問構文に置き換えることも、通常の連体修飾に置き換えることもできず、修飾節の文が選言文に近いタイプである。１つ目の間接疑問構文に言い換えられるカノ構文と２つ目の通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文は、修飾節の文が疑問文であるため、その答えに焦点を当てていると同時に、被修飾名詞も修飾節の疑問の答えと関係がある。一方で、３つ目の選言文に関わるカノ構文は、修飾節の文が疑問文の形をしているものの、選言文に近いため、疑問の答えよりは修飾節自体の局面に注目している。

さらに、分類されたカノ構文の下位タイプにおいて、被修飾名詞となる名詞の種類や修飾節の疑問の種類についても考察を行った。【表20】にカノ構文の下位タイプと被修飾名詞の種類を提示しておく。

【表20】カノ構文の下位タイプと被修飾名詞の種類（【表 12】再掲）

カノ構文の種類	下位タイプ	被修飾名詞となる名詞
間接疑問構文に言い換えられるカノ構文	判断タイプ	**思考や認識を表す動作性名詞：** 判断、判定、見極め、見通し、予想、区別、選別、選択、確認、比較、把握など
	問題・疑問タイプ	**問題・疑問に関する名詞：** 問題、問い、ほう、一点、点、ポイント、内容、課題など
	検証タイプ	**検証を表す動作性名詞：** 実験、研究、調査、分析、吟味、議論、論議、検証、証明、試験、検討などの
	言語表現タイプ	**言語表現を表す動作性名詞：** 説明、話、記録、記述、質問など
	心情タイプ	**心情を表す名詞：** 不安、苛立ちなど
通常の連体修飾に言い換えられるカノ構文	証拠タイプ	**証拠を表す名詞：** 証左、証、証拠、確証、証し、根拠など
	原因タイプ	**原因に関する名詞：** 理由、原因など
	印象タイプ	**心情を表す名詞：** 感、観、意、印象など
	手段タイプ	**手段に関する名詞：** 手段、方法、戦略、手練手管、検査法など
	過程タイプ	**過程を表す名詞：** 過程、径路、プロセス、経緯など
選言文に関わるカノ構文	分かれ目タイプ	**分かれ目に関する名詞：** 瀬戸際、岐路、分岐点、分かれ目、分かれ道、限界、二者択一、天王山、基準、尺度、目安、二途など
	差異タイプ	**差異を表す名詞：** 違い、差、相違、差異、有無など
	時間タイプ	**時間に関わる名詞：** うち、ころ、時、瞬間、時期、タイミングなど
	結果タイプ	**結果を表す名詞：** 結果

修飾節（間接疑問節）の疑問の種類は、3.1の間接疑問構文に言い換えられるカノ構文の場合、選択疑問と疑問詞疑問の割合が大きく、3.2の通常の連体修飾に置き換えられるカノ構文の場合は、疑問詞疑問の割合が大きく、3.3の選言文に関わるカノ構文場合は、選択疑問（もしくは、選言）の割合が大きかっ

た。これは、修飾節の疑問のタイプと被修飾名詞の意味が、お互いに関わっていることを意味すると考えられる。具体的には、被修飾名詞となる名詞の種類は、被修飾名詞と修飾節がどのような構造的関係を持っているのかに大きく影響を与えることが分かった。さらに、同じタイプのカノ構文でも、修飾節（間接疑問節）の疑問の種類によっては、別のタイプのカノ構文に似通うこともあった。

分析を行ったカノ構文700例の中で、被修飾名詞が抽象名詞ではなく、具体名詞である文は2例しかなく、その場合も、抽象名詞として使われていることが分かった。つまり、具体名詞はカノ構文の被修飾名詞になることが難しいと言える。また、「命令」、「禁止」、「推測」などの抽象名詞も、カノ構文の被修飾名詞とはなりにくいことが分かった。実際、カノ構文700例の中で被修飾名詞に「命令」、「禁止」、「推測」が使われている例は１つも見つからなかった。さらに、カノ構文の「の」の前には、「行こうか」のように、聞き手に問いかけているようなニュアンスが出てしまう引用節は入れられないということも分かった。

1.3 第５章　カト構文と間接疑問構文の相関関係のまとめ

第５章では、カト構文と間接疑問構文の関係、及び、両構文の体系を明らかにした。カト構文と間接疑問構文については４つの点が明らかになった。第１に、意味の違いである。両構文は、基本的な構造において、「カ」があるが、以下のような違いがみられた。カト構文では、従属節に疑問の意味がなく、平叙の意味を持っている場合が多いということが分かった。一方で、間接疑問構文の従属節は、形式的にも意味的にも疑問文であることが分かった。第２に、疑問詞疑問の形式と肯否疑問の形式の偏りの差である。カト構文の場合、従属節の疑問のタイプは、疑問詞疑問文の形式よりも肯否疑問文の形式が典型であった。間接疑問構文の場合、従属節の疑問のタイプは、肯否疑問文よりは疑問詞疑問文になるのが典型であった。第３に、主節述語によるカ節と主節の関係の差である。引用構文は、主節述語が「言う」や「思う」の場合、カ節と主節の関係が「どのように言ったのか、思ったのかの具体的な内容を表すカ節」―「引用の述語」になり、二重表現的構造が成り立つ。一方、間接疑問構文は、主節述語が「言う」の時、カ節と主節の間の関係が、「カ節の疑問に対する答え」を「言う」という関係になり、引用構文とは異なる意味の文になる。第４に、モダリティによる差である。カト構文は「思う」が主節述語の時に、カ節がモダリティを持つ割合が大きい。また、カ節は独立した直接疑問文に近い。ここから、カト構文は「思う」が主節述語になる際には、従属節の中にモダリティを含むことができない間接疑問構文とは、離れているところに位置する引用構文であると考えられる。また、カト構文のカ節がモダリティを持たない場合でも、主節述語が「言う」、「思う」の時には、「カ節―主節述語」が「具体―抽象」の二重表現的構造を持

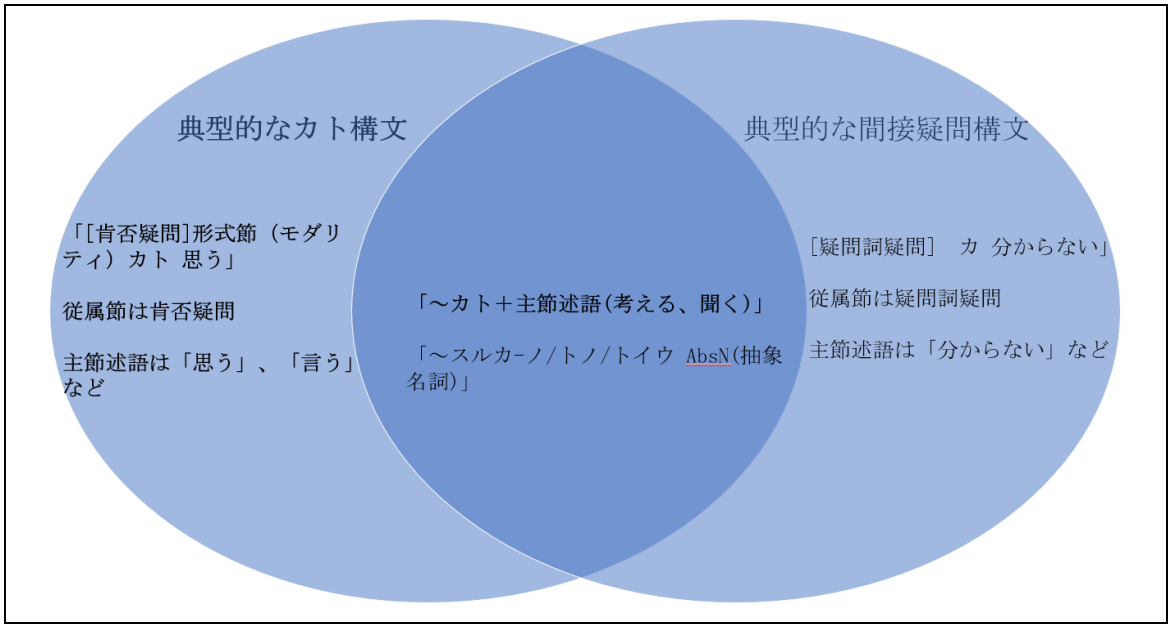
つ典型的な引用構文となり、間接疑問構文とは離れているところに位置する引用構文と考えられる。

両構文のこうした形式的な相違点は、本質的な意味の異なりの結果であると考えられる。具体的には、カト構文は、カ節の疑問に対する答えではなく、カ節で述べられている内容自体、つまり、カ節の具体的な内容全体に意味的な焦点を当てているが、間接疑問構文は、カ節の疑問に対する答えに意味的な焦点を当てている。これは、カト構文が、基本的に思ったことや、言われたことを伝える性格を持つ引用構文であるが、間接疑問構文は、基本的に疑問に思っていることや分からないことを表現する性格の文であるということを意味する。つまり、引用構文は既知のことを伝えるため、既決が原初的なものの、間接疑問構文は未知のことを表現するため、未決が原初的なものであり、本来の使い方であるために、カト構文と典型的な間接疑問構文に形式的な相違点がみられると考えられる。

一方で、両構文がそれぞれ独立し、関係のない構文形式であるかというと、そうではない。例えば、カト構文は、「考える」と「聞く」等の対処タイプに当たる認識動詞が主節述語になる場合に、間接疑問構文に隣接するようになるということが確認できた。また、間接疑問構文の周辺的なタイプである内容構文である「Aスルカ-ノ/トノ/トイウ AbsN (抽象名詞)」という構造を持つ文は、カト構文に言い換えやすくなるため、非常に隣接した関係であると考えられる。

ここで最後に、【図2】で示した引用構文であるカト構文と間接疑問構文の関係を【図9】に再掲したい。

【図9】典型的なカト構文と典型的な間接疑問構文の関係（【図 7】再掲）



1.4 第６章　間接疑問構文の日韓対照研究のまとめ

第６章では、まず、韓国語の間接疑問構文は、日本語の観点から考えた時、間接話法の「-냐고（-nyago)」を従属節として文中に含んでいる文ではなく、「-는지（-neunji)」で構成される従属節を持つ文であることを示した。「-는지（-neunji)」を従属節に持つ文は、日本語の間接疑問構文と同様に従属節が疑問の終助詞で終わっており、その従属節は名詞節であり、「分からない」、「分かる」、「聞く」などの動詞を主節述語にすることができる。「-는지（-neunji)」を従属節に持つ文が、このような点で日本語の間接疑問構文と類似していることから、「-는지（-neunji)」を従属節に持つ文こそが、間接疑問構文であることを示した。さらに、先行研究を通じて日本語の間接疑問構文に類似している韓国語の表現形式は、疑問を表している「-는지（-neunji)」によって、述部と意味的呼応関係を成している文であることを確認し、韓国語の「-는지（-neunji)」が日本語の「～か」のような意味と役割を果たしていることも明らかにした。

次に、これらをもとに韓国語の間接疑問構文のタイプと日本語の間接疑問構文のタイプの比較検討を行った。韓国語の間接疑問構文は、日本語の間接疑問構文に比べ、種類が限られており、典型的な間接疑問構文、二文連置構文（主に背景注釈型)、間接感嘆構文に集中していることが分かった。これは、韓国語には「-는지（-neunji)」とは異なる別の表現形式があり、この別の表現形式が、一部の間接疑問構文の、代わりの役割を果たしているためだと思われる。とくに背景注釈型の二文連置構文が多く、カ節が後ろに続く節の原因・理由を表している文が多い点が日本語の間接疑問構文とは異なる特徴であった。

複雑述語の間接疑問構文は、韓国語も日本語と同様に、疑問節と「補足語＋述語」の間には、「는（は)」のような副助詞をつけることは可能だが、「가（が)、을/를（を)、에（に)、과/와（と)、에서（で)、의（の)」などの格助詞をつけることは不可能であることが分かった。

間接感嘆構文の場合、韓国語のほうが日本語に比べ、間接感嘆構文の数が11倍で、圧倒的に多いことが分かった。これは韓国語の間接疑問構文の発達において、他の表現形式との何らかの関わりもあり、そのようになったと思われるが、具体的な理由については、今後検討する必要がある。日本語の間接感嘆構文には「如何に」が使われている文が多く、韓国語の場合も、「얼마나（eolmana)」が使われている部分が類似していた。しかし、日本語の間接感嘆構文の主節述語は、間接疑問構文の主節述語とはやや異なるものだが、韓国語の間接感嘆構文を構成する主節述語は、間接疑問構文の主節述語と大きな差はなかった。このことは、韓国語のほうが日本語に比べ、間接感嘆構文の文法化がより進んでいることを意味する。

間接疑問節の疑問文のタイプは、日本語も韓国語も疑問詞疑問と肯否疑問の割合が大きい点が一致していた。また、日韓両言語とも、周辺的な構文より、典型的な間接疑問構文のほうが、疑問詞疑問をより積極的に使用しているということが分かった。日本語も韓国語も間接疑問構文の主節述語として動詞以外に、形容詞が来ることがあり、それらの具体的な例が両言語において、確認できた。韓国語の場合、間接疑問構文の主節述語としてメトニミー的拡張による述語が来るのは、日本語に比べ相対的に難しいことが確認できた。言い換えれば、日本語は「Xがわからなくて Yになる・Yをする」から、動詞表現の「わからなくて」が省略できるが、韓国語は省略ができないということである。韓国語の場合は、事態を具体的且つ説明的に動詞を用いて動的に捉えようとする傾向があるため、動詞表現の省略が難しいことが明らかになった。さらに、間接疑問構文の主節述語は、韓国語は未決タイプの割合が、日本語は対処タイプの割合が一番大きいところが異なっていることが分かった。未決タイプ、対処タイプ、既決タイプの順で発達した歴史的な発展のことを考慮すると、韓国語は未決タイプの割合が、日本語は対処タイプの割合が一番大きいということは、日本語の間接疑問構文のほうが韓国語に比べ、より発達している可能性が高いことを意味していると思われる。本研究では韓国語の間接疑問構文の発達の歴史について直接的に調査を行わなかった。韓国語の間接疑問構文と日本語の間接疑問構文の歴史的な変遷は異なる可能性があるため、今後検討する必要があるだろう。また、韓国語の間接疑問構文には、日本語では見られなかった従属節の「-는지（-neunji)」と主節述語の順番が逆の「主節述語. -는지 （말이야（mariya）/말이다（marida))」の構造を持つ倒置文が、全体の500例の中で、8例見つかった。現代日本語においても同じような構文があるのかについては検討の余地がある。

以上のように、第６章では、日本語の間接疑問構文と韓国語を対照したことで、韓国語の間接疑問構文についての議論を可能とし、前進させた。さらに、両言語の間接疑問構文における共通点と相違点を明らかにした。

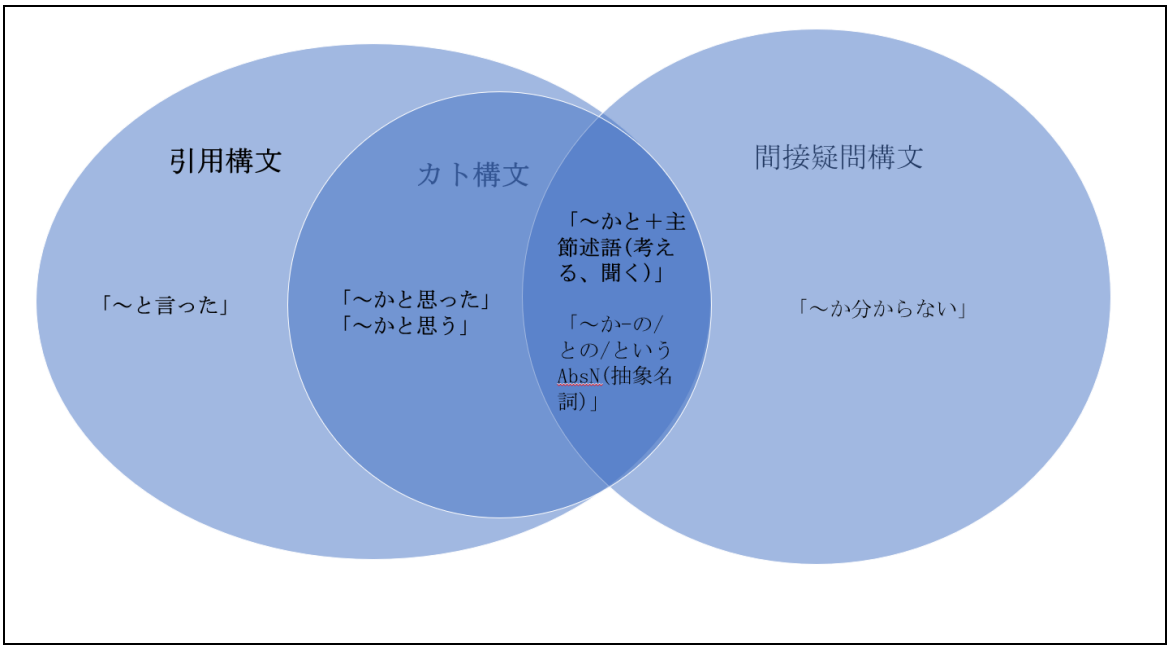
2　本論文の結論

本研究では、「彼女も今日は来るのか」のようなカ節を、文中に持つ構文、つまり、カ節を持つ構文について考察を行った。カ節を持つ構文には、カト構文や「～かと思う」構文のような引用構文、カノ構文や内容構文のような間接疑問構文がある。引用構文は、引用のマーカーで

ある「と」が用いられ、引用節と述語が「具体－抽象」の関係を持つ構文（藤田2000）で、間接疑問構文は、疑問のカ節が述部と意味的呼応関係を成している構文（藤田1983）である。両構文は「引用」と「疑問」という異なるタイプの文であり、互いに共通する部分がないように見えるものの、引用構文の中には、カ節を引用している文があり、その一部は「と」を省略し、間接疑問構文にできるタイプがあった。両構文はまったく関係のないものではなく、一部似通う部分があるという点が、この論文の出発点となった。

形式的にカ節を引用しているように見えるカト構文は、一般的に主語が１人称であり、日常生活の中で、頻繁に使われている。特に、主節述語が「思う」で、平叙節を「かと思う」が受けるタイプである、非現実性認識や断定和らげの「～かと思った/思う」は、使用頻度が高いと思われる。そのため、引用構文の中でも中心に位置すると考えられる。一方、一般的に主語が３人称であり、主節述語が「言う」の引用構文は、カト構文よりは、他人が話した内容を伝える「～と言った」がより典型であると考えられる。また、間接疑問構文は、主語が１人称の「～か分からない」が中心に位置すると考えられる。この内容を「引用構文と間接疑問構文の体系」として次の【図10】に提示しておく。

【図10】引用構文と間接疑問構文の体系



【図10】の引用構文と間接疑問構文の共通集合の箇所に書いた、主節述語が「考える」、「聞く」のカト構文は、引用構文であるが、「と」を省いても文全体の意味は大きく変わらず、間接

疑問構文の対処タイプとしても認められる。また、同じように共通集合の箇所に書いた、「～かのAbsN（抽象名詞）」のカノ構文の一部、すなわち、選言文に関わるカノ構文は、間接疑問構文であるが、第４章で述べたように、修飾節の文が疑問文の形をしているものの、選言文に近いため、疑問の答えよりは修飾節自体の局面に注目している。つまり、間接疑問構文でありながら、引用構文の性質を持っていると考えられる。

しかし、典型的な引用構文というのは、カ節の疑問に対する答えではなく、カ節で述べられている内容自体、つまり、カ節の具体的な内容全体に意味的な焦点を当てている。一方、典型的な間接疑問構文というのは、カ節の疑問に対する答えに意味的な焦点を当てている。このような両構文の差は、両構文の根本的な性質が次のように異なるためである。つまり、引用構文であるカト構文は、基本的に思ったことや、言われたことなど、知っていることを伝える性格の文であるが、間接疑問構文は、基本的に疑問に思っていることや分からないことを表現する性格の文である。また、こうした意味的な違いは、第５章の2節で述べた、両構文の構造形式的な違いにも表れる。

最後に、韓国語の「-는지（-neunji）」が日本語の「～か」のような意味と役割を果たしているため、日本語の間接疑問構文に対応する韓国語の間接疑問構文は、「-는지（-neunji）」で構成される従属節を持つ文であることを明らかにした。また、韓国語の間接疑問構文と、日本語の間接疑問構文が、どのような点で異なっているのかを具体的に調べた。さらに、それらの相違点は、両言語の間で、間接疑問構文の発達の程度、同じ事態に対する捉え方などにおいて、差があるためだということが判明した。

3　今後の課題

本研究では、カ節を持つ構文に、どのような構文があるのか、それらの下位にはどのようなタイプがあるのか、また、カ節を持つ引用構文（カト構文）と間接疑問構文が互いにどのような相関関係があるのかなどについて、調査した。以下に、今後の研究に役に立つと思われる、いくつかの課題を示す。

１つ目に、「～かと思う」の下位タイプにおいて、文体による偏りがあるのか否かについて、詳しく検討する必要がある。具体的には、小説の地の文と会話文の間で、主節主語の人称の差を含め、よく使われる下位タイプに、どのようなものがあるのか、その割合はどのように異な

るのかなどを調べる必要がある。

２つ目に、カノ構文の用例数を増やし、本研究で見つかっていない別のタイプがあるのかを調べたい。また、カノ構文の名詞修飾節と、通常の名詞修飾節との差についても明らかにしたい。その過程の中で、カノ構文の「の」がどのような役割を果たしているのかについて考察を深めたい。また、本研究の観察が、連体修飾の基本理論にどう位置づけられるかということを考え、「の」と「という」の異なる部分を、より一般的な観点から説明できるようにしたい。場合によっては、連体修飾のパターンにおいて、新たな観点を導くことができると思われる。

３つ目に、引用構文であるカト構文の一部のタイプは、間接疑問構文に類似している性質を持っており、その部分で両構文は似通う部分があると述べた。しかし、この２つの構文の統語論的な位置づけの違いについては明確に説明できなかった。例えば、カト構文を含む引用構文の従属節は、照応形を使って表すと、副詞的な「そう」で表すことができる。一方、間接疑問構文の従属節は、名詞的な「それ」で表すことができる。これは両構文が統語論的に異なるところに位置づけられる可能性を示唆している。

４つ目に、カト構文に埋め込まれている疑問文は、主文の疑問文である可能性について検討したい。間接疑問構文は、「～かどうか」を用いることができるが、「～かと思う」構文を含むカト構文は「～かどうか」を用いることができない。これはカト構文が間接疑問ではないことを意味する。また、主文の疑問文に終助詞の「な」を付けた「～かな」で終わる文は、「～かと思う」構文とその性質が重なる部分がある。例えば、「～かな」で終わる文において、「な」は文全体が聞き手に対し直接働きかけないようにする性質を与える。「～かと思った」も同様の制約を埋め込み節に与えるとすれば、埋め込まれているのは主文の疑問文である可能性が出てくる。今後はその可能性についても検討したい。

５つ目に、韓国語には「-는지 (-neunji)」とは異なる別の表現形式があり、この別の表現形式が、一部の間接疑問構文の代わりの役割を果たしていると予想されるが、実際どのような表現形式があるのか、それの性質や特徴を明らかにしたい。本研究では韓国語の間接疑問構文の発達の歴史について直接的に調査を行わなかった。しかし、韓国語の間接疑問構文と日本語の間接疑問構文の歴史的な変遷は異なる可能性があるため、今後、韓国語の間接疑問構文の歴史的発達についても検討する必要があるだろう。また、韓国語の引用構文についても調査を行い、間接疑問構文とはどのような関係を結んでいるのかを明らかにしたい。

６つ目に、カ節ではなく平叙文を引用している「～と＋主節述語」の引用構文について、どのような構文タイプがあるのか、また文体による差はあるのかなどについても考察したい。

参考文献

阿部忍 (2012)「日本語の補足節と代用形 : 引用節とその周辺」『神戸山手大学紀要』14, pp. 129-137.

庵功雄他 (2001)『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

稲田俊明 (2007)「間接感嘆文の認可条件と言語機能」『文學研究』104, pp. 51-77.

이익환 (Lee Ikhwan) (1980) 「의문문의 의미」 『어학연구』16(2), 서울대학교 언어교육원, pp. 143-158.

이영민 (Lee Yeongmin) (1995) 「내포문 의문 어미 '-ㄴ지'에 대한 고찰」 『서강어문』11 (0) , pp. 61-84

이지영 (Lee Jiyeong) (2008)「'-은지' 와 '-을지' 의 통시적 변화」,『국어학』53, 국어학회, pp. 113-140.

이맹성 (1968)「Nominalization in Korea」,『Language Research』4(1), 서울대학교 어학연구소.

임홍빈 (Im Hongbin) (1974)「주격 중출론을 찾아서」,『문법연구』1, 문법연구회

井本亮 (2004)「誇張表現としてのホド構文」『日本語と日本文学』39, pp. 1-15.

林八龍 (2004)「日・韓両語の表現構造の対照研究-日本語の名詞的表現に対する韓国語の動詞的表現を中心に-」『日語日文学研究, 韓国日語日文学会』50 (1), pp. 211-233.

江口正 (1990)「日本語の間接疑問文の構文論的特徴―数量詞・不定代名詞との類似点について―」『九大言語学研究室報告』11, pp. 40-53.

江口正 (1992b)「間接疑問節と格標識」KLS (12), pp. 120-129.

江口正 (1994)「間接疑問節が二つ共起する文について」『九大言語学研究室報告』15, pp. 70-81.

江口正 (1996)「間接疑問節の担う意味役割―特に「決め手」解釈について」『愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編』28, pp. 343-358.

江口正 (1998a)「日本語の間接疑問節の文法的位置づけについて―不定的同格要素として―」『九大言語学研究室報告』19, pp. 5-24.

江口正 (1998b)「引用節・間接疑問節と内容名詞句の共起関係について」『愛知県立大学外国語学部紀要 言語・文学編』30, pp. 325-344.

江口正（2002）「『AはB次第だ』の解釈について―値の間の相関関係―」『福岡大学日本語日本文学』12, pp.71-82.

江口正（2013）「間接疑問節をとる述語の類型と項構造」日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究，第1回研究発表会（2013年9月2日，国立国語研究所）ハンドアウト.

江口正（2022）「間接疑問節と結びつく述語について」『中部日本・日本語学研究論集』研究叢書 542，pp.35-54.

大浦賢治（2007）「選言文解釈に関する先行研究の概観とその問題点」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊15-1，pp.47-57.

尾上圭介（2006）「存在承認と希求―主語述語発生の原理」『国語と国文学』第 83 巻，第 10 号，pp.1-13，至文堂.

오승신（O Seungsin）（1986）「‘-ㄴ지’의 통사적 기능 전이에 따른 의미변화 연구」，이화여대 석사학위논문

奥田靖雄（1968-72）「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」（言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房），pp.21-149.

加藤陽子（2010）『話し言葉における引用表現～引用標識に注目して～』くろしお出版.

衣畑智秀・岩田美穂（2010）「名詞句位置のカの歴史―選言・不定用法を中心に―」『日本語の研究』6(4)，pp.1-15.

Kinuhata, Tomohide (2012) Historical development from subjective to objective meaning: Evidence from the Japanese question particle ka. Journal of Pragmatics 44(6-7): 798-814.

衣畑智秀(2014)「日本語疑問文の歴史変化-上代から中世-」青木博史・小柳智一・高山善行(編)『日本語文法史研究２』，pp.61-80，ひつじ書房.

김다미（Kim, Da Mi）（2018）「한국어 어미 ‘-ㄴ지’의 통사와 의미 연구」『서울대학교 대학원 석사학위 논문』，pp.1-102.

工藤 浩（1989）「現代日本語の文の叙法性序章」『東京外国語大学論集』39（工藤2016『副詞と文』pp.227-253（ひつじ書房）に再録）

Goldberg, Adele E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language.* New York: Oxford University Press.

砂川 有里子（1987）「引用文の構造と機能-引用文の 3 つの類型について - 」『文芸・言語研究. 言語篇』13，pp.73-91.

砂川 有里子（1988）「引用文の構造と機能（その 2）:引用句と名詞句をめぐって」『文芸・言語

研究.言語篇』14, pp.75-91.

砂川有里子（1989）「引用と話法」北原保雄（編）『講座日本語と日本語教育第4巻日本語の文法・文体（上）』明治書院.

서정목（Seo Jeongmok）（1991）「내포 의문 보문자'-(으)ㄴ+가'의 확립」『석정 이승욱 선생 회갑기념논총』

서정목（Seo Jeongmok）（1994）「국어 통사 구조 연구 1-구절구조,의문법,경어법」,서강대학교 출판부,pp.208-237.

서희정（Seo,Hui Jeong）（2016）「한국어학습자를 위한 명사절과 종속절 형성의 "-는지" 교육 연구」『한국어 교육』27（2）, pp.105-142.

志波彩子（2015）「日本語の間接疑問構文の発達をめぐって―近代から現代へ―」日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究, 第6回研究発表会（NINJAL）ハンドアウト.

志波彩子（2016）「近代日本語の間接疑問構文とその周辺」『国立国語研究所論集』10, pp.193-220.

清水まさ子（2010）「先行研究を引用する際の引用文の文末表現―テンス・アスペクト的な観点からの一考察―」『日本語教育』147,pp.52-66

정재영（Jeong Jaeyeong）（1996）『의존명사 '다' 의 문법화』,태학사

鄭夏俊（1999）「『～かと思う』の意味と用法」『日本學報』(42), pp.95-111.

全弘起（2020）「「～かと思う」構文の体系―下位タイプの種類と相互関係―」『日本語文法』20(2), pp.91-107.

高橋圭介（2009）「『思う』の多義構造再考一文法化の進んだ『と思う』の位置付けをめぐって一」福島工業高等専門学校「研究紀要」50, pp.167-174.

高宮幸乃（2003）「現代日本語の間接疑問文とその周辺」『三重大学日本語学文学』14, pp.104-116.

高宮幸乃（2004）「ヤラ（ウ）による間接疑問文の成立:不定詞疑問を中心に」『三重大学日本語学文学』15, pp.111-124.

高宮幸乃（2005）「格助詞を伴わないカの間接疑問文について」『三重大学日本語学文学』16, pp.92-104.

차현실（Cha Hyeonsil）（1987）「명사화 어미 범주 체계화 시론-{-기}, {-음}, {-지}, {-ㄴ지}를 중심으로-」,『한국문화논총』52,이화여자대학교 한국문화연구원,pp.71-90.

최정도·김문기（Choi Jeongdo・Kim Mungi）（2013）「'-ㄴ지' 의 문법적 지위에 대한 비판적 고찰-내포문에서의 쓰임을 중심으로」,『우리말연구』33집,pp.5-31.

辻本桜介（2020）「引用構文における「言って」「思って」の伏在という幻想―大島(2017)、Shimamura(2018)等に対する批判的検討―」『米子工業高等専門学校研究報告』55, pp.5-31

寺村秀夫（1977）「連体修飾のシンタクスと意味―その3―」『日本語・日本文化』6.大阪外国語大学留学生別科（寺村秀夫（1993）pp.261-296に再録.）

Tomioka, Satoshi, and Jooyoung Kim（2016）A new embedding strategy: Purposeful questions in Japanese and Korean.In Proceedings of the Workshop on Altaic Formal Linguistics (WAFL) 12.

Nakada, Seiichi（1979）"Aspects of Interrogative structure" 開拓社.

中田清一（1984）「疑問文のシンタックスと意味」『日本語学』3(8),pp.8-30.

남기심・고영근（Nam Gisim・Go Yeonggeun）（1987）『표준국어문법론』탑출판사

二通信子（2009）「論文の引用に関する基礎的調査と引用モデルの試案」『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』1,pp.65-74.

仁田義雄（2000）「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩編『日本語の文法 3 モダリティ』pp.79-159, 岩波書店.

日本語記述文法研究会（2003）『現代日本語文法6第11部複文』くろしお出版.

日本語記述文法研究会編（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部 複文』くろしお出版.

하치근（Ha Chigeun）（2006）「‘지 짜임월’의 문법화 과정 연구」,『우리말연구』18 집, pp.27-55.

林 淳子（2017）「疑問文・疑問表現研究史」『日本語学論集（13)』, pp. 105-136.

林 順子（2019）「発話としての文末「カ」の文」『日本語と日本語教育（47)』, pp.1-18.

박기선（Park, Ki Seon）（2012）「한국어 간접의문문 형식의 사용 양상 연구 -말뭉치 분석을 통한 ‘-냐고’의 통합 양상을 중심으로-」『한국어의미학』39, pp.175-203.

平木孝典（2015）「日韓対照言語表現研究－日本語の体言的表現と韓国語の用言的表現－」『千葉科学大学紀要』(8), pp.23-37.

藤田保幸（1983）「従属句「～カ（ドウカ)」の述部に対する関係構成」『日本語学』2-2, pp.76-83.

藤田保幸（1985）「「内的引用」における話法の転換について―話法の転換の a 線―」『語文』46, pp.14-21,大阪大学国語国文学会.

藤田保幸（1986）「文中引用句「～と」による引用を整理する―引用論の前提として―」宮地裕編『論集日本語研究（一）現代編』, 明治書院.

藤田保幸（1991）「「聞く」を述語とする引用表現について」『国語国文学報』（愛知教育大学）(49)，pp.35-48.

藤田保幸（1997）「従属句「～カドウカ」再考」『滋賀大学教育学部紀要.II,人文科学・社会科学』47，pp.151-160.

藤田保幸（1999）「引用構文の構造」『国語学』第198集，pp.1-15.

藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院.

本田皛治（1995）「埋め込み文の文末助詞「か」の二面構造」″Ars Linguistica, Linguistic Studies of Shizuoka″ vol.2 pp.139-150.

本田皛治（2003）「格関係と題述関係―「か」疑問節をめぐって」『日本語学』22(5):pp.64-72. 明治書院.

益岡隆志（2007）『日本語モダリティ探究』くろしお出版.

宮崎和人（1999）「モダリティ論から見た「～と思う」」『待兼山論叢日本語学篇』第33号,pp1-16.

森山卓郎（1992a）「疑問型情報受容文をめぐって」『語文』59，pp.35-44.

森山卓郎（1992b）「文末思考動詞「思う」をめぐって―文の意味としての主観性・客観性」『日本語学』11（9），pp.105-116.

森山卓郎（1995）「『伝聞』考」『京都教育大学国文学会誌』26，pp.25-36.

森山卓郎（2000）「『と言える』をめぐって―テクストにおける客観的な妥当性の承認―」『言語研究』118，pp.55-79.

山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院.

양정석（Yang, Jeong Seok）（2021）「한국어 의문 구문의 형식문법: 양상 이론적 접근」『배달말』69（0），pp.91-145.

横田淳子(1998)「「～と思う」およびその引用節内の動詞の主体について」『東京外国語大学　留学生日本語教育センター論集』24,pp.101-117

使用コーパス

１．現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版（BCCWJ-NT）　中納言2.4 データバージョン1.1
https://chunagon.ninjal.ac.jp/bccwj-nt/search

２．名大会話コーパス 中納言2.4.2 データバージョン2018.2
https://chunagon.ninjal.ac.jp/nuc/search

３．국립국어원‘모두의 말뭉치’ 문어 말뭉치（버전 1.0）

（国立国語院「みんなのマルムンチ」文語のマルムンチ（バージョン 1.0））
https://corpus.korean.go.kr

初出一覧

第１章　書き下ろし

第２章　書き下ろし

第３章　「「～かと思う」構文の体系―下位タイプの種類と相互関係―」(『日本語文法』20(2), pp. 91-107. 日本語文法学会，2020 年）を基に，大幅に加筆・修正を行った。

第４章　「間接疑問の名詞修飾用法の種々相－「～カノ N」節と被修飾名詞 －」(『日本研究』89，pp. 213-239，韓国外国語大学日本研究所，2021 年）を基に大幅に加筆・修正を行った。

第５章　書き下ろし

第６章　書き下ろし

第７章　書き下ろし

謝辞

本研究は、筆者が名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士前期課程と人文学研究科博士後期課程在籍中の研究成果をまとめたものです。本研究を遂行するにあたり、大変多くの方々にご指導とご協力をいただきました。

この研究を諦めずに最後まで続けられるよう、暖かく見守って下さった指導教官でいらっしゃる志波彩子先生に、心より深く感謝申し上げます。志波先生には、研究の着想から、調査、論文執筆まで多くのご指導をいただきました。また、研究における論理的な考え方や進め方、研究者としての姿勢まで教えていただきました。先生の授業やゼミナールの場では、構文文法に関する専門分野としての知識や日本語文法の全般に関する幅広い理論を身に着けることができました。ほぼ７年間の長い間、本当にお世話になりました。思い起こすことが多すぎ、上手くまとまらなくなりましたが、志波先生にご指導を受けたことは、一生忘れないと思います。

本研究の審査においては、名古屋大学大学院人文学研究科の杉村泰教授、林誠教授、福岡大学人文学部日本語日本文学科の江口正教授から、大変貴重なご指摘、ご助言を賜りました。心よりの感謝をお伝えしたいと思います。また、名古屋大学大学院人文学研究科の堀江薫教授、鷲見幸美准教授、秋田喜美准教授にも授業や研究会でご指導やご助言を賜りました。深謝申し上げます。先生方から頂いたご指摘やご助言は、今後の研究に大いに活かしていきたいと思います。

名古屋大学の大学院生の皆様からは、ゼミナールで本研究について様々なご意見や新しい観点をいただくことができ、篤く感謝を申し上げます。特に、博士後期課程の齊藤都さんには、本研究の日本語の修正を何度もしていただき、本研究の最後まで暖かく励ましていただきました。心より御礼を申し上げます。

最後に、留学生活を支えてくれた家族に感謝します。

全　弘起